

かき きこ
柿 迫 遺 跡
りゅう せん じ
龍 泉 寺 遺 跡

倉岡ニュータウン土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

正誤表

| 訂正箇所 | 誤 | 正 |
|---|-------------------------|------------------------------------|
| 挿図目次 第三章 柿迫遺跡 | 図4 A・B・C区遺構分布図 | 図4 A・B・D区遺構分布図 |
| 挿図目次 第四章 龍泉寺遺跡 | 図6 1号基壇 遺構・出土遺物実測図 | 図6 1号基壇 遺構・出土遺物実測図 |
| | 図7 2号基壇 遺構実測図 | 図7 2号基壇 遺構実測図 |
| | 図8 2号基壇 遺構・出土遺物実測図 | 図8 2号基壇 遺構・出土遺物実測図 |
| | 及び鏡貨拓影 | 及び鏡貨拓影 |
| | 図10 3号基壇 遺構・出土遺物実測図 | 図10 3号基壇 遺構・出土遺物実測図 |
| | 及び本体部拓影 | 及び本体部拓影 |
| | 図11 3号基壇 出土遺物実測図 | 図11 3号基壇 出土遺物実測図 |
| 図版目次 第三章 柿迫遺跡 | 図版2 D全景 | 図版2 D区全景 |
| 本文16頁8行 | 外名には～ | 外面には～ |
| 本文36頁5行 | 上面平垣部には～ | 上面平垣部には～ |
| 本文36頁2行 | 143～145は同一固体 | 143～145は同一固体 |
| 37頁 図27右下 | 遺状遺構①～③ | 遺状遺構①～③ |
| 本文37頁14行 | 6つの平垣面 | 6つの平垣面 |
| 41・42頁 図29 遺状遺構アミ範囲 | (文字なし) | 線範囲 |
| 76頁 表2 遺物番号24・30・31の出土地点・層 | 2 BG | 9 CG |
| | 3 BG | 10 CG |
| 78頁 表2 遺物番号58の出土地点・層 | 3 BG | 10 CG |
| 79頁 表3 遺物番号149・150・152の出土地点・層 | 3 BG | 10 CG |
| | 3 CG | 10 DG |
| 81頁 表3 遺物番号224・229・232・245・247・250・252・255・256の出土地点・層 | 3 DG | 10 EG |
| | 4 BG | 11 CG |
| | 4 DG | 11 EG |
| | 4 EG | 11 FG |
| 82頁 表3 遺物番号258・262・264・266・270・276・280・286の出土地点・層 | 3 BG | 10 CG |
| | 3 DG | 10 EG |
| | 3 EG | 10 FG |
| | 4 BG | 11 CG |
| | 4 DG | 11 EG |
| 83頁 表4 遺物番号240の出土地点 | 4 BG | 11 CG |
| 84頁 表5 遺物番号90の出土地点 | 3 BG | 10 CG |
| 86頁 表5 遺物番号124・129の出土地点 | 3 BG | 10 CG |
| 87頁 表6の項目 | 柄穴 | 柄穴 |
| 88頁 表7 遺物番号297の出土地点 | 4 DG | 11 EG |
| 本文111頁 26行 | 最終的には丘陵北 | 最終的には丘陵北斜面平垣地に中世後半から近世にかけての遺跡となった。 |
| 本文117頁 9行 | 22～27は鉄釘である。 | 22～28は鉄釘である。 |
| 本文127頁 表2 | 出土遺物観察表 | 出土遺物計測表 |
| 本文128頁 1行 | 改葬された龍泉寺霊園がある。 | 改葬された龍泉寺霊園がある。 |
| 本文129頁 18行 | 「寛政二年 ⁸ 。……」 | 「寛政二年 ⁸ 。……」 |
| 本文130頁 3行 | 鎌岩源佛信士 | 鎌岩源佛居士 |
| 本文130頁 25行 | 龍泉寺霊園を改葬寺に | 龍泉寺霊園を改葬時に |
| 本文131頁 7行 | 11～19は無縁塔で、 | 11～18は無縁塔で、 |

かき さこ
柿 迫 遺 跡

りゅう せん じ
龍 泉 寺 遺 跡

倉岡ニュータウン土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

宮崎県埋蔵文化財センター

序

この報告書は、宮崎県教育委員会が宮崎県住宅供給公社の委託を受けて、平成9年度から平成11年度にかけて、倉岡ニュータウン土地区画整理事業に伴う柿迫地区と龍泉寺地区に確認された遺跡の発掘調査記録であります。

遺跡の所在する宮崎市北西の大淀川中流域は旧石器時代から縄文・弥生時代、古墳時代と多くの遺跡が存在するところであり、歴史時代にも高津氏と伊東氏の攻防がみられる大変重要な拠点の一つであります。今回の調査では縄文時代～古墳時代の遺構及び中・近世の遺構が確認されました。この成果は当地域の歴史を解明するうえで重要なものであります。

今後、本書が文化財の啓発・保護並びに学術研究等に役立てば幸いに存じます。

最後に発掘調査に際し、多大なるご協力を頂いた関係各位に対して、心より感謝申し上げます。

平成14年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 矢野 剛

例 言

- 1 本書は倉岡ニュータウン上地区画整理事業に伴い、宮崎県住宅供給公社の委託を受けて県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の期間は柿迫遺跡が平成9年10月8日～平成10年3月31日及び平成10年4月20日～平成10年9月29日、龍泉寺遺跡が平成11年8月2日～平成11年11月11日である。
- 3 現地での遺構実測図・写真撮影は、大村公美恵、福松東一、高橋浩子、日高敬子ほか調査員が行った。
- 4 遺物実測・図面作成・トレースは、大村、福松、高橋、口高ほか整理作業員の協力を得た。
- 5 本書の執筆にあたっては、第1章第1節は宮崎県文化課主査 重山郁子が、柿迫遺跡は高橋が、龍泉寺遺跡の遺物は大村が、遺構とその他は福松が行った。
- 6 土層及び土器の色調については「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修）に拠る。
- 7 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図を基に作成した。
- 8 本書で使用した方位は柿迫遺跡では磁北、龍泉寺遺跡では座標北（座標第Ⅱ系）である。レベルは海抜絶対高である。
- 9 陶磁器類については、九州陶磁資料館の家田淳一氏より多くのご教示をいただいた。
- 10 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

| | | | | | |
|-----------|-----|---------|-----|--------|-----|
| 掘立柱建物跡…… | S B | 土坑…………… | S C | 溝状遺構…… | S E |
| 築石遺構…………… | S I | 堅穴状遺構…… | S Z | | |
- 11 本書の編集・構成は福松、高橋が担当した。
- 12 出土遺物・その他諸記録1は、宮崎県埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管している。

本文目次

| | | |
|-------|--------------------|-----|
| 第1章 | はじめに | |
| 第1節 | 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 | 調査の組織 | 1 |
| 第II章 | 遺跡の立地と歴史環境 | 2 |
| 第III章 | 柿迫遺跡 | |
| 第1節 | 遺跡の立地と環境 | 5 |
| 第2節 | 遺跡の層序 | 6 |
| 第3節 | 調査区の設定と概要 | 7 |
| 第4節 | 遺構と遺物 | |
| | (1) 縄文時代の遺構と遺物 | 12 |
| | (2) 弥生時代から古墳時代の遺物 | 36 |
| | (3) 歴史時代の遺構と遺物 | 37 |
| | (4) 時期不明の遺構と遺物 | 70 |
| 第5節 | まとめ | 89 |
| 第VI | 龍泉寺遺跡 | |
| 第1節 | 調査の概要と経過 | 111 |
| 第2節 | 調査の成果 | |
| | (1) 遺構 | 114 |
| | (2) 遺物 | 120 |
| | (3) 龍泉寺墓地周辺の墓石と石塔類 | 128 |
| 第3節 | まとめ | 136 |

挿図目次

| | | |
|-------|--------------------|------|
| 第II章 | | |
| 図1 | 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 3 |
| 第III章 | 柿迫遺跡 | |
| 図1 | 柿迫遺跡周辺地形図 | 5 |
| 図2 | 遺跡の層序 | 6 |
| 図3 | グリッド配置図 | 8 |
| 図4 | A・B・C区遺構分布図 | 9~10 |
| 図5 | C区遺構分布図 | 11 |
| 図6 | S I I 実測図 | 13 |
| 図7 | S C I 実測図及び土層断面実測図 | 14 |
| 図8 | S Z I 実測図及び土層断面実測図 | 15 |
| 図9 | 縄文土器実測図 (1) | 17 |
| 図10 | 縄文土器実測図 (2) | 18 |

| | | |
|-----|-----------------------------|-------|
| 図11 | 縄文土器実測図 (3) | 19 |
| 図12 | 縄文土器実測図 (4) | 20 |
| 図13 | 石器実測図 (1) | 23 |
| 図14 | 石器実測図 (2) | 24 |
| 図15 | 石器実測図 (3) | 25 |
| 図16 | 石器実測図 (4) | 26 |
| 図17 | 石器実測図 (5) | 27 |
| 図18 | 石器実測図 (6) | 28 |
| 図19 | 石器実測図 (7) | 29 |
| 図20 | 石器実測図 (8) | 30 |
| 図21 | 石器実測図 (9) | 31 |
| 図22 | 石器実測図 (10) | 32 |
| 図23 | 石器実測図 (11) | 33 |
| 図24 | 石器実測図 (12) | 34 |
| 図25 | 石器実測図 (13) | 35 |
| 図26 | 弥生～古墳時代出土土器実測図 | 36 |
| 図27 | 柿迫遺跡縄張り図及び周辺地形図 | 37 |
| 図28 | B区造成土層断面図 (A～A') | 39～40 |
| 図29 | 遺状遺構●実測図及び土層断面図 | 41～42 |
| 図30 | 道上遺構●・斜面◇・平場⑤出土遺物実測図 | 44 |
| 図31 | 土塁状遺構出土遺物実測図 | 45 |
| 図32 | S B 1 実測図 | 47 |
| 図33 | S B 2・3 実測図及びP41出土遺物実測図 | 48 |
| 図34 | S B 4 実測図及びP2・54出土遺物実測図 | 49 |
| 図35 | S B 5・6 実測図及びP21出土遺物実測図 | 51 |
| 図36 | S B 7 実測図 | 52 |
| 図37 | S B 8 実測図及びP33出土遺物実測図 | 53 |
| 図38 | P45・46・49実測図及び出土遺物実測図 | 54 |
| 図39 | S B 9 実測図及びP5・8・9・13出土遺物実測図 | 55～56 |
| 図40 | P47・48実測図及び出土遺物実測図 | 58 |
| 図41 | ピット出土遺物実測図 | 60 |
| 図42 | S C 3 実測図及び出土遺物実測図 | 61 |
| 図43 | S E 1～3 遺構分布図及び土層断面実測図 | 62 |
| 図44 | S E 1～3 出土遺物実測図 | 63 |
| 図45 | 礫群2 実測図及び出土遺物実測図 | 64 |
| 図46 | 出土遺物実測図 (1) | 65 |
| 図47 | 出土遺物実測図 (2) | 67 |
| 図48 | 出土遺物実測図 (3) | 68 |

| | | |
|------------|-----------------------|-----|
| 図49 | 出土遺物実測図(4)及び銭貨拓影 | 69 |
| 図50 | S B 10実測図 | 70 |
| 図51 | S C 2実測図及び十層断面実測図 | 71 |
| 図52 | S C 4・5実測図及び十層断面実測図 | 72 |
| 図53 | S C 6実測図及び出土遺物実測図 | 73 |
| 図54 | S C 7実測図 | 74 |
| 第IV章 龍泉寺遺跡 | | |
| 図1 | 周辺地形図 | 112 |
| 図2 | 遺跡周辺図 | 113 |
| 図3 | C区遺構及び石塔類分布図 | 113 |
| 図4 | 土坑実測図 | 114 |
| 図5 | 池状遺構実測図 | 114 |
| 図6 | 1号基壇遺構・出土遺物実測図 | 115 |
| 図7 | 2号基壇遺構実測図 | 116 |
| 図8 | 2号基壇出土遺物実測図及び銭貨拓影 | 117 |
| 図9 | シキハギによる釘打ち図 | 117 |
| 図10 | 3号基壇遺構・出土遺物実測図及び本体部拓影 | 118 |
| 図11 | 3号基壇出土遺物 | 119 |
| 図12 | 出土遺物実測図(1) | 120 |
| 図13 | 出土遺物実測図(2) | 121 |
| 図14 | 出土遺物実測図(3)及び銭貨拓影 | 123 |
| 図15 | 出土遺物実測図(4) | 124 |
| 図16 | 出土遺物実測図(5) | 125 |
| 図17 | 龍泉寺墓地周辺図 | 128 |
| 図18 | 龍泉寺墓地周辺石塔類実測図(1) | 129 |
| 図19 | 龍泉寺墓地周辺石塔類実測図(2) | 130 |
| 図20 | 龍泉寺墓地周辺石塔類実測図(3) | 132 |
| 図21 | 龍泉寺墓地周辺石塔類実測図(4) | 133 |
| 図22 | 龍泉寺墓地周辺墓石実測図 | 134 |
| 図23 | 「龍泉寺」(三国名勝図絵より) | 137 |

表 目 次

第III章 柿迫遺跡

| | | |
|----|---------------------|-------|
| 表1 | ビット出土遺物一覧 | 59 |
| 表2 | 柿迫遺跡 縄文土器観察表(1)~(4) | 75~78 |
| 表3 | 柿迫遺跡 遺物観察表(1)~(5) | 79~83 |
| 表4 | 柿迫遺跡 土鍾計測表 | 83 |
| 表5 | 柿迫遺跡 石器計測表(1)~(4) | 84~87 |

| | | |
|------------|-------------|---------|
| 表6 | 柿迫遺跡 石塔類計測表 | 87 |
| 表7 | 柿迫遺跡 銭貨一覽 | 88 |
| 第IV章 龍泉寺遺跡 | | |
| 表1 | 出土遺物觀察表 | 126~127 |
| 表2 | 出土遺物計測表 | 127 |
| 表3 | 墓石・石塔類形態分類表 | 135 |

図 版 目 次

第III章 柿迫遺跡

| | | |
|------|---|-----|
| 図版1 | 柿迫遺跡周辺地形(北西より) / 柿迫遺跡周辺地形(南東より) | 91 |
| 図版2 | C区全景(東より) / D区全景(南西より) | 92 |
| 図版3 | SI1 / 縄文土器(1) | 93 |
| 図版4 | SZ1 / 縄文土器(2) | 94 |
| 図版5 | 石器(1) / 石器(2) | 95 |
| 図版6 | 石器(3) / 石器(4) | 96 |
| 図版7 | 石器(5) / 石器(6) | 97 |
| 図版8 | 石器(7) / 弥生~古墳時代の土器 | 98 |
| 図版9 | B区全景(南東より) / B区造成土層断面(北東より) | 99 |
| 図版10 | B区造成土層断面(土塁状遺構) / B区造成土層断面(水成堆積層) | 100 |
| 図版11 | B区造成土内出土水輪(1) / B区造成土内出土水輪(2) | 102 |
| 図版12 | D区遺状遺構●(北より) / D区遺状遺構●裸面状況(南より) | 102 |
| 図版13 | D区遺状遺構●(B~B'・C~C'土層断面) / B区土塁状遺構遺物出土状況(北より) | 103 |
| 図版14 | 遺状遺構●・斜面◇・平場⑤・土塁状遺構出土遺物 / B区P45 | 104 |
| 図版15 | B区P47 / B区P48 / B区P54土層断面 / B区P58土層断面 / B区SC3 | 105 |
| 図版16 | B区SE1及びピット群 / B区SE2 | 106 |
| 図版17 | B区磔群1・2 / B区磔群1 | 107 |
| 図版18 | B区磔群2 / P5出土銭貨 / P29出土土鏝 / ピット出土遺物 溝状遺構出土遺物 / 磔群出土遺物 | 108 |
| 図版19 | 遺構外出土遺物(1) / 遺構外出土遺物(2) | 109 |
| 図版20 | 遺構外出土遺物(3) / 遺構外出土遺物(銭貨) / 遺構外出土遺物(小刀) | 110 |

第IV章 龍泉寺遺跡

| | | |
|-----|----------------------------------|-----|
| 図版1 | 遠景 / A区、B区、C区 / 土坑及び池状遺構 | 139 |
| 図版2 | 龍泉寺墓地周辺石塔類 / 五輪塔出土状況等 | 140 |
| 図版3 | 出土遺物(一括) / 出土遺物(墓塚) / 出土遺物(近世以前) | 141 |
| 図版4 | 出土遺物(近世以降) | 142 |
| 図版5 | 龍泉寺墓地墓石類(1) | 143 |
| 図版6 | 龍泉寺墓地墓石類(2) | 144 |

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

柿迫遺跡及び龍泉寺遺跡は、(仮称)倉岡ニュータウン開発に係る埋蔵文化財調査として平成8年度から協議を開始した。

平成9年4月23日に宮崎県住宅供給公社と埋蔵文化財センター、文化課の三者による協議が実施された。開発計画の概要説明と埋蔵文化財の試掘調査に向けての協議を行った。この試掘の結果、柿迫遺跡を確認し、平成9年10月1日付で(仮称)倉岡ニュータウン開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約を締結した。これにより、柿迫遺跡の第1次調査を平成9年10月8日から平成10年3月31日の間実施した。第2次調査は、平成10年4月20日から平成10年9月29日の間実施した。

龍泉寺遺跡は、中世の寺院遺跡の可能性と共に近辺に倉岡村古墳群に属する横穴墓が存在するため、住宅供給公社が地下レーダー、比抵抗映像法、磁気、重力の各探査を行った。探査は、遺跡の南西斜面に施し、2箇所に空洞反射が確認され、横穴墓が存在する可能性が強まった。この結果を参考にしながら、平成11年4月26日～27日にかけて県文化課により試掘調査を実施し、遺跡が確認され発掘調査が必要と判断された。住宅供給公社と協議し平成11年度中に発掘調査を実施することとした。

平成11年7月26日付で(仮称)倉岡ニュータウン開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の契約を締結した。龍泉寺遺跡の発掘調査は、平成11年8月2日から平成11年11月11日の間実施した。

第2節 調査の組織

調査の組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

発掘調査：平成9年～平成11年

| | |
|-------------|-------------------|
| 教育長 | 岩切 重厚 (平成9年度) |
| 同上 | 笹山 竹義 (平成10～11年度) |
| 文化課長 | 仲田 俊彦 (平成9～11年度) |
| 埋蔵文化財課長 | 北郷 泰道 (平成9～11年度) |
| 主任主事 (調整担当) | 重山 郁子 (平成10～11年度) |

整理作業：平成13年

| | |
|-------------|-------|
| 教育長 | 岩切 正憲 |
| 文化課長 | 黒岩 雅博 |
| 埋蔵文化財係長 | 石川 悦雄 |
| 主任主事 (調整担当) | 松林 豊樹 |

宮崎県埋蔵文化財センター

| | |
|-------------|-------------------|
| 所 長 | 藤本 健一 (平成9年度) |
| 所 長 | 田中 守 (平成10～11年度) |
| 副所長兼調査第二係長 | 岩永 哲夫 (平成9年度) |
| 副所長 | 江口 京子 (平成11年度) |
| 庶務係長 | 三石 泰博 (平成9年度) |
| 庶務係長 | 児玉 和昭 (平成10～11年度) |
| 調査第二係長 | 青山 尚友 (平成10～11年度) |
| 主任主事 (調査担当) | 重山 郁子 (平成9年) |
| 調査員 | 代田 博文 |
| 主事 (調査担当) | 高橋 浩子 (平成10年) |
| 調査員 | 日高 敬子 |
| 主任主事 (調査担当) | 福松 東一 (平成11年) |
| 主査 | 大村公美恵 |

宮崎県埋蔵文化財センター

| | |
|-------------|-------|
| 所 長 | 矢野 剛 |
| 副所長兼総務課長 | 菊地 茂仁 |
| 総務係長 | 亀井 維子 |
| 副所長兼調査第二課長 | 岩永 哲夫 |
| 調査第四係長 | 永友 良典 |
| 主査 (執筆担当) | 福松 東一 |
| 主査 | 大村公美恵 |
| 主任主事 (執筆担当) | 高橋 浩子 |

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

柿迫遺跡・龍泉寺遺跡の所在する糸原地区は、宮崎市の北西部に位置し、大淀川本流とその支流である本庄川に挟まれた三角状の地域である。この地区は大部分が沖積平野であるが、西方高岡境方面より東方に延びる標高約80～30mの丘陵地と、倉岡城主であった丹生備前の墓のある「駒作りの丘」と呼ばれる標高約50m内外の丘と二つを有するのみである。柿迫遺跡と龍泉寺遺跡はその西方から東方に延びる丘陵地の縁辺部にあたり、糸原地区を横断し大淀川本流に合する内の丸川の左岸付近に柿迫遺跡が立地し、内の丸川に合する長溝川の左岸付近に龍泉寺遺跡が立地する。両遺跡は直線距離にして約650mの距離にある。

当遺跡の周辺には、後期旧石器時代の遺跡としては金剛寺原第1・2遺跡や垂水第1遺跡などナイフ形石器等が出土している。縄文時代の遺跡として瓜生野地区にある直純寺の丘陵の柏田貝塚や大淀川を挟んだ対岸には薩江貝塚もあり、「縄文海進」により、海岸線がかなり内陸にあったことを示している。また、近年の東九州自動車道建設に伴って発掘調査された木脇遺跡では草創期の隆帯土器や後期旧石器時代の石器も出土しており、大淀川左岸の隆起洪積台地には早くから人類の生活空間が存在していたものと思われる。

弥生時代の遺跡として、昭和28年に直純寺北裏に製鋼遺跡が発見され、弥生時代との報告がある。若地野地区に所在する塚原遺跡では、遺跡の南側縁辺部に中期中葉から後期にかけての集落跡、東側縁辺部にかけては後期の集落跡が確認されている。

古墳時代になると古墳や横穴墓群が多くみられるようになる。塚原の台地上に17基の円墳を持つ木脇古墳、木脇塚原地下式横穴A号が所在する。上岩知野地区には多くの横穴墓と円墳から構成される瓜生野古墳群や比較的保存状態のよい人骨が確認された柿木原地下式横穴墓群がある。また、大淀川を挟む右岸には生目古墳群が所在し、約3km西には前期末頃の円墳や横穴墓が確認された迫内遺跡がある。糸原地区周辺には、前方後円墳1基、円墳3基、横穴5基で構成される倉岡古墳群がある。

古代になると、日向国は「白杵・児湯・那珂・宮崎・諸県」の5郡と26郷が設けられ、8院（上持・飯肥・新納・藤間・穆佐・水俣・眞幸・教仁）が置かれた。当地、倉岡、瓜生野一帯は諸県郡に属し、瓜生（うりうの）郷と称している。宇佐八幡の御封田である「瓜生野別府」と称する荘園が置かれるようになり、平安時代、鎌倉時代に領地を拡大していく。その後「瓜生野別府」の荘園は「宮崎庄」「瓜生野別府」「諸県庄」「島津庄穆佐院」に分割され、糸原地区は穆佐院に属している。この頃の生産遺跡としては内宮出遺跡、友尻遺跡で一区画が約7m×7mの水田跡を確認している。

中世にはいと伊東氏と島津氏との対立が深まり、戦国時代となる。14世紀末に島津氏が穆佐城、倉岡城を手中に治めるが、15世紀半ばに伊東氏が奪取し、約130余年にわたり支配した。16世紀中期中葉の木崎原の台戦により伊東氏が島津氏に大敗し、倉岡城を中心とした糸原地区は再び島津氏の支配となる。以後、豊臣秀吉の日向分断政策により瓜生野を延岡領、金崎を秋月領、糸原を島津領に分割される。江戸時代にもこれが踏襲され、明治4年の廃藩置県まで続いた。

参考文献 『瓜生野・倉岡郷土誌』
『柿木原地下式横穴墓56-1号』

『町川遺跡』『松元遺跡 井手山遺跡 塚原遺跡』

村地孝俊 1986
宮崎市教育委員会 1989

宮崎県歴史文化財センター発掘調査報告書 第39集、第44集 2001



- | | | | | |
|----------|----------|---------------|---------|----------|
| 1 柿迫遺跡 | 2 龍泉寺遺跡 | 3 倉岡城 | 4 町屋敷遺跡 | 5 倉岡古墳 |
| 6 倉岡遺跡 | 7 中別府遺跡 | 8 塚原遺跡 | 9 木脇遺跡 | 10 井手口遺跡 |
| 11 松元遺跡 | 12 木脇城跡 | 13 柿木原地下式横穴墓群 | 14 柏田貝塚 | 15 生目古墳群 |
| 16 跡江貝塚 | 17 沖ノ田遺跡 | 18 雀田遺跡 | 19 井尻遺跡 | 20 竹之下遺跡 |
| 21 多宝寺遺跡 | 22 権現昔遺跡 | 23 大淀古墳群 | 24 石塚城跡 | 25 内宮田遺跡 |
| 26 長峰城跡 | 27 石用遺跡 | 28 友尻遺跡 | 29 迫内遺跡 | 30 学頭遺跡 |

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章 柿 迫 遺 跡

第1節 遺跡の立地と環境

柿迫遺跡は、宮崎市大字系原字柿迫2124番地に所在する。宮崎平野を東流する大淀川と、その支流である本庄川との合流地点の西側にある丘陵地先端部に位置する（図1）。洪積層で形成される丘陵地は北西から南東に細長く伸び、標高30~70mを呈する。河川流域に広がる沖積平野とその丘陵地間の標高18~28mに遺跡は立地する。西側には、高岡町城ヶ峰から系原を横断して柳瀬付近で大淀川本流に合流する内の丸川が流れている。

本遺跡は中世山城の存在が指摘され、調査もその確認を中心に進めた。南西には中世城郭として有名な系原城、東には宮崎城があり、どちらを見渡すにも最高の立地である。また、大淀川、本庄川、内の丸川に対する監視機能も十分に果たせる位置にある。城郭として時期を限定できる遺構の確認はできなかったが、検出された遺構とこれらの立地条件を併せると、警備拠点としての施設の存在も想定できる。

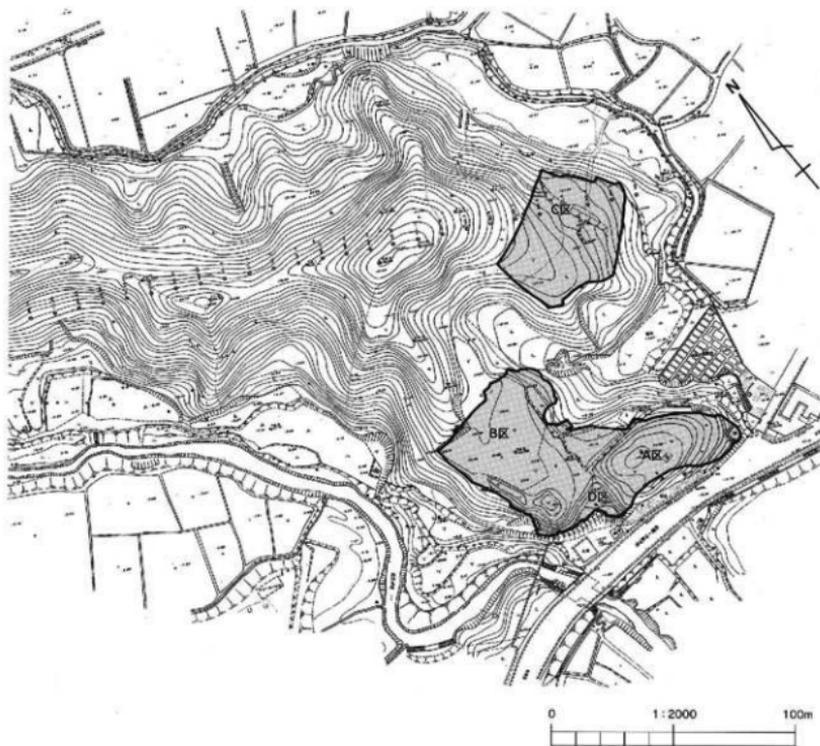
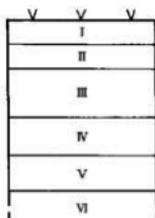


図1 柿迫遺跡周辺地形図

第2節 遺跡の層序

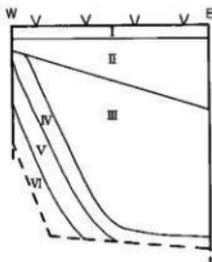
遺跡の土壌は宮崎層群上にシラス土などの火山灰が堆積するもので、AT、小林軽石、アカホヤ、高原スコリア、文明白ボラなどが確認できる。(図2)

A区の基本層序：標高27mの丘陵上



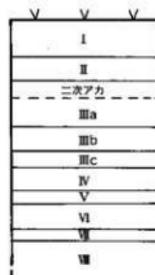
- I 暗褐色表土～近世から現代の陶磁器、鉄貨等が出土。20cm。
- II 褐色土～細砂子で硬く締まる。上層部では古墳時代頃から中世の土師器、下層部では縄文時代早期の土器、石器が出土。10～20cm
- III ややにぶい褐色土～やや軟質。小林軽石粒道黒褐色土がブロック状に入る。上層部に縄文早期の土器出土。30～40cm。
- IV 暗褐色土～硬質で若干粘性有り。白色粒、小林軽石粒(5mm～10mm程)が若干含まれる。30cm。
- V 黄褐色シルト質土～やや軟質。50cm。
- VI AT火山灰層。15cm～。

B区の基本層序：標高20～24mの谷部



- I 表土～硬く締まる。炭化物粒、熟土粒を含む。20cm。
- II 褐色・暗褐色シルト質土～文明白ボラが混在する造成土で硬く締まる。岩盤粒、炭化物粒、明黄褐色粒を含む。20～100cm。
- III 文明白ボラを混在しない造成土～地山崩削土(詳細は図28)～200cm。
- IV 黒褐色シルト質土～高原スコリアを含みやや軟質。～40cm。
- V 暗褐色シルト質土～ややしまり有り。弥生・古墳時代の土器を包含する。～40cm。
- VI 褐色シルト質土～ややしまり有り。小林軽石粒を含む。60cm。

C区の基本層序：標高28mの丘陵上



- I 表土～30cm。
- II 黒褐色土～軟質で細砂子。縄文後期・晩期の土器が出土。20cm。
二次アカホヤが所々にわずかに見られる。15cm。
- IIIa 暗褐色土～ややしまり有り。縄文早期の土器出土。30cm。
- IIIb ややにぶい褐色土～しまり有り。集石遺構検出区。20cm。
- IIIc 褐色土～ややしまり有り。15cm。
- IV 暗褐色土～しまり有り。小林軽石粒、AT小ブロック、炭化物粒を若干含む。20cm。
- V 黒褐色シルト質土～しまり有り。小林軽石粒、炭化物粒を若干含む、ATが多く混在する。10cm。
- VI 黄褐色シルト質土～AT火山灰層。やや軟質20cm。
- VII 明黄褐色土～硬く締まる。AT火山灰の一次堆積。10cm。
- VIII 乳白色シルト質土～しまり有り。シラス層。15cm～。

図2 遺跡の層序

第3節 調査区の設定と概要

調査地は谷を挟んで東西2本に分かれる丘陵の先端部にあり、畑地、造圃、共同墓地として利用されていた。地形と調査の進行に従って、A～D4つの調査区を設定した。(図3)西側の丘陵地はその先端を県道野首・麓線で分断されており、南側は断崖を呈する。丘陵上には段差をもつ平坦面があり、一番高い平坦面をA区(調査面積980㎡)、その北西側平坦面をB区(2,300㎡)、A・B区間の斜面およびその下の平坦面をD区(調査面積492㎡)と設定した。C区(1,260㎡)を設定した東側丘陵地は、南北方向に尾根が延び、東側に急傾斜を形成する。丘陵地間の谷にはため池が存在している。

調査は、平成9年度(平成9年10月8日～平成10年3月31日)から平成10年度(平成10年4月20日～平成10年9月29日)に行った。

平成9年度の調査はまず、工事に伴う進入路建設のため削平されるA区の200㎡を先行して約2週間行った。ここでは4条の帯曲輪と道路跡が検出された。その後、進入路工事のため調査は中断し、平成10年1月27日に再開してB区の調査に取り掛かった。B区の南西側には土塁状の高まりがあり、平坦面に中世から近世にかけての屋敷跡等が確認される可能性が考えられた。表土を重機で除去した後、座標に合わせて10mグリッドを設定した。その後、人力で掘り下げを行い、遺構、遺物の検出に努める一方、地形に合わせてトレンチを設定し、土層の確認を行なった。その結果、比較的大規模な造成が確認された。

平成10年度の調査は、前年度に引き続きB区の調査に着手した。表土下で精査を行ったが、造園業に伴う植木等の擾乱が多く、掘探された造成土面での遺構検出は困難を要した。しかし、調査区北側に露出した宮崎層群(岩盤層)に掘り込まれたピットが検出されたことから、掘建柱建物跡等が確認される可能性が考えられた。途中、B区東側の谷に堆積する文明白ボラを混在する層(造成土)が厚く、非常に硬いことから、地形に沿って重機で剥ぎ取りを行った。B区は東側に向かって緩傾斜する二段の平坦面から成り、段間の法面には、近世の陶磁器片等が混在する5～20cm大の砂岩円礫の集中する礫面が検出された。その他、掘建柱建物跡9棟、溝状遺構2条、土坑、多数のピット等を検出した。また、谷を埋める造成土については、地形に沿って東西方向のトレンチを入れ確認を行った。面的に広げることではできなかったが、断面には池状の水成堆積層や、土塁状の高まりがあり、造成の過程が解る明瞭な堆積が確認できた。

順次A区、C区の調査を行った。A区は調査地東下にある柿迫公園墓地に移転する前、その一部が立地していた場所で、表土中からは仏飯器、近世～現代の銭貨、瓶類、数珠玉等が出土した。平坦面に土層確認トレンチを設定し、その後、掘り下げ及び遺構検出を行った。表土下の褐色土層からは古墳時代頃～中世のものと思われる土師器や下層部には縄文時代早期の上器や石器が若干出土した。比較的安定した小片軽石を含むⅢ層で墓坑の確認を行ったが、明確なものは確認できず、土坑2基、ピット数基を検出したのみであった。

C区は、重機で表土を剥ぎ取った後、土層確認トレンチに従って、人力で掘り下げながら遺構、遺物の検出を行った。樹木や竹の根が多くはっていたため、遺構検出や包含層の掘り下げはかなり困難であった。縄文早期の集行遺構や土器、縄文後・晩期の土器や堅穴状遺構、石器、時期不明の土坑等が出土した。AT火山灰層の堆積もみられたが、下層については時間の都合上確認できなかった。

D区は、立木伐採との兼ね合いでA、B区と分割した調査となったが、A区の帯曲輪につながる地形が確認でき、その他、道状遺構が検出された。

B区の西側斜面については、帯曲輪や小さな平場が存在する可能性があったが、斜面の傾斜が著しく急であることと時間の都合上から調査を行っていない。

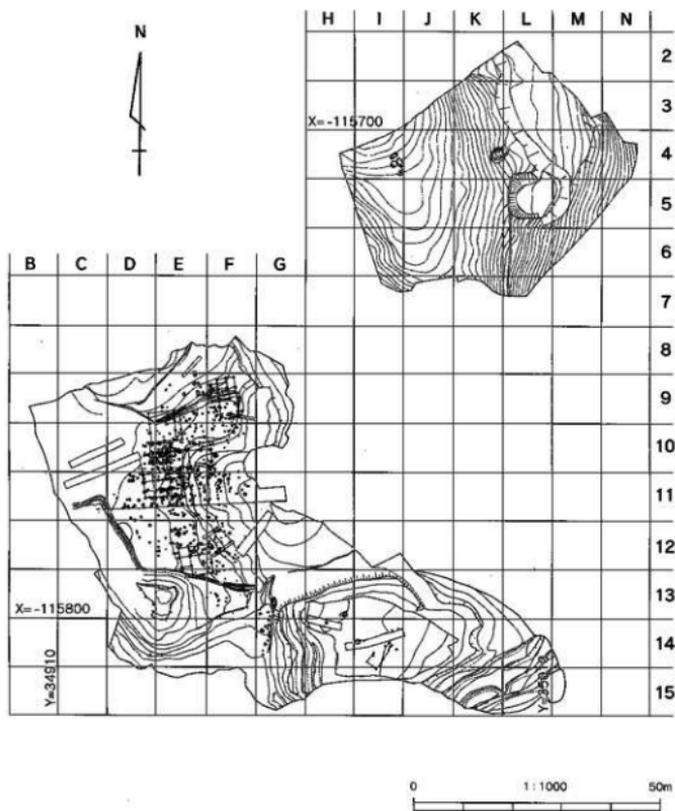


図3 グリッド配置図

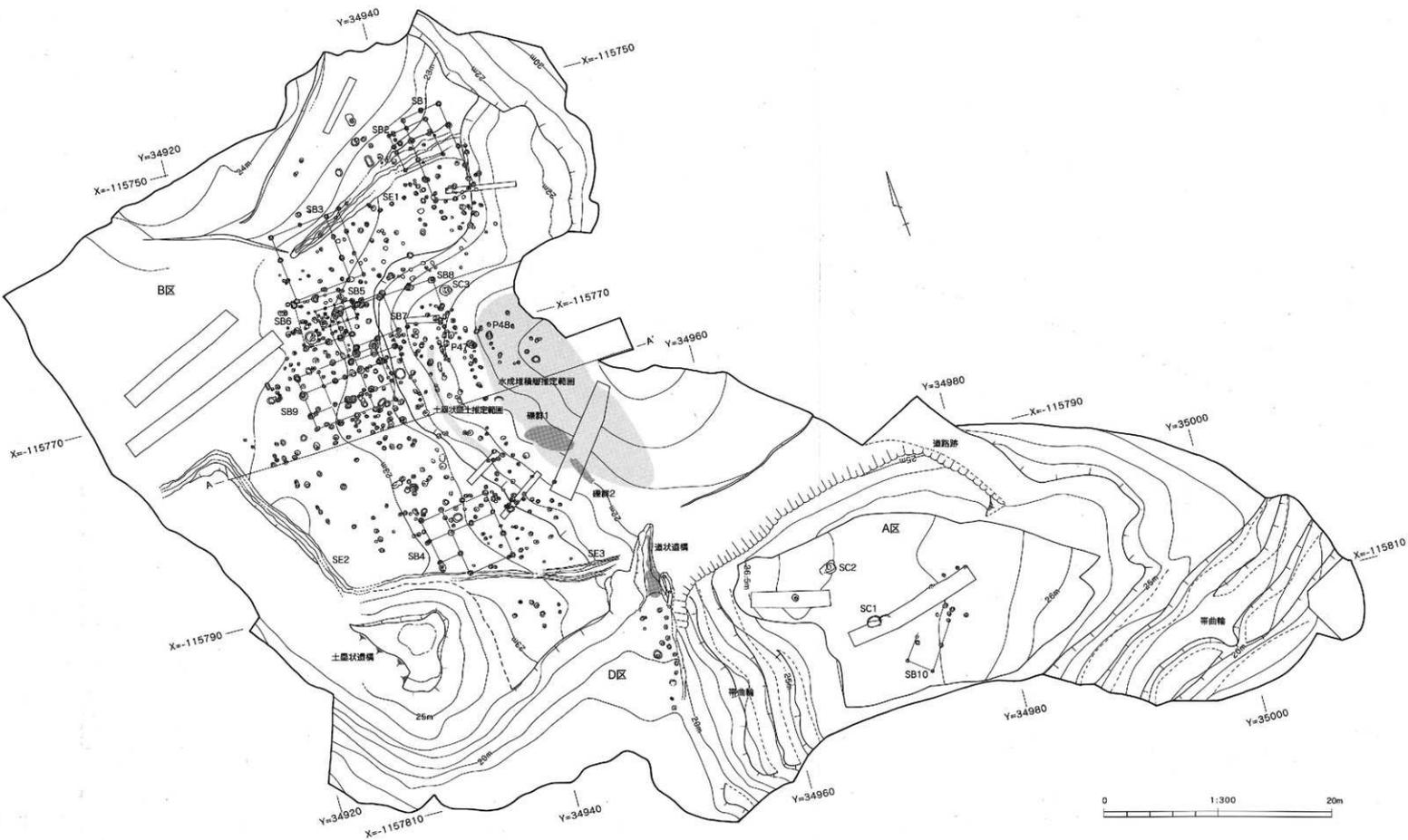


图4 A·B·D区遺構分布图

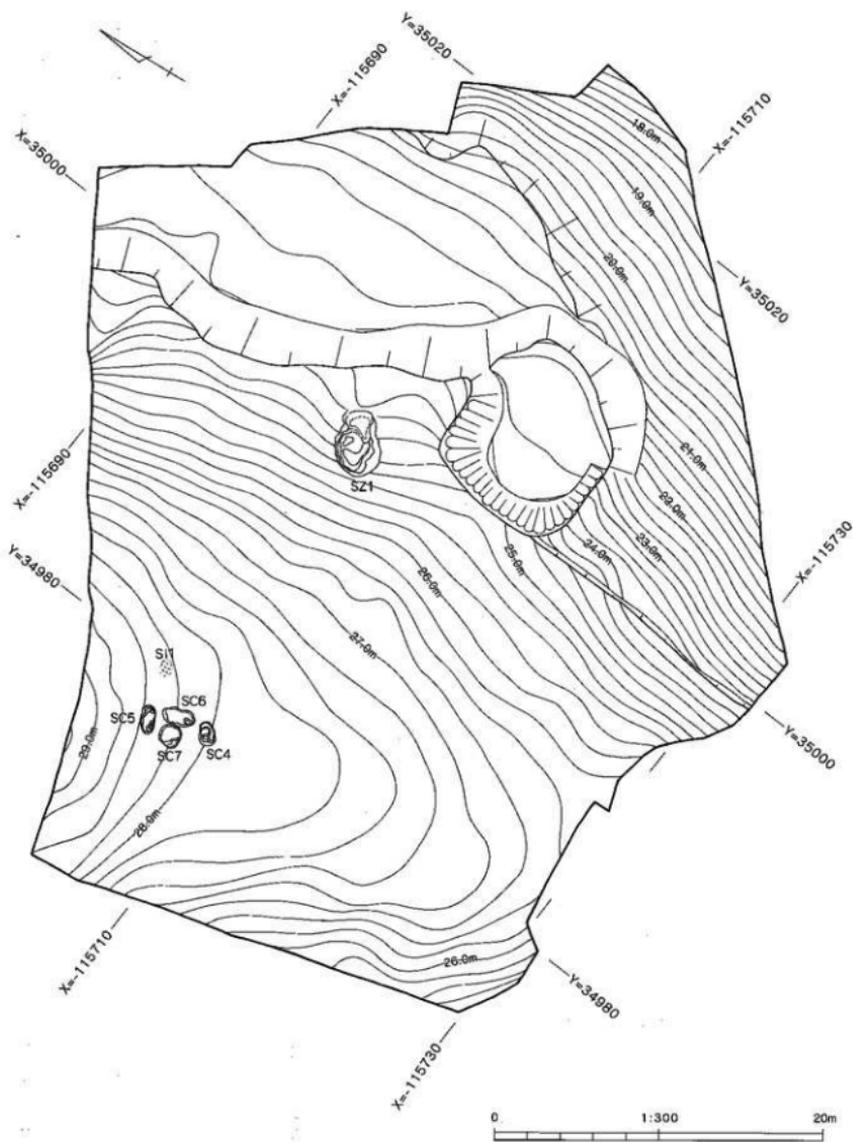


图5 C区遺構分布図

第4節 遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

集石遺構 (S1)

S11 (図6)

C区西側の舌状に張り出した丘陵上に位置し、第Ⅲb層上面で検出した。遺構は長軸0.9m、短軸0.6mの範囲に5~15cm程の砂岩円礫約60個が楕円形状に広がる。礫は西側高位に集中する。赤化が著しく、割れたものが多く見られる。礫下部には掘り込みは持たない。礫間から縄文早期と思われる土器片が1点(図9-6と同一個体か)出土している。

土坑 (SC)

SC1 (図7)

A区中央西寄りに位置する。土層確認トレンチ北側壁で確認されたため、上端の半分は損失している。遺構の残存計は、上端東西幅約1.27m、中段南北幅0.85m、深さ1.2mである。上端プランは円形を呈すると推測するが、北側の中程に半月状のテラスを持ち、下端は東西幅約0.9m、南北幅0.45mの隅丸長方形を呈する。A区基本層序第Ⅱ層の下から掘り込まれ、埋土上層部からは縄文時代のものと思われる土器片や炭化物粒、下層部からは黒曜石剥片や角礫が数点出土している。出土遺物が少ないため時期の確定は難しいが、縄文土器片が出土していることと、遺構の掘り込み面からみて縄文時代早期に比定したい。遺構の性格は不明である。

竪穴状遺構 (SZ)

SZ1 (図8)

C区中央部の東側斜面に位置し、検出はC区基本層序第Ⅲa層上(一部二次アカホヤ上)で行った。検出当初は1基の落ち込みとして調査を進めたが、土層断面の堆積や遺構下端の状況から見て2基の重なりがあることがわかった。切り合いは南西側の遺構→北東側の遺構の順がおえる。全体の平面プランは南西側が下膨れ状になった不定形を呈し、長軸4.6m、短軸3.08m、深さ約1.0mを測る。南西側の遺構の底部は長軸2.4m、短軸1.7mの平坦面を有するが、柱穴などは持たない。埋土は黒褐色土を主体としている。傾斜地であるため層の堆積が不安定であるが、遺構上部には縄文後晩期の遺物包含層と思われるC区基本層序第Ⅱ層の堆積があり、遺物の集中が見られた。遺構内から遺物が出土していないため、遺構の時期については不明であるが、遺構検出面と遺構上部の土器の集中からみて、縄文時代後晩期頃に比定できると思われる。

遺構外の出土遺物

土器 (図9~12)

1~6はI線が直口またはわずかに開きながら立ち上がる厚手の深鉢の一群である。1は内湾気味に立ち上がる口縁部で、口唇外面に比較的幅の狭い刻みを施す。外面口唇部直下には肋幅の狭い貝殻による条痕を横位に施し、その下位及び内面はナテ調整を行っている。2は直行する口縁で、口唇部外面に

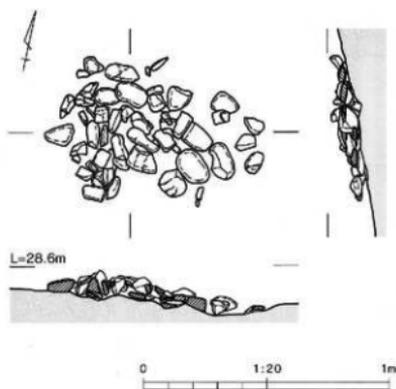


図6 S11実測図

押圧刻みを施す。器面調整は外面横位の条痕、内面ナデである。3は直線的に立ち上がる口縁部で、口縁部外面に押圧刻みを施す。外面には斜位の貝殻条痕を施し、内面はナデによる調整を行っている。4はわずかに外反する口縁部で、口縁端部には2段に並ぶ押圧刻みを施している。外面は横位に貝殻条痕、内面はナデによる調整を行っている。5はやや開きながら立ち上がり、端部がわずかに内湾する口縁～胴部で、外面口縁部上位に幅の狭い貝殻条痕を横位に施す。内面はナデによる調整を行っている。6は平底の底部で、胴部が開きながら立ち上がる。胴部外面には縦位の貝殻条痕調整を行っている。内面はケズリがやや粗く、器面は凹面の形成が著しい。

7は角筒土器の胴部片か。外面には縦位に貝殻刺突線文を連続させている。内面には、縦方向に丁寧なケズリ調整を行っている。

8～18は摺糸文や刺突文、沈線文を施す深鉢の一群である。8は外傾する口縁部で、外面はナデ後、横位に2条の貼付突帯を巡らせ、突帯上に貝殻腹線による列点文を施している。内面は横位の貝殻条痕による調整が見られる。9は直行する口辺部である。外面は横方向に数条の条痕を施した後、斜方向に2条の沈線と刺突列点文を施している。内面調整は横位の貝殻条痕である。10は外反し屈曲部内面に稜線を形成する口辺部である。屈曲部外面には9条の沈線を斜方向に施している。内面調整は丁寧なナデである。11は外反し屈曲部外面に稜線を形成する口辺部である。外面には横方向の4条平行沈線文の上下に列点文が施されている。内面はナデにより調整を行っている。12～18は外面に摺糸文を施す胴部片である。12は内湾する胴部である。外面には横方向の平行沈線を施し、沈線直下に列点文を刺突している。列点文下位は摺糸文を施した後、横方向のナデを行っている。内面はナデにより調整を行っている。13は12同様外面に横方向の沈線を施し、その直下に列点文を施す胴部片であるが、内湾せず直に立ち上がる。列点文の下位には摺糸文が施されている。内面はナデによる調整である。14～16はいずれも直に

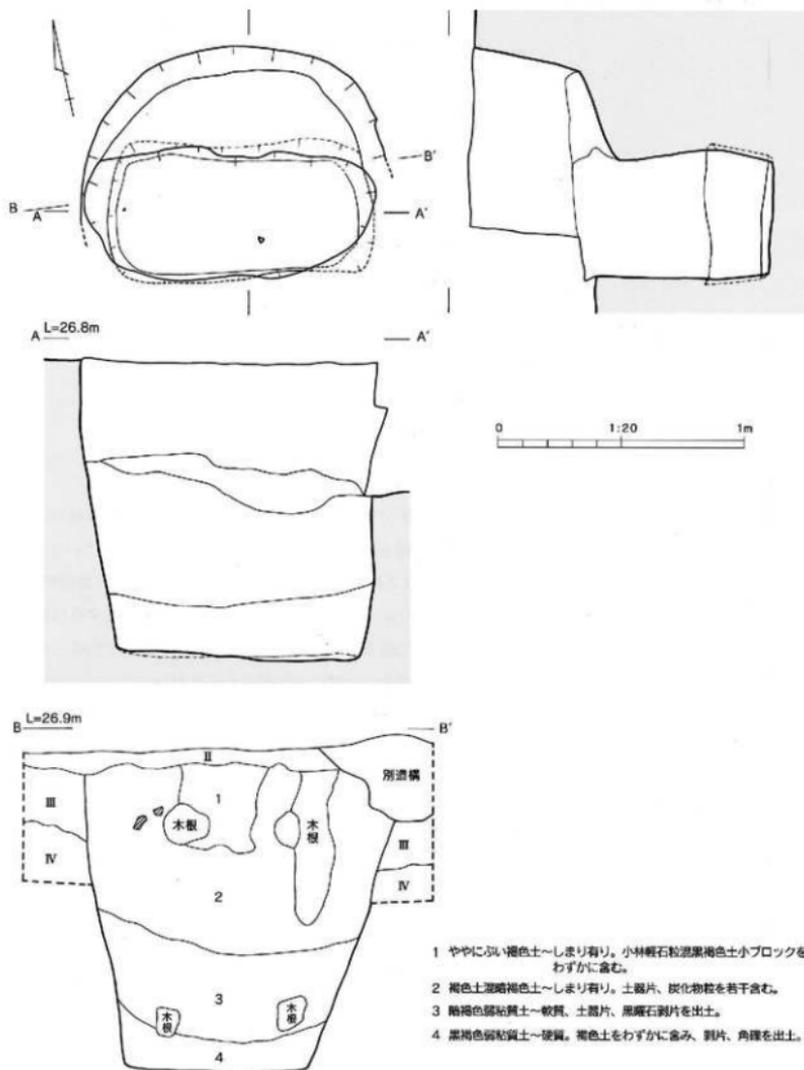
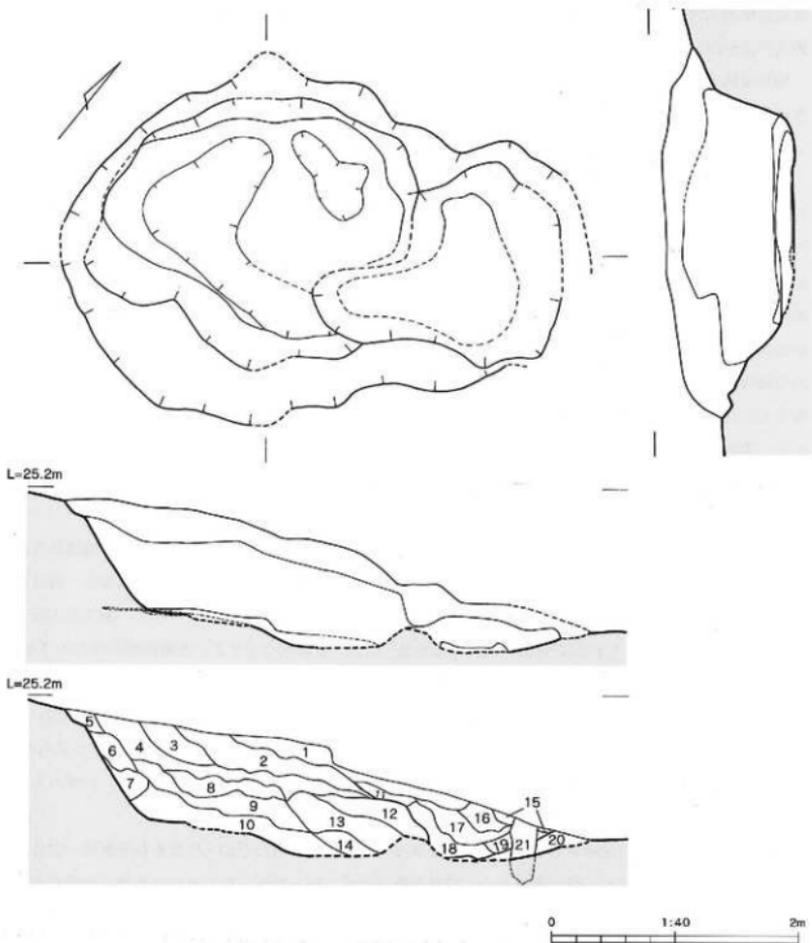


図7 SC1実測図及び土層断面実測図



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土～ややしまり有り。炭化物を若干含む。</p> <p>2 黒褐色土～しまり有り。小林藪石炭を含む。</p> <p>3 暗褐色土～しまり有り。</p> <p>4 ややにぶい暗褐色土～しまり有り。暗褐色土ブロックを若干含む。</p> <p>5 暗褐色土～やや軟質。</p> <p>6 暗褐色土～軟質。5層土を多く含む。</p> <p>7 褐色土～やや軟質。</p> <p>8 暗褐色土～しまり有り。</p> <p>9 暗褐色土～ややしまり有り。褐色土ブロックを多く含む。</p> <p>10 暗褐色土～非常に酸化している。黒色土と5層土の粒を多く含む。アカホヤ炭を含む。</p> <p>11 黒色土～しまり有り。小礫を含む。</p> | <p>12 黒褐色土～しまり有り。小礫を含む。</p> <p>13 暗褐色土～ややしまり有り。褐色土ブロックをわずかに含む。</p> <p>14 黒褐色土～しまり有り。小林藪石炭と褐色土ブロックを含む。</p> <p>15 黒色土～軟質。</p> <p>16 黒色土～しまり有り。小林藪石炭を含む。</p> <p>17 暗褐色土～ややしまり有り。</p> <p>18 暗褐色土～しまり有り。暗褐色土ブロックを多く含む。</p> <p>19 暗褐色土～ややしまり有り。暗褐色土ブロックを含む。</p> <p>20 黒褐色土～しまり有り。若干暗褐色土ブロックを含む。</p> <p>21 褐色土～軟質。柱穴埋土。</p> |
|--|--|

図8 SZ1実測図及び土層断面実測図

立ち上がる胴部片で、外面に燃糸文を施し、内面はナデにより調整が行われている。17は胴下半部で、外面は沈線文間を燃糸文で充填している。内面調整はナデである。18は胴部小片であるが、17と同様の施文手法が用いられているものと思われる。

19は深鉢の口縁部で、外面には逆「S」字状の凹線文が施されている。内面は丁寧なナデにより調整されている。

20は深鉢の胴部片である。外名には沈線による幾何学文が施され、内面は貝殻条痕が明瞭である。

21～31は無文土器の一群である。21はわずかに外反する深鉢の口縁部で、外面には斜方向の条痕がみられる。内面は横方向の工具ナデである。22は直口の深鉢の口縁部である。外面は粗いナデが施され、内面は横、斜、縦方向に貝殻条痕が明瞭に見られる。23は深鉢の胴部で、逆「く」字状に屈曲した胴部から内傾する口辺部がわずかに外反しながら立ち上がる。器面調整は、外面口辺部が横方向の貝殻条痕後ナデ、胴部がナデ、内面は貝殻条痕が施されている。24は内傾する深鉢の口縁部で、口縁端部がわずかに外反する。外面には貝殻条痕が施され、内面はナデにより調整が行われている。25は外傾する深鉢の口縁部で、外面には貝殻条痕が施され、内面調整はナデである。26は外傾する深鉢の口縁部で、内外面ともに貝殻条痕が明瞭に残る。27は外傾する深鉢の口縁部で、口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。両面ともに器面調整はナデである。28～31は胴部が内湾しながら立ち上がる鉢である。31は口縁部が短く外反する。32は外面胴部上位に粘土のはみ出しが見られる。器面調整は、30、32の内面に貝殻条痕が施されている他は、ナデである。

33～39は精製された浅鉢である。33は胴体が膨らみ口縁部が屈曲して短く立ち上がるもので、胴部最大径が口径を上回る。口縁部内面には凹線を巡らせている。両面とも横方向のミガキと思われるが、内面は風化が著しい。34は胴部が逆「く」字状に屈曲して膨らみ口縁部が短く外反するもので、胴部最大径が口径をわずかに上回る。口縁部内外面に凹線を巡らせ、端部が玉縁状を呈する。外面は横方向のミガキ、内面はナデと思われるが、風化が著しい。35は張りの弱い胴部から口縁部がわずかに短く外反するもので、口径と胴径はほぼ同じである。口縁部内面に段を形成している。内外面とも横方向のミガキである。36と37は同一個体と思われる。胴部が強く屈曲し口辺部が内傾する。内外面とも横方向のミガキである。38は屈曲が弱く緩やかに膨らむ胴部である。39は胴部が大きく開く浅鉢の底部付近である。いずれも器面調整は横方向のミガキである。

40～52は口縁部に貼付突帯をもつ粗製の深鉢である。なお、40・41及び50・51はそれぞれ同一個体と思われる。40は口唇部にヒレ状突帯をもつ。口縁部断面形は、44・45が三角形を呈する他は台形状を呈する。52は外面口縁部下位を強く撫でつけ、肥厚帯を作り出している。器面調整は、40・41及び45が内外面ともにナデである他は、ナデ及び貝殻条痕を施している。

53～57は孔列文土器の一群である。いずれも口縁外面の穿孔部は肥厚している。穿孔は貫通のもの(53～55)と未貫通のもの(56・57)に分かれる。器面調整は貫通のものが内外面ともにナデで、未貫通のものは2点ともに条痕がみられる。

58～67は深鉢の底部である。58～61は厚底を呈し、59を除く3点は端部が張り出す。62～67は平底である。

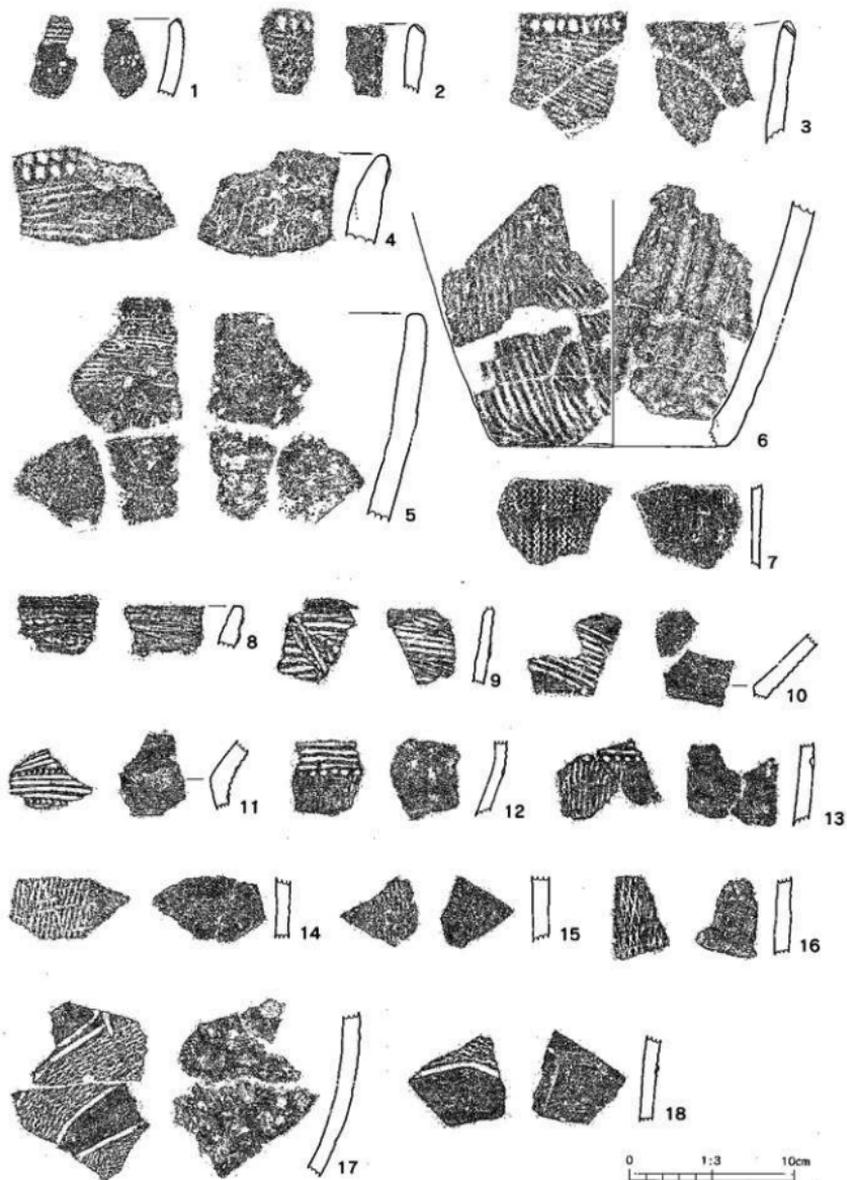


图9 绳文土器实测图(1)

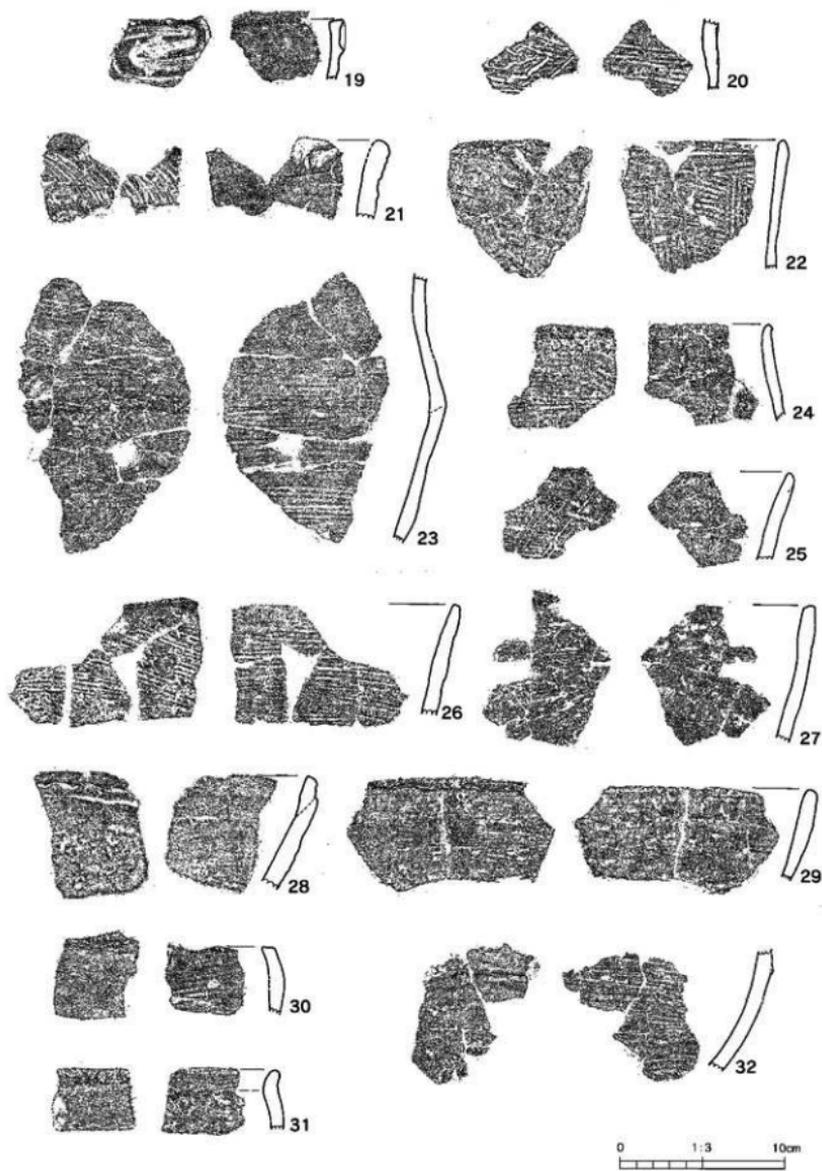


图10 繩文土器実測図(2)

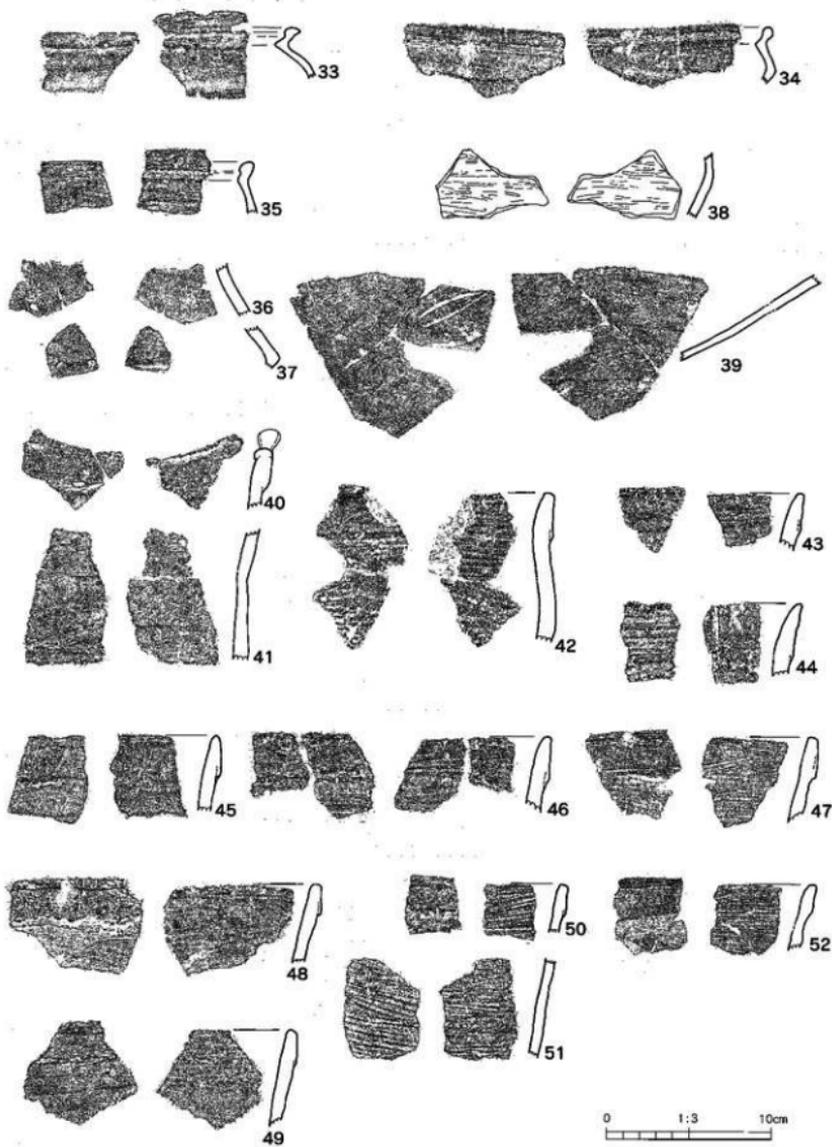


図11 縄文土器実測図(3)

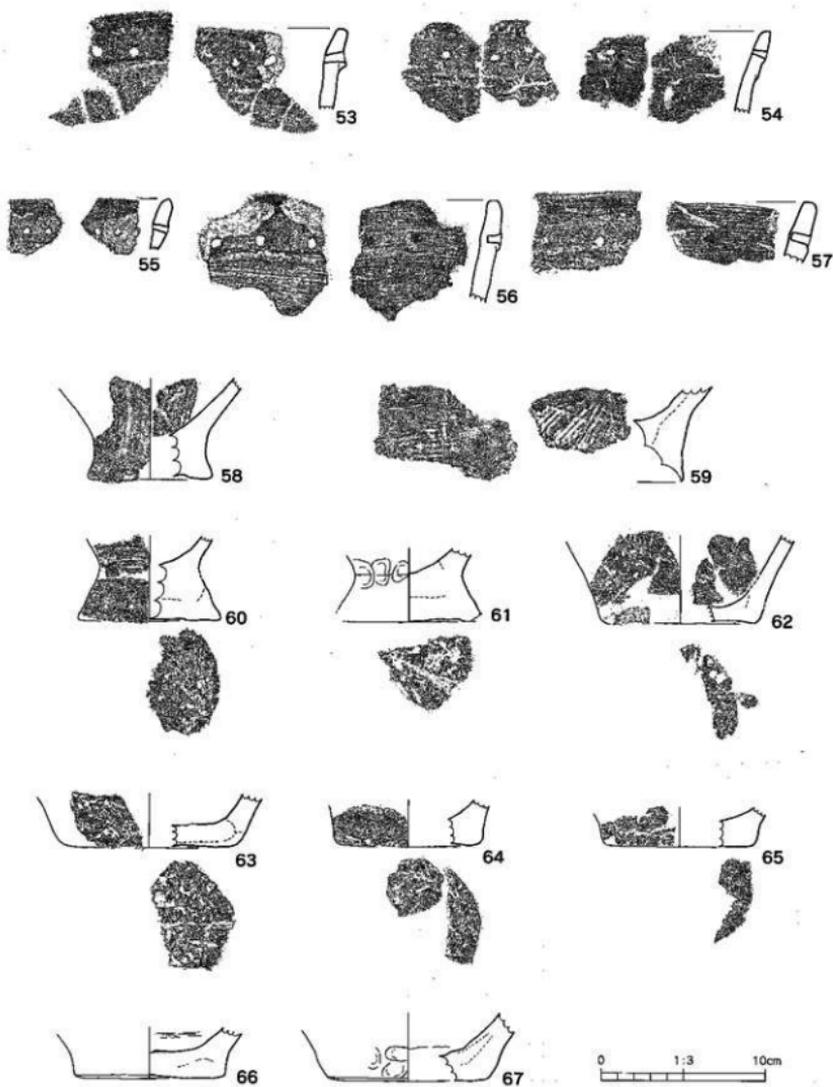


图12 编文土器实测图(4)

石器 (図13~25)

石器は、石鏃、石匙、スクレイパー、二次加工剥片、微細剥離剥片、剥片、石核、打製石斧、磨製石斧、石錐、磨石、敲石、砥石、石皿、台石などがあり、その多くはC区で出土している。大半は縄文時代に属するものと思われるが、磨石、敲石、砥石、台石などの礫石器は後世まで継続して使用されるため、時期を特定できないものもある。よって出土した石器については一括して記載することにする。

石鏃 (図13)

68は黒曜石製の打製石鏃である。平面形は二等辺三角形を呈し、基部形態は凹基で挟りが浅い。側縁部は外湾する。69は石鏃の未製品と思われる。石材は黒曜石である。

石匙 (図13)

70は石英を利用石材とした石匙である。比較的厚い剥片を両面とも全面に加工している。

スクレイパー (図13~15)

71~75・78は背面に自然面を残すものである。71は厚みのある剥片を用いて、縁周に加工を施し刃部を形成している。72・73・75は背面から加工を施すもので、72・73は縁周、75は両側縁及び下端に刃部を作り出している。74・78は両面から加工を施し刃部を形成している。74は縁周、78は下端部及び両側縁に刃部を形成する。76・77・79~81は両面から刃部加工を施しているのである。76は左側縁部に弓状に刃部を作り出している。77は下端部、79は両側縁、80は下端及び上端の一部、81は右側縁に刃部を作り出している。石材は79は砂岩で、他は頁岩である。

二次加工剥片 (図15)

82は縦長剥片を素材とし、両側縁に加工痕が見られる。石材はチャートである。

微細剥離剥片 (図15)

83は左側縁に微細な剥離が見られる。石材はチャートである。

石核 (図15)

84は頁岩を利用石材とする石核で、自然面を残す。85~87は黒曜石を利用石材としている。85は片側縁のみに剥離を行っている。86・87は小形の剥片を剥離した残核である。

剥片 (図16・17)

88~91は小形の剥片である。88と89は黒曜石で、90と91は頁岩である。92~96は大形の剥片で、全て頁岩を利用石材としている。

磨製石斧 (図18)

97は砂岩を利用石材としている。比較的厚みがあり、横断面形は楕円形を呈するものである。敲打に

よる形成後丁寧な研磨を施している。刃部は両刃である。98は利用石材が砂岩で、横断面形は長方形を呈する。側縁部に敲打による整形が著しく見られ、両面に丁寧な研磨を施して両刃を作り出している。99は利用石材が頁岩で、横断面形は長楕円形を呈する。刃部、基部及び裏面は欠損している。表面は、丁寧な研磨が施されている。

打製石斧 (図18・19)

100・101は砂岩製で、横断面形は長方形を呈する。縁周を細かく剥離して整形し、刃部は研磨し両刃を作り出している。102・103は砂岩の自然礫をそのまま利用した石斧である。102は横断面形が扁平で、両面を丁寧に研磨している。刃部、基部及び片側縁に剥離整形を行い、両面を丁寧に研磨している。103は横断面形が扁平で、片側縁に敲打による整形が見られる。刃部は両刃である。104は片面に自然面を残す台形状の石斧である。横断面形は扁平である。両側縁部には細かな剥離整形が施され、刃部を形成している。利用石材はホルンフェルスである。105は緑色珪質岩を利用した片刃の石斧である。横断面形は台形状を呈する。両側縁に細かな加工を施している。106～108はホルンフェルスを利用石材とした長方形を呈する石斧である。横断面形は扁平で、両側縁に細かな加工を施している。109は石斧の使用残骸である。基部の大部分が欠損している。石材は頁岩である。

石錘 (図20・21)

110～120は長軸の両端を打ち欠いて抉りを作り出した礫石錘である。121は擦り切りにより切り込みを入れた切目石錘である。石材は110は凝灰岩、他は砂岩である。122は凝灰岩製の石錘で、平面形が長楕円形を呈し、下端部に小さな突起が見られる。短軸両端を打ち欠いて紐掛部を作り出し、使用による摩滅で溝が形成されている。

磨石 (図21・22)

123・124・126・127は砂岩製の磨石である。124は両側縁、下端及び表面中央部に、126は表面中央部及び下端に敲打痕が見られる。125は凝灰岩製、128～130は尾鈴酸性岩製の磨石である。

敲石 (図22・23)

131は尾鈴酸性岩製で上部は欠損する。両面に擦痕、縁周全面に著しい敲打痕が見られる。132は砂岩製で、棒状を呈する。上部は欠損している。全面に著しい敲打痕と一部に擦痕が見られる。

凹石 (図23)

133は砂岩製で、横断面形は扁平である。上下は欠損しており、両面中央部に凹みを持つ。134は砂岩製で下部が欠損している。横断面形は扁平である。両面中央部に浅い凹みと擦痕が見られる。

砥石 (図23)

135は頁岩製で、板状を呈する。両面に擦痕が見られる。136は砂岩製で、表面中央部に擦痕が見られる。

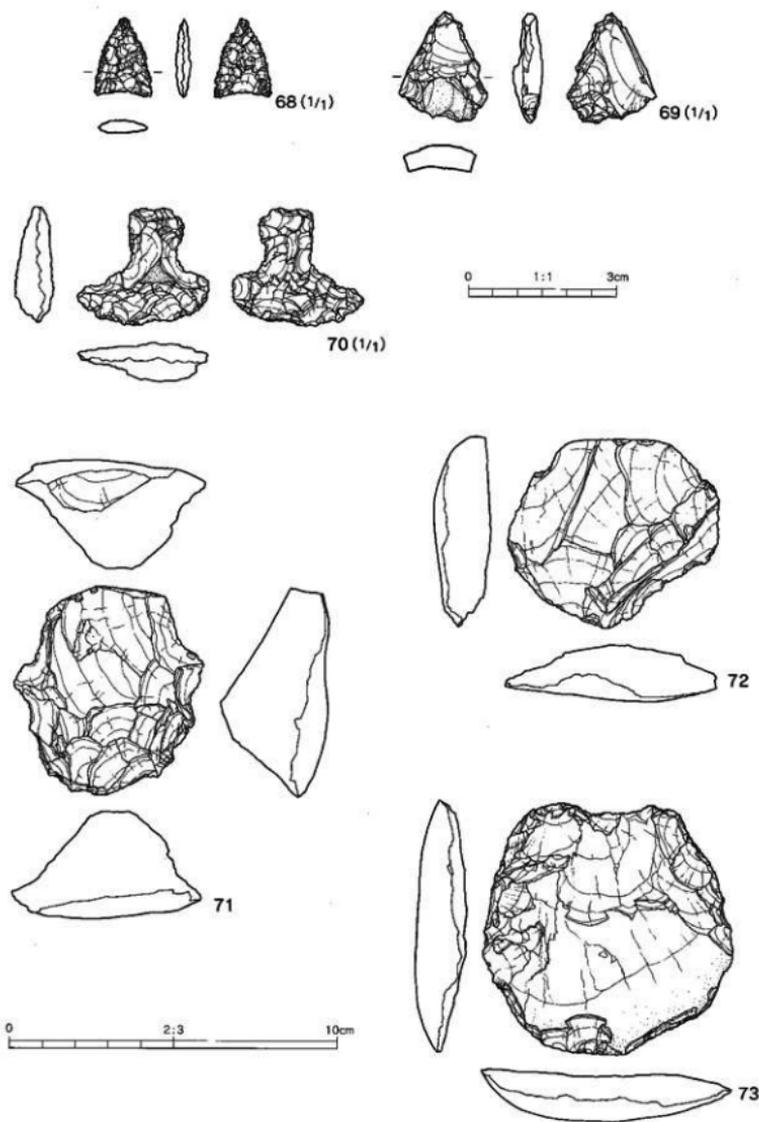


图13 石器实测图(1)

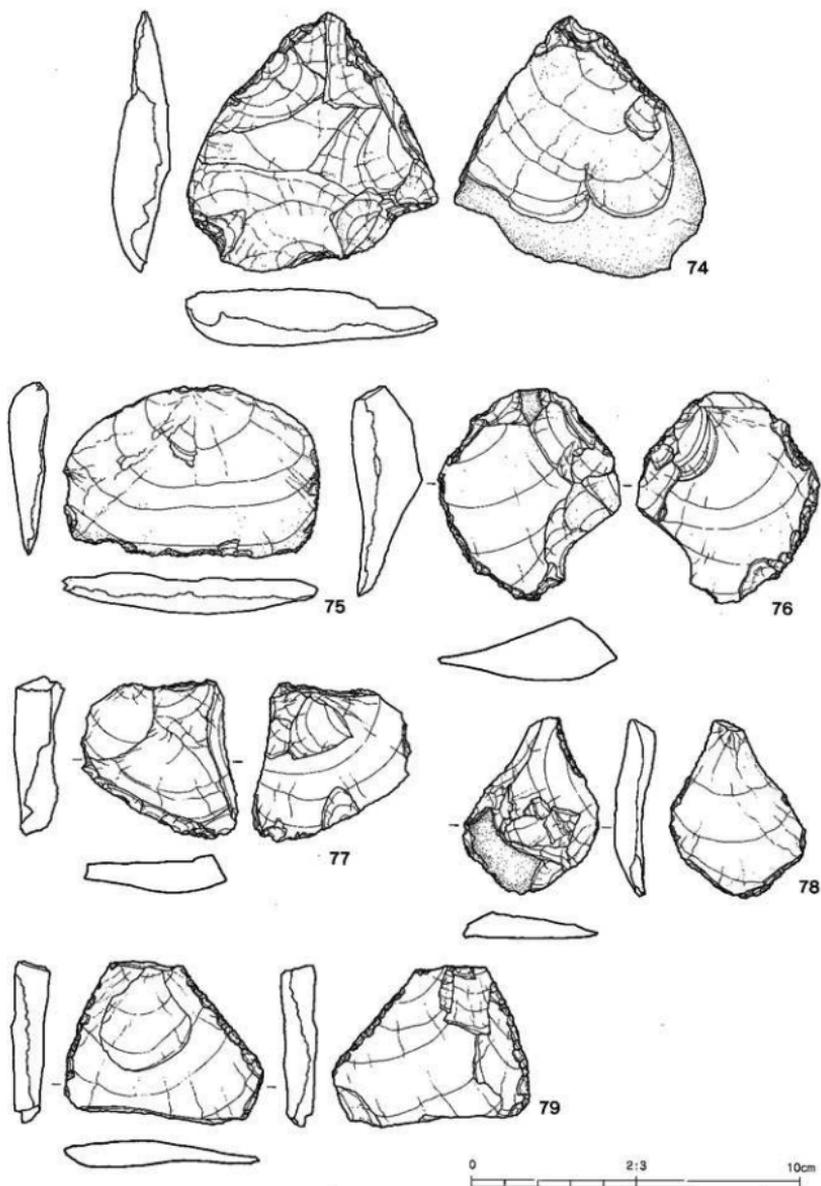


图14 石器实测图(2)

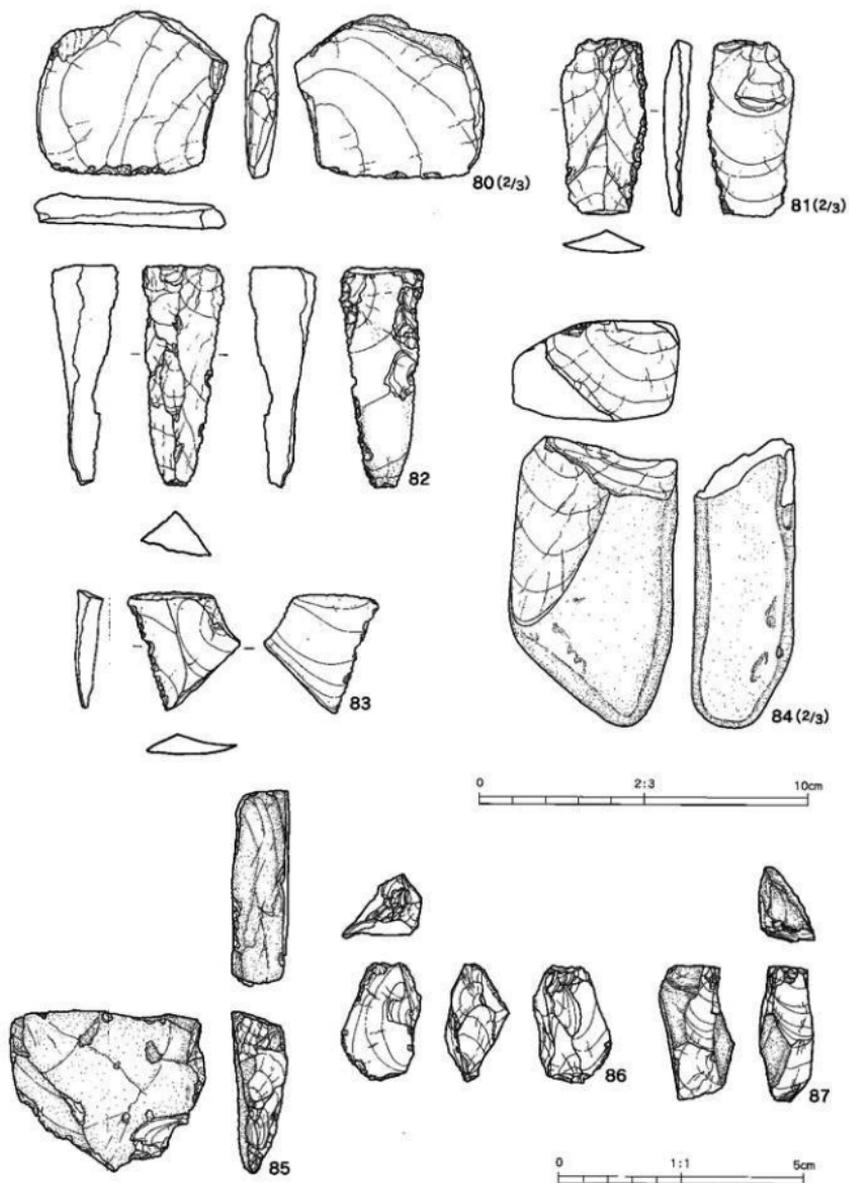


图15 石器实测图(3)

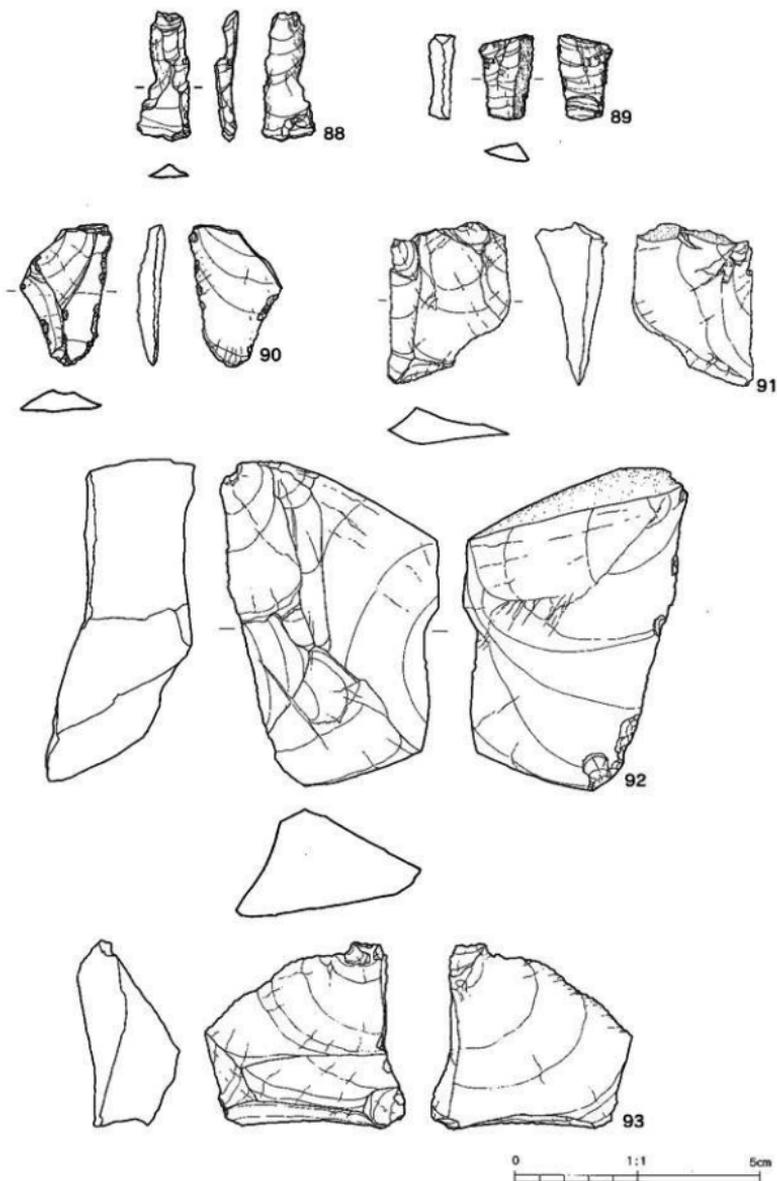


图16 石器实测图(4)

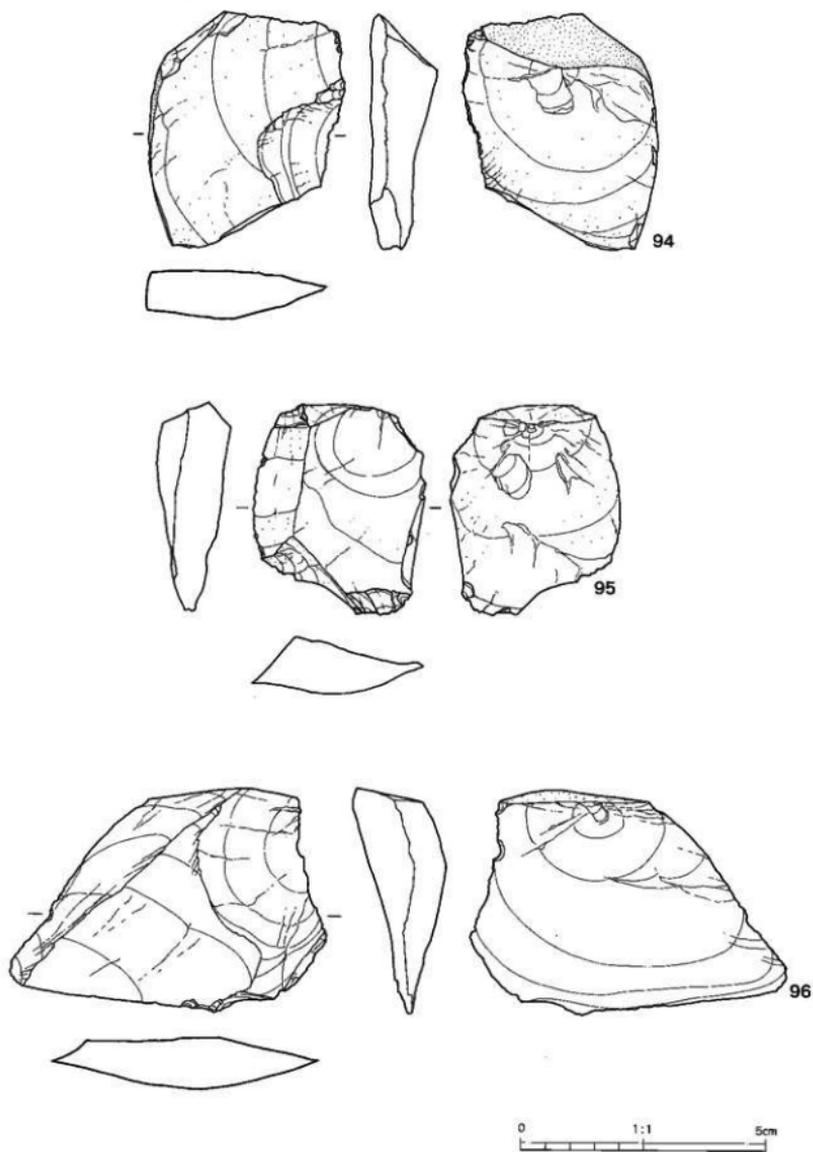


图17 石器实测图 (5)

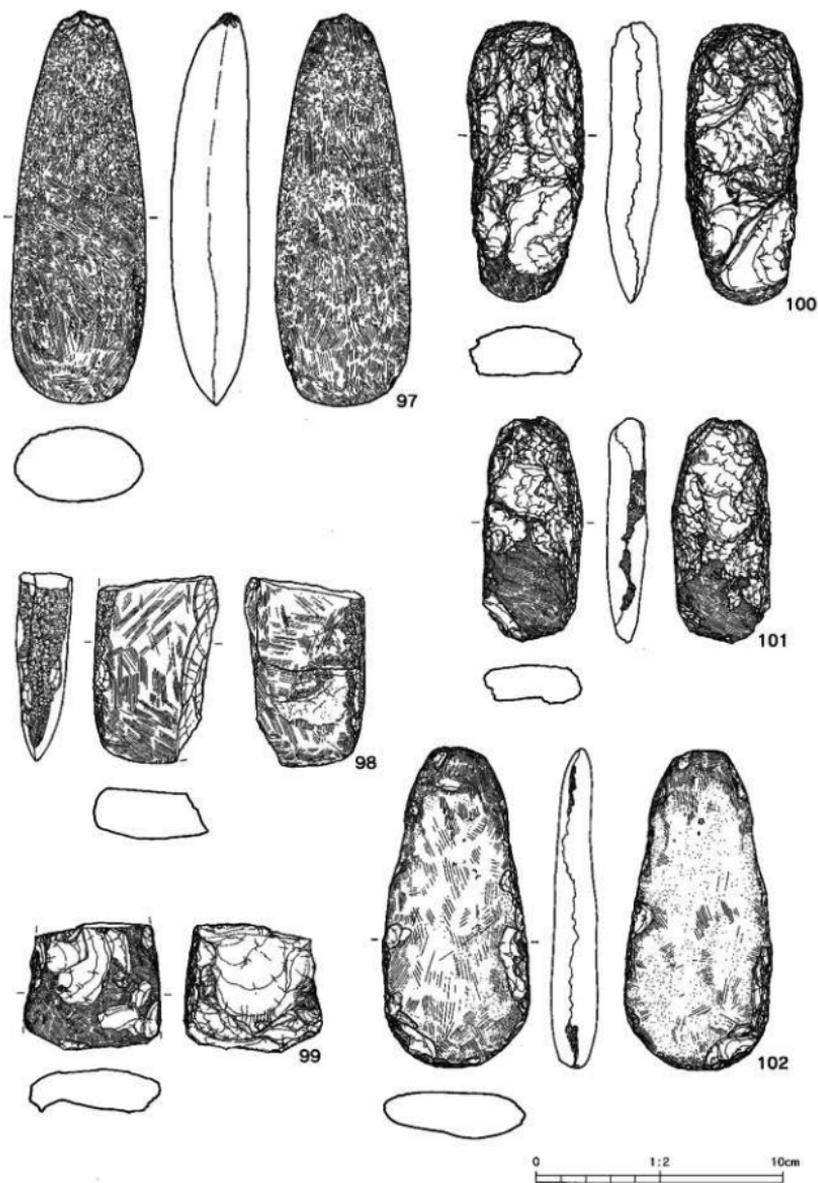


图18 石器实测图(6)

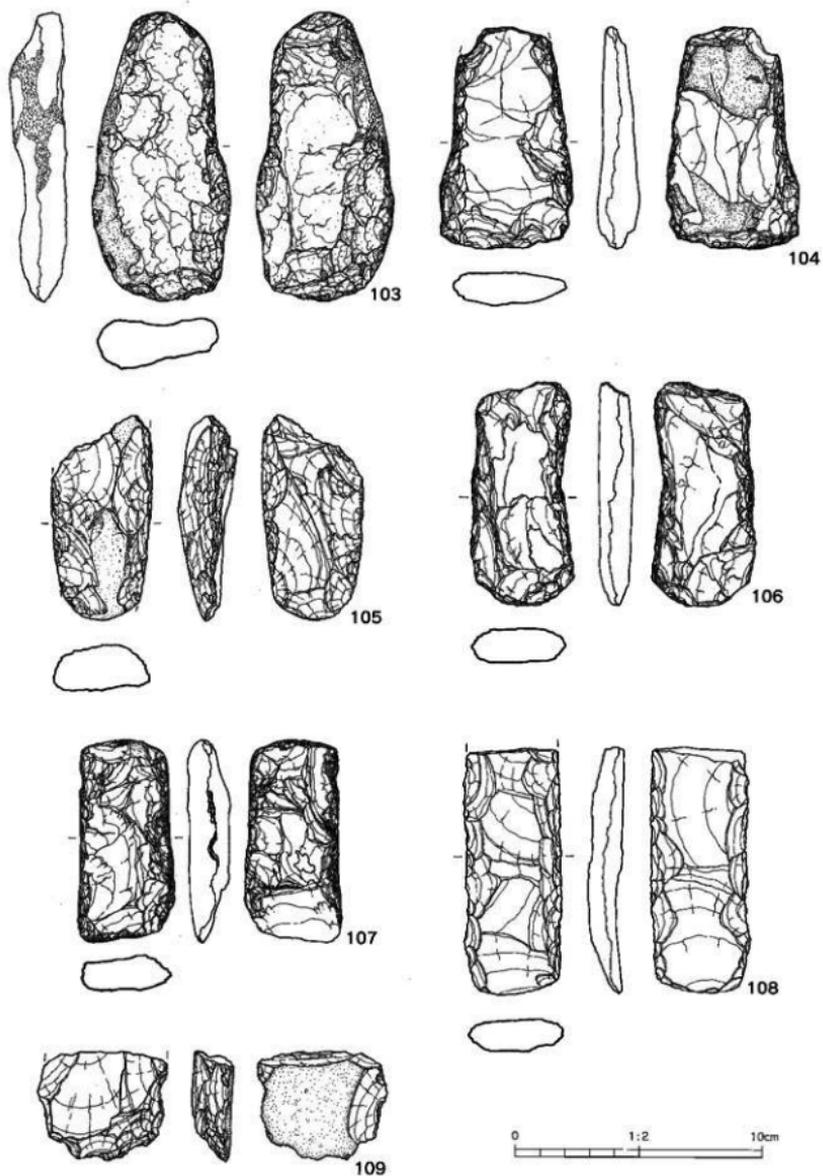


圖19 石器実測圖 (7)

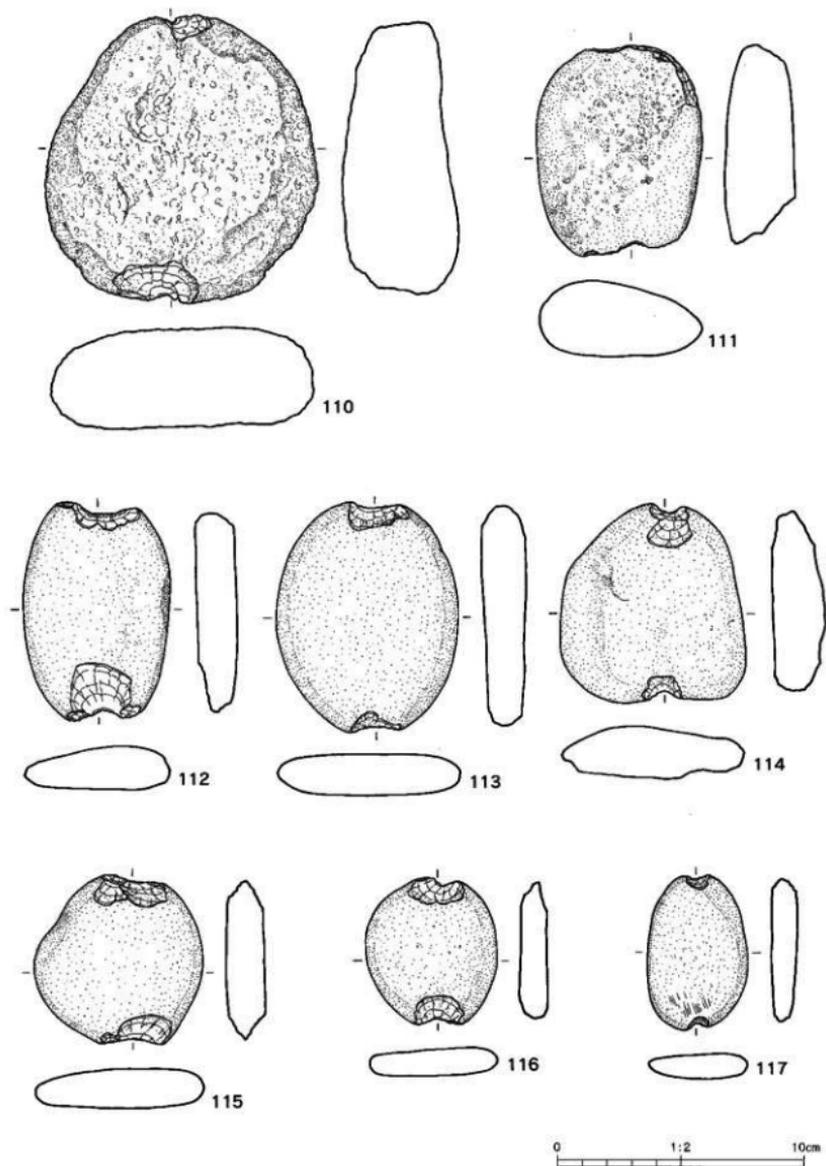


图20 石器实测图(8)

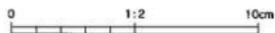
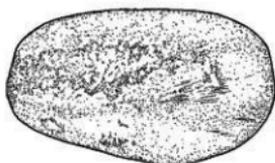
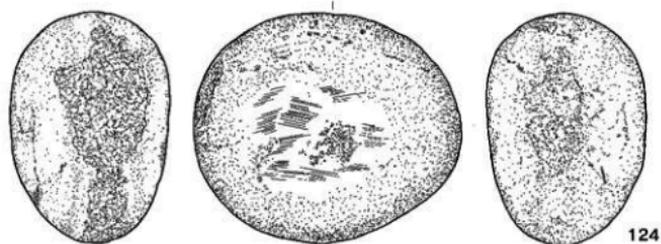
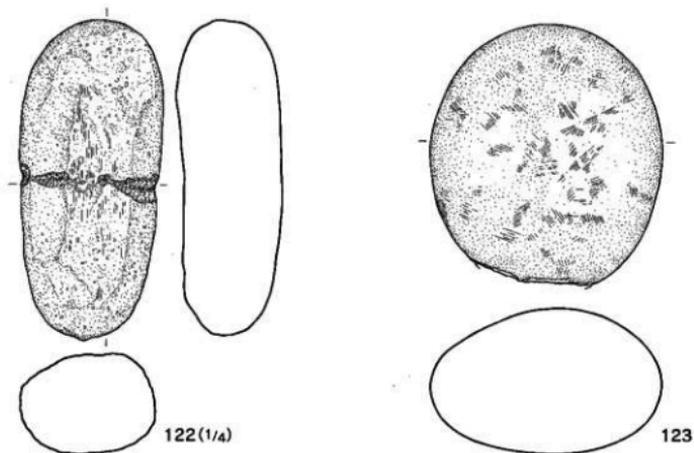
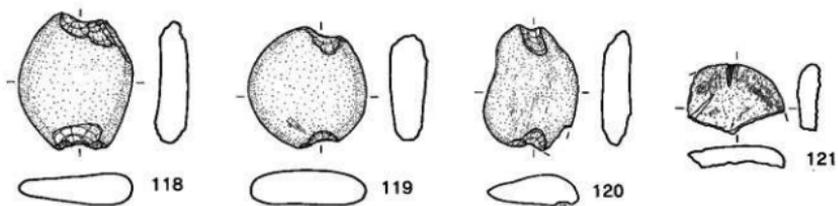


图21 石器实测图(9)

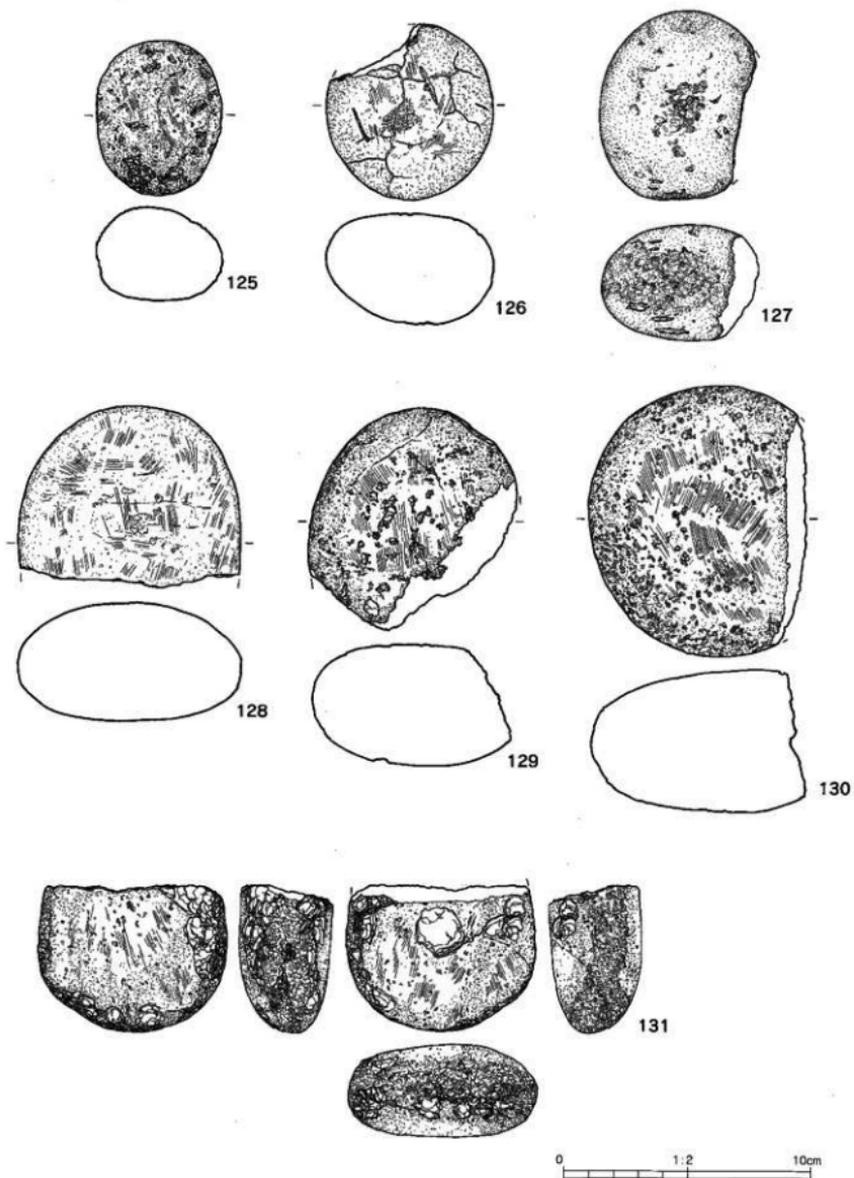
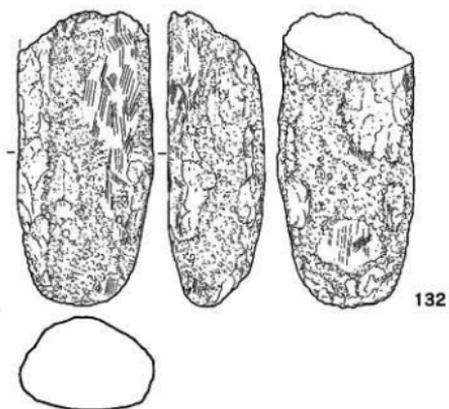
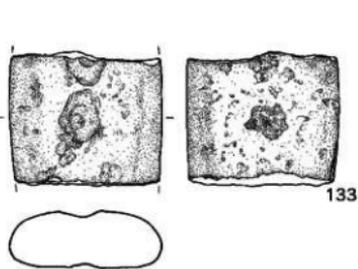


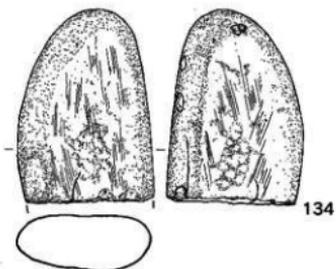
图22 石器实测图 (10)



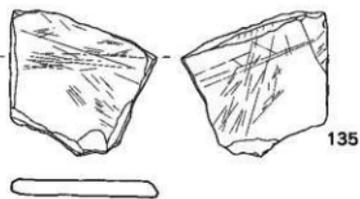
132



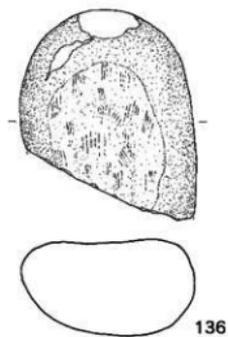
133



134



135



136

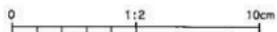
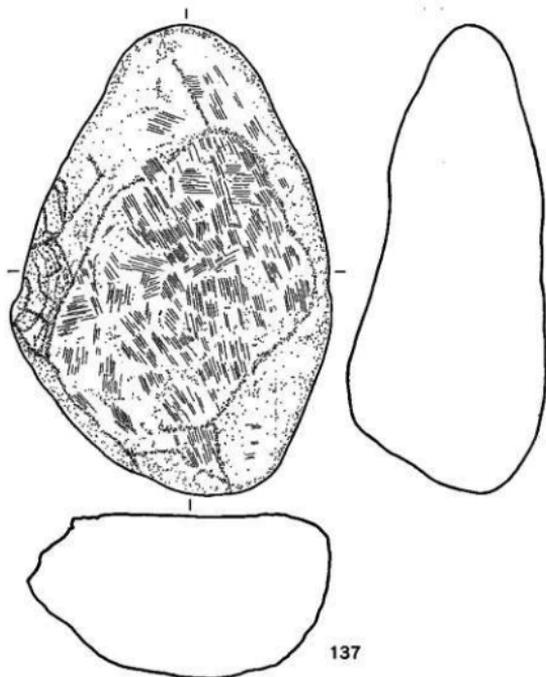
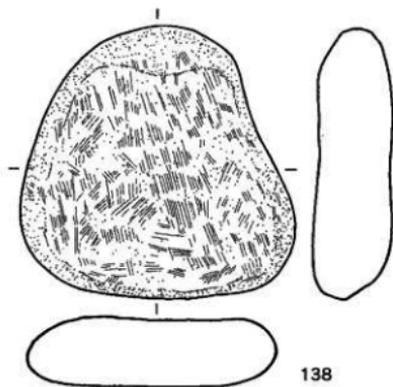


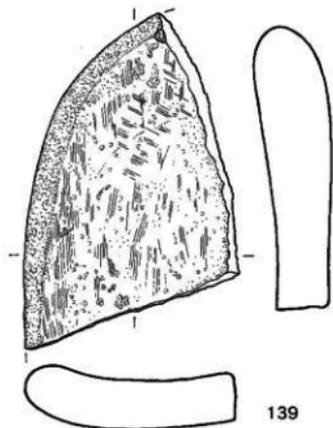
图23 石器实测图 (11)



137



138



139

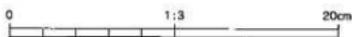


图24 石器实测图 (12)

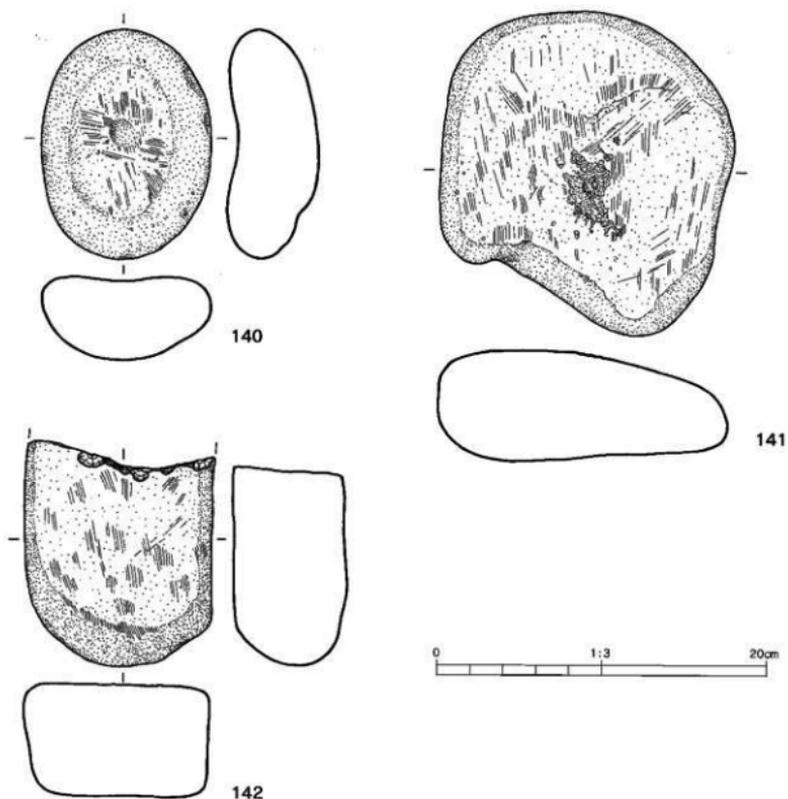


図25 石器実測図 (13)

石皿・台石 (図24・25)

137・139・140は砂岩製の石皿である。137は凹みが浅く、139は中央部が緩やかに凹み、擦痕が見られる。140は小型の石皿で、中央部がわずかに凹む。138・141・142は砂岩製の台石である。138・141は断面形が扁平で、138は表面に擦痕、141は表面に擦痕及び敲打痕が見られる。142は断面形が長方形を呈し、上部は欠損する。上面平坦部には擦痕が見られる。

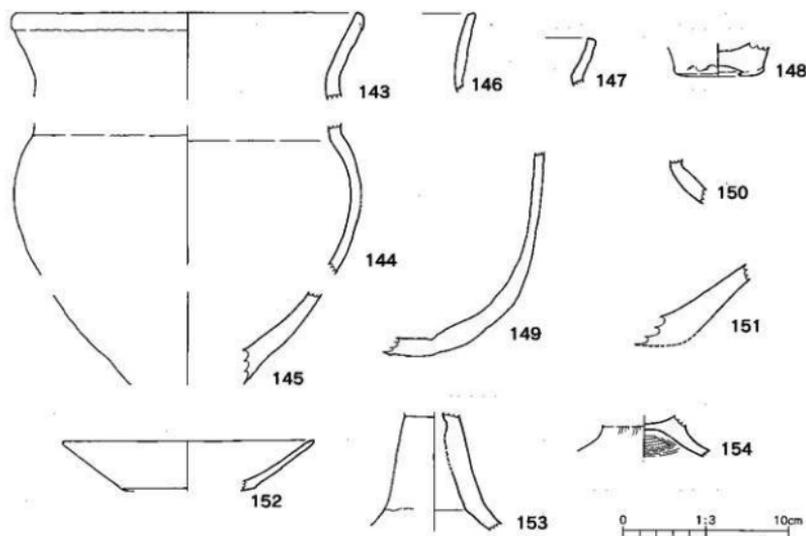


図26 弥生～古墳時代出土土器実測図

(2) 弥生時代から古墳時代の遺物

図26に示している143～149は甕である。143～145は同一固体と思われる。口縁部は「く」字形に外反するが、屈曲内外面に稜は形成しない。胴部は上部が膨らみ胴が張り、口径と胴径はほぼ等しい。器面調整は前面にナデを施しており、口縁部内面のナデは丁寧である。146はわずかに緩やかに外反する口縁部である。器面調整は外面ヨコナデ、内面ナデである。147は「く」字形に短く外反する口縁部で、屈曲部には内外面ともに明瞭な稜を形成する。器面調整は全面ナデである。148は上げ底の底部である。全面ナデによる器面調整が施されている。149は砲弾形を呈する甕の底部である。器面調整は全面ナデである。

150は壺の頸部で、肩の張りは弱い。全面ナデ調整である。151は丸底気味の壺の底部で、全面ナデ調整である。

152は高杯の杯部で、受け部は浅くほぼ水平で、体部は屈折し、口縁部は外傾しながら大きく開く。器面調整は全面ナデである。153は高杯の脚部である。脚注部は「ハ」字状を呈し、裾部は屈曲して大きく開く。全面ナデの調整が行われている。

154は高台付鉢の脚部か。脚部は外に大きく開く。器面調整は脚部内面に工具によるナデが施されている他はナデである。

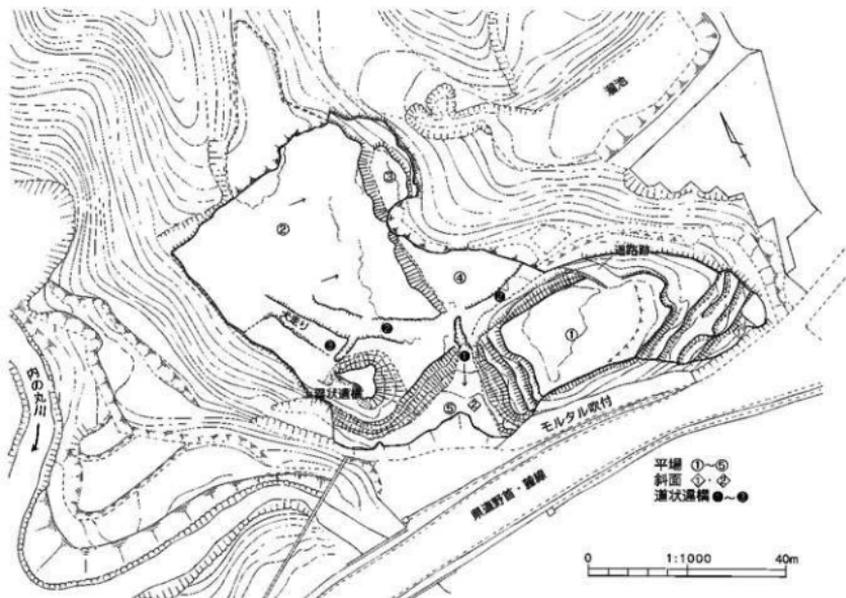


図27 柿迫遺跡縄張り図及び周辺地形図

(3) 歴史時代の遺構と遺物

ここで記述する遺構は、造成面に掘り込まれたものおよび歴史時代の遺物を出土したものである。しかし、造成自体がいつ行われたか明確な時期が不明であること、また、検出した遺構・遺物がどの段階の造成面に位置するか判断が難しいことなどから、各遺構の詳細な時期については確定することができなかった。よって、時期不明の遺構として取り扱うべきであろうが、造成を含めて、中・近世の城郭を想定できる遺構・遺物についてまとめて報告する。

縄張り図からみる城郭遺構

本調査地は山城の可能性が指摘されたことから、調査前の地形と調査によって確認された遺構とで縄張り図(図27)の作成を行った。実際に山城として機能していたかは不明であるため、地形から読みとれる範囲で城郭復元を行うことにする。

城郭遺構はA区とB区に見られる。平坦面が5箇所(平場①~⑤)確認でき、①~④は曲輪状を呈する。平場①は標高25~27mに位置し、全体の中で一番高い位置にある。南東と西側の斜面(斜面◇・◆)には帯曲輪状の段を有する。斜面◇は明瞭な段を持つ6つの平坦面があるが、斜面◆は不明瞭な段が4つ程度確認できる。平場①の南側にも帯曲輪は巡ると思われるが、モルタル吹き付けのため未確認である。平場②は一番広い平坦面で、標高21~24mにある。北側は掘削されている。東側の段落ちした所に平場

③・④があり、この2面はつながっていた可能性がある。また、南西側には地山で形成された土塁状遺構が存在する。土塁状遺構は縁辺部に南北35m程あった痕跡が見られるが、北側と南側西半分が造成のため掘削され、その一部しか残存しない。墳頂部標高は約26.5mで、北側斜面中位には石塔などが出土している。土塁状遺構の東側と平場④の南側にはわずかな段落ちがあり、犬走り状のものと遺状遺構②が確認できる。遺状遺構②は土塁状遺構への登り口と思われる分岐路(遺状遺構③)が見られる。遺状遺構③は北から南に傾斜するもので、虎口的な存在が推測できる。遺状遺構③と土塁状遺構の位置関係から、土塁状遺構は物見櫓としての機能も考えられる。

傾斜④の帯曲輪は南東側集落への防御、土塁状遺構は調査地の西側を蛇行しながら東流する内の丸川に対する監視機能を持つと思われる。城郭への登り口は平場④側にあり、そこを中心に左右に平坦面が広がる両羽翼型の城郭構造が想定される。

造成 (図28)

B区の東側にある谷は、大規模な造成によって埋められている。調査中に掘り下げた土層確認トレンチでその一部が検出されたが、全容を見出すのは難しく、最後に長さ約30m、深さ約5m(図4A～A'断面)にわたって、土の堆積状況の確認を行った。

造成は単純でなく、現表面に至るまでの様々な状況が考えられる複雑な様相を呈していた。造成の時期については、時期別に造成面を捉えることはできず、土層断面による火山灰分析や出土遺物を手掛かりに検討を行った。高原スコリア降下後から文明白ボラ降下前後の分類に止まっているが、詳細は不明で確定はできない。

層の堆積は大きく11に分かれる。

①は地山で、西側高位は上層から高原スコリアを含む黒褐色・黒色の軟質細粒土(アミa)、小林軽石を含む褐色・暗褐色の硬質細粒土(b)、暗褐色・黒褐色の硬質シルト質土(アミc)が堆積する。東側低位は高原スコリアを含む灰色・暗灰色・灰オリーブ色の粘土やシルト質土が堆積する。東側端部には硬質砂質土の堆積(アミd)も見られる。低位底からは湧水もある。

②は地山粘土ブロックが混在する暗褐色・黒褐色のシルト質土を土塁状に積み上げている。頭頂部から中位は硬くしるが、下層部はスコリア粒を含む黒色軟質土である。

③は、②の土塁状盛り土と地山①間の溝状の窪みを埋める層で、地山粘土小ブロックやスコリア粒が混在する暗褐色シルト質土やシラスが水平に堆積する。

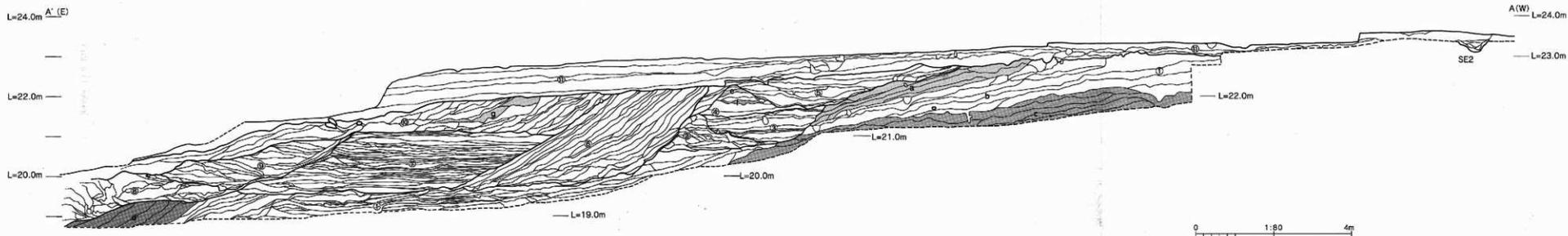
④は土塁状の盛り土で、③の窪みの埋没後、上面に地山粘土小ブロックを含む暗褐色シルト質土を水平に積み上げている。層全体はしまり、地山の灰白色粘土(アミe)やシラス(アミf)が間層に見られる。

⑤は、盛り土④と地山①の間を埋める層である。上層部に小林軽石を含む暗褐色土、下層に褐色・暗褐色のシルト質土が堆積する。土師器小片が含まれる。

⑥は掘削した地山土(シルト質土・粘土)の堆積層。

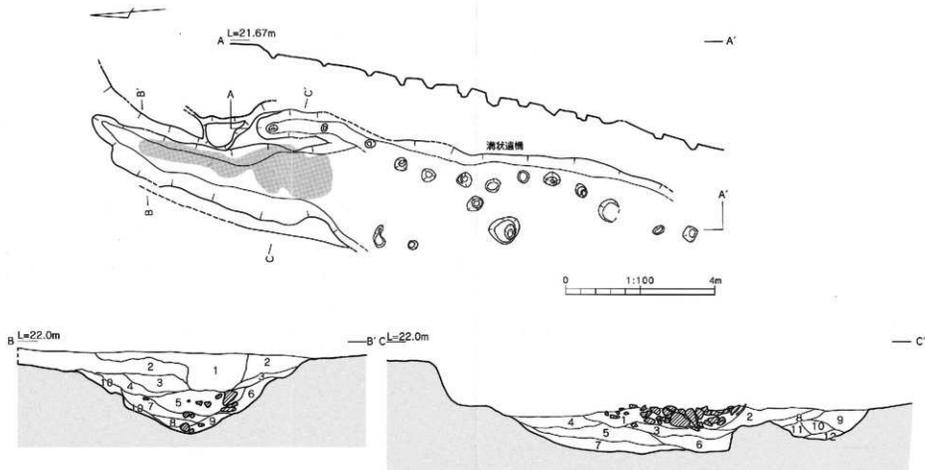
⑦は地山粘土小ブロックを含む層、粗粒砂層、細・中粒シルト質土層が繰り返し水平堆積している。

⑧は礫が混在する暗褐色・灰褐色の粘土、シルト質土、砂質土の自然堆積層。硬質。東側からの流れ込みも見られる。



- ①地山 西側高位～〔アミ①〕 黒褐色・黒色軟質細粒土
 (b) 褐色・暗褐色の硬質細粒土 小林軽石を含む。
 〔アミ②〕 暗褐色・黒褐色硬質シルト質土
 東側高位～灰色・黒灰色・灰グリーン色粘土、シルト質土 高層スコリアを含む。
 東側低部～〔アミ③〕 硬質砂質土の堆積
- ②暗褐色・黒褐色シルト質土 (造成土) ～地山粘土ブロックが混在する。
 【頂部部～単位一層くしまる。
 下部部～黄色軟質土 スコリア粒を含む。
- ③暗褐色シルト質土 (造成土) ～地山粘土小ブロック、スコリア粒が混在する。シラスとの互層
- ④暗褐色シルト質土 (造成土) ～しまり有り。地山粘土小ブロックを含む。
 地山灰白色粘土〔アミ④〕、シラス〔アミ⑤〕を含む。
- ⑤上層～暗褐色土 (造成土) ～小林軽石を含む。
 下層～褐色・暗褐色シルト粘土 (造成土) ～土師層小片を含む。
- ⑥裾野地山土 (シルト質土・粘土) の堆積層 (造成土)
- ⑦地山粘土小ブロックを含む層、細粒砂層、細・中粒シルト質土層の互層 (造成土)
- ⑧暗褐色・灰褐色粘土 (堆積りり)、シルト質土、砂質土 (自然堆積層) ～しまり有り。
 ⑨灰色・暗褐色シルト質土 (自然堆積層) ～黄色粘土を含む。しまり有り。下層ほど砂質性強い。
 最下層に土師層を含む。
- ⑩裾野地山土 (暗褐色・褐色のシルト質、砂質細粒土) の堆積層 (造成土) ～しまり有り。
 〔アミ⑥〕 礫群1を含む。
- ⑪褐色シルト質土 (造成土) ～しまり有り。文明白ボウを含む。5層に分類可

図28 B区造成土層断面図 (A～A')



- 1 暗灰色土～もろい。小林靴石粒を含む。遺状編纂埋没後の証跡み。
- 2 暗オリーブ色砂質土～硬質でしまり有り。造成土。
- 3 暗褐色砂質土～しまり有り。若干粘性有り。炭化物、小林靴石粒を含む。
- 4 暗褐色砂質土～しまり有り。若干粘性有り。小石を多く含む。
- 5 にふいオリーブ色砂質土～しまり有り。地山のシラス土を上層に含む。礫を含む。
- 6 オリーブ褐色砂質土～しまり有り。小礫を含む。
- 7 灰褐色シルト質土～しまり有り。砂岩層と円礫を含む。
- 8 灰オリーブ砂質土～しまり有り。地山のシラス粘土ブロックを含む。
- 9 暗灰色シラス土～しまり有り。角礫、円礫を含む。
- 10 褐色シラス土～しまり有り。

- 1 にふいオリーブ色砂質土～しまり有り。地山のシラス土を上層に含む。礫を含む。
- 2 暗褐色砂質中粒土～しまり有り。小礫、円礫を含む。
- 3 暗オリーブ褐色粘質土～しまり有り。煤、炭化物粒を若干含む。やや硬化。
- 4 暗オリーブ褐色土～ややしまり有り。炭化物粒を含む。
- 5 暗褐色粘質土～しまり有り。小石、炭化物粒を含む。やや硬化。
- 6 暗オリーブ砂質土～しまり有り。やや硬化。
- 7 暗褐色土～ややしまり有り。シラス粘土ブロックと炭化物粒を含む。
- 8 暗褐色砂質粘粒土～ややしまり有り。小石粒、炭化物粒、黄褐色砂質土を含む。
- 9 黄褐色砂質粘粒土～ややしまり有り。小石を含む。
- 10 暗灰色砂質中粒土～しまり有り。小石を含む。
- 11 暗灰色シルト質中粒土～硬質。煤、黄褐色砂質土を含む。
- 12 暗灰色砂質中粒土～しまり有り。

図29 遺状遺構●実測図及び土層断面図

⑨は灰色・暗褐色シルト質土と黄色粘土が8対2の割合で堆積する。しまりがあり、下層部ほど砂質性が強くなる。土師器を含む層が⑩層との間に見られる。

⑩は掘削した地山土（暗褐色・褐色のシルト質、砂質粗粒土）の堆積。硬質。礫群1が位置する堆積層はアミ掛け部分（g）である。この層中から五輪塔の水輪（290）が出土している。

⑪は表土下の層で、B区全面を覆う硬くしまった褐色シルト質土。大きく5層に分類でき、文明白ボラを含む。

層は地山（①）、自然堆積層（①の東端・⑧・⑨）、造成土（②～⑦・⑩・⑪）に分けられる。造成は地山を掘削しながら、西から東へ平坦面の拡張を行った事がわかる。

火山灰分析でみると造成の時期は大きく2時期に分けられる。層⑪には文明白ボラが混在するが、その下位の層には全く含まれていない。よって造成は、文明白ボラ降下以前と降下後ということになる。また、造成の上限は地山の堆積からみて高原スコリア降下後となる。

遺状遺構①（図29）

B区南西側の土塁状遺構と、斜面に帯曲輪を有するA区高まりの間に位置する。北から南に傾斜し、長さ約7.5m、幅1.1～2.0m、深さ0.4～0.5mを測る。断面形は高位が緩やかなV字で、低位が皿状を呈する。埋土上位に5～15cmの砂岩円礫の集中が見られ、礫間からは中近世の陶磁器片が出土している。遺状遺構と東側の斜面の間に長さ11m、幅0.7m、深さ0.25mの溝状遺構が確認されているが、遺構の西側壁面の大部分は検出できなかった。溝の底部には、一列のピット列が検出されている。ピットの間隔は、高位が1～1.2m、低位が0.5mである。ピット径は20～50cmの楕円形及び不安定を呈し、深さ10～30cmを測る。

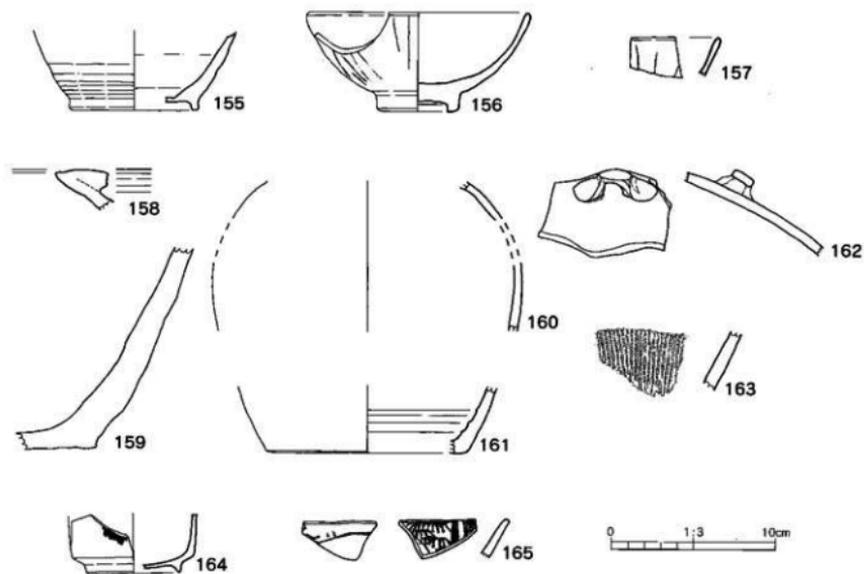
出土遺物は（図30）に示している。

155は高台付環の体部から底部である。全体的に風化が著しいため器面が丸くなっているが、高台断面形は長方形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。156と157は輸入陶磁器の青磁碗である。外面に線刻の連弁文が描かれている。15～16世紀。158～163は陶器である。158は甕の口縁部で、薩摩か肥前の産地が考えられる。17世紀。159は備前甕の底部で15～16世紀のものか。外面に刷毛状工具による縦方向の粗いナデ調整が見られる。160と161は同一個体で近世の壺である。外面に施軸、内面に軸垂れがあり、底から1.5cmのところ5mm大の砂目が1粒付着している。162は四耳壺の肩部片で、肩の張った器形を呈するものと思われる。灰褐色の胎土に内外面とも褐色釉が施されているが、外面は風化して粉状になっている。中国または東南アジア方面の所産が考えられる。近世のものか。163は近世播鉢の体部片で、在地若しくは明石方面の所産と思われる。164と165は肥前染付で、18世紀後半から19世紀後半の時期が与えられる。164は筒茶碗で外面に染付が施されている。165は輪花口縁皿の口縁部片で外面に唐草文、内面に竹文を施す。

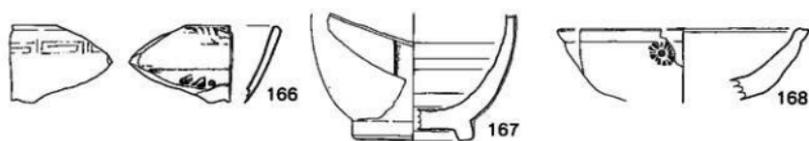
斜面④（帯曲輪）・平場⑤・土塁状遺構の出土遺物（図30・31）

ここでは城郭遺構と現地形の面がほぼ同じであった帯曲輪状の遺構が巡る斜面④と平場⑤、土塁状遺構の遺物について掲載する。

平場①～④においても城郭が存在した時期、いわゆる中近世の遺物が出土しているが、平場①は最近



道状遺構①

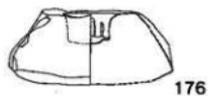
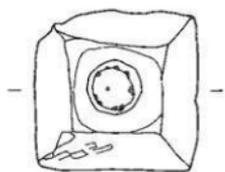
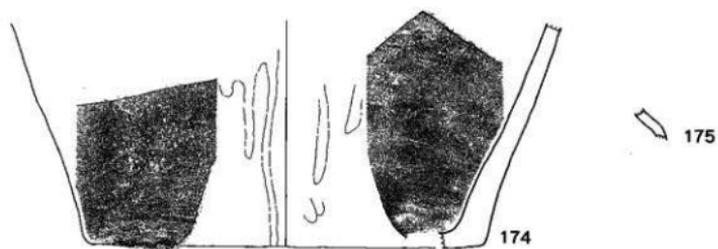
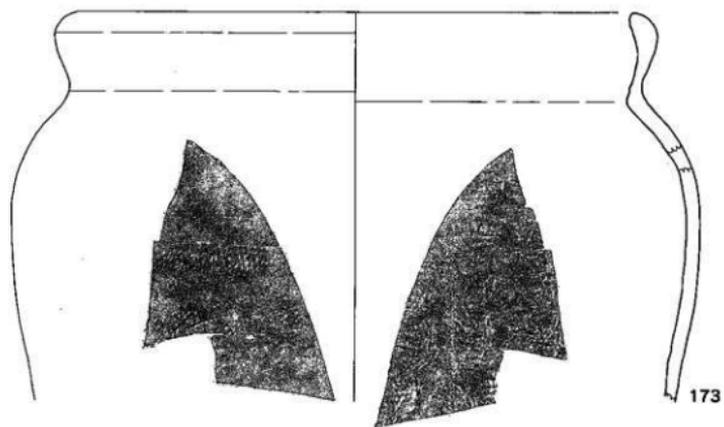


斜面◇

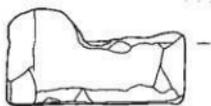


平場⑤

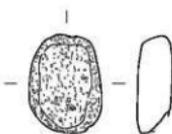
图30 道状遺構①・斜面◇・平場⑤出土遺物実測図



176



177



178

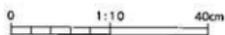


图31 土壘状遺構出土遺物実測図

まで土地が利用され、同レベルでの遺物の混在（攪乱）が多かったこと、平場②～④は造成が行われていたため遺構と出土遺物の比較が困難であることから、これらの場所で出土した遺物については時期別に分類を行って後で報告する。

斜面令では縄文早期土器片や青磁、土師質土器などがわずかに出土している。そのほとんどが流れ込みと思われる。166と167は輸入陶磁器の青磁碗である。166は内外面にヘラ先による雷文が描かれている。167は器面が厚く、体部は内湾する。外面にはヘラ状工具による縦方向の1条の片切彫りが見られる。いずれも15～16世紀か。168は土師質の火入れと思われる。皿状を呈し外面に花印のスタンプが見られる。在地産で中近世のものか。

平場⑤では近世から近代の陶磁器片や瓦などが出土している。流れ込みがほとんどである。169は陶器瓶の口縁部で、産地、時期ともに不明である。170は肥前系の青磁瓶で18世紀末～19世紀。土塁状遺構上で出土した175と同一個体と思われ、流れ込みが考えられる。171は肥前系染付の猪口で、18世紀後半～19世紀初頭。172は肥前系染付の小盃である。外面全体に呉須が塗られている。18世紀～19世紀前半。

土塁状遺構では墳丘の北側斜面中位に近世甕、青磁、石塔が出土している。173と174は近世の甕である。外面に格子目タタキ、内面に青海波文状及び格子目の当て具装が見られる。175は肥前系の青磁瓶の肩部片である。18世紀末～19世紀。176と177は五輪塔の火輪である。178は両面に平坦面を持つ軽石である。

掘建柱建物跡（SB）

掘建柱建物跡はB区に9棟検出している。建物は谷を取り巻くように平坦面（平場②）に分布する。遺構検出面は地山の岩盤層やシルト質土、谷を埋めた造成土上面である。柱穴には、柱を固定するための根固め石を持つしっかりとしたものもあり、土師皿、陶磁器、土錘、銭貨などを出土している。

SB 1（図32）

B区北側の東寄りに位置し、SB 2やSE 1と重複する。構造は桁行4間、梁行2間の南北棟を呈するが、南側梁行の中央柱がやや突出している。規模は桁行7.6～7.8mで、東側柱間は北から2.1m、2.0m、1.8m、1.9m、西側柱間は北から2.0m、1.7m、1.7m、2.2mを測る。梁行は3.5～3.7mで、北側柱間は東から1.7m、1.8m、南側柱間は東から2.0m、1.7mを測る。主軸はN-0°-Wを示す。柱穴は岩盤層に掘り込まれ、径が30～60cmの円形を呈し、深さは20～50cmである。遺物が出土していないため時期の特定はできないが、建物の主軸方向からみてSB 3・4・7・8・9のいずれかと同時期に存在していた可能性が持たれる。

SB 2（図33）

B区北側東寄りに位置し、SB 1やSE 1と重複する。柱穴は岩盤上で検出している。構造は桁行2間、梁行2間で3.35～3.5mのほぼ正方形を呈する。北側柱間は東から1.8m、1.7m、南側柱間は東から1.85m、1.65m、東側柱間は北から1.6m、1.85m、西側柱間は北から1.75m、1.6mを測る。主軸はN-3°-Wを示す。柱穴は径20～40cmの円形を呈し、深さは10～45cmである。遺物が出土していないため

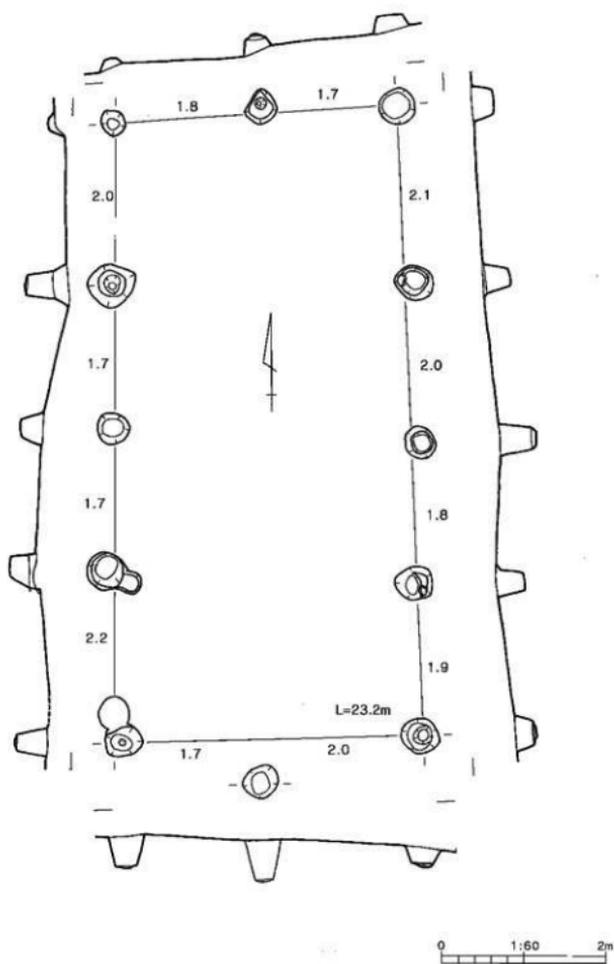


图32 SB 1 实测图

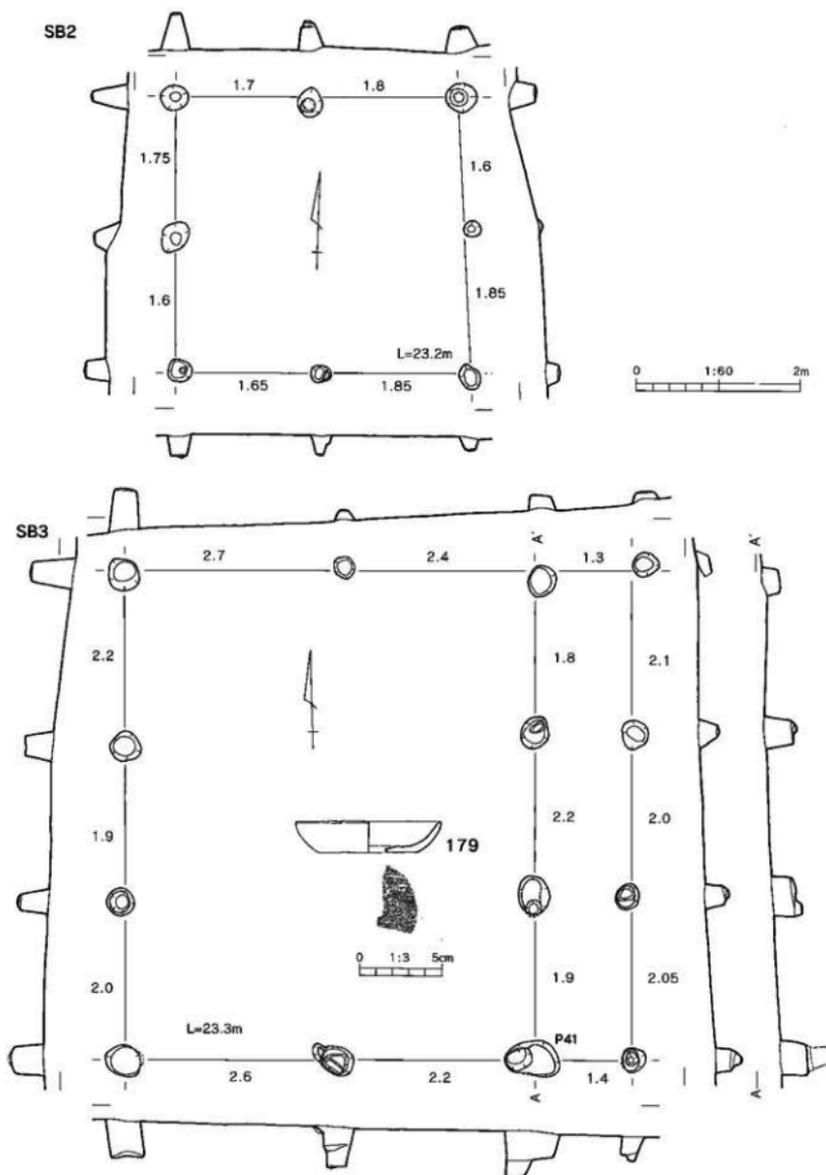


図33 SB2・3実測図及びP41出土遺物実測図

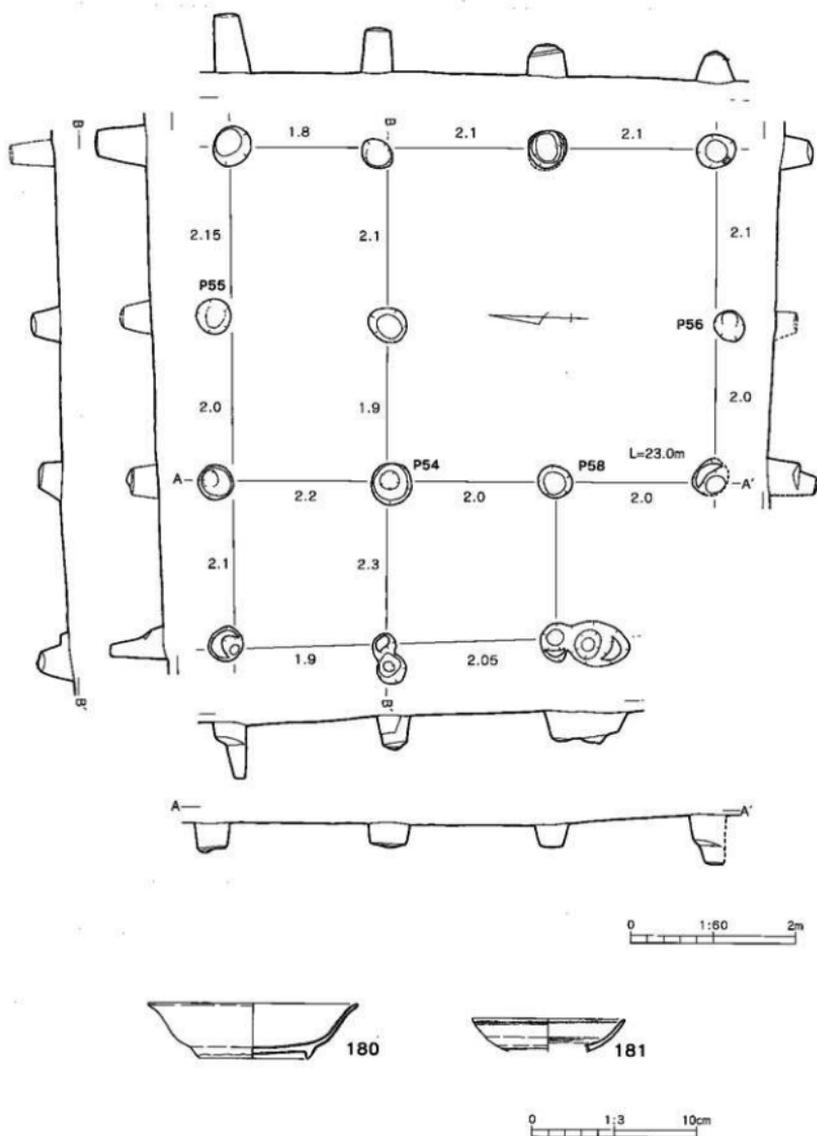


図34 SB4実測図及びP2・54出土遺物実測図

時期の特定はできないが、重複するSB1と若干の時期差を持ちつつ、主軸方向からみてSB3・4・7・8・9のいずれかと同時期に存在していたことが考えられる。

SB3 (図33)

B区北側中央部に位置し、SE1と重複する。構造は桁行3間、梁行2間の南北棟で、東側に廂を有する。規模は桁行5.9~6.1mで東側柱間は北から1.8m、2.2m、1.9m、西側柱間は北から2.2m、1.9m、2.0m、梁行は4.8~5.1mで、北側柱間は東から2.4m、2.7m、南側柱間は東から2.2m、2.6mを測る。廂は桁行6.15m、梁行は北側1.3m、南側1.4mである。主軸はN-2°-Eを示す。柱穴は径25~40cmの円形や長軸が50~65cmの中段にテラスを持つ楕円形があり、深さは15~60cmを測る。遺物はP41から土師皿(179)が1点出土している。

179は糸切り底を呈し、体部は内湾する。

SB4 (図34)

B区南側中央部に位置し、SE2と重複する。建物の南西側は土塁状遺構のちょうど裾部にあたり、柱の並びは確認できず、桁行3間、梁行2間の南北棟の西側に1間×2間の張り出しが付く鍵状の構造を呈している。規模は桁行6.0~6.3mで、東側柱間は北から1.8m、2.1m、2.1m、中央柱間は北から2.1m、4.2m、西側柱間は北から2.2m、2.0m、2.0m、梁行は4.0~4.2mで、北側柱間は東から2.15m、2.0m、中央北側柱間は東から2.1m、1.9m、中央南側柱間は4.2m、南側柱間は東から2.1m、2.0mを測る。西側張り出し部分は桁行3.95mで、柱間は北から1.9m、2.05m、梁行は北から2.1m、2.3m、1.9mを測る。主軸はN-2°-Wを示す。柱穴は円形で、径35~50cm、深さは30~70cmである。柱穴の埋土は炭化物が多く含まれ、柱の痕跡も明確なものが多かった。柱の径は約15~20cmで、根固め石(P55、P56)を有するものがある。遺物はP2から染付皿(181)、P54から白磁皿(180)が出土している。

180は中円白磁皿で口縁部が端反りを呈する。磁器は15~16世紀と思われる。181は肥前染付皿で見込みに蛇ノ目軸刺ぎが見られる。19世紀後半と思われる。

SB5 (図35)

B区中央部よりやや北側に位置し、SB6、SB7、SB8と重複する。構造は桁行4間、梁行2間の東西棟で、柱径及び柱間の狭小な小型建物である。規模は桁行3.1~3.25mで、北側柱間は東から0.8m、0.65m、0.9m、0.9m、南側柱間は東から0.8m、0.75m、0.85m、0.7m、梁行は1.55~1.7mで、東側柱間は北から0.8m、0.75m、西側柱間はいずれも0.85mを測る。主軸はN-85°-Wを示す。柱穴は径15~25cmの円形もしくは長軸30cmの楕円形を呈し、深さは15~50cmを測る。P21・P22・P31から底部へラ切りの土師皿などが数点出土している。

182はP21から出土した土師皿である。底部はへラ切りで、口縁部は太く仕上げている。

SB6 (図35)

B区中央部よりやや北側に位置し、SB5、SB7、SB8と重複する。構造は桁行2間、梁行1間の東西棟である。規模は桁行4.1~4.25mで、北側柱間は東から2.2m、1.9m、南側柱間は東から2.15m、2.1m、梁行は4.0~4.1を測る。主軸はN-5°-Eを示す。柱穴は径35cmの円形や長軸50~70cmの卵形を呈し、深さは15~60cmを測る。出土遺物がないため時期の確定はできないが、造成面に掘り込みを持つことから、造成後の遺構として捉えられる。

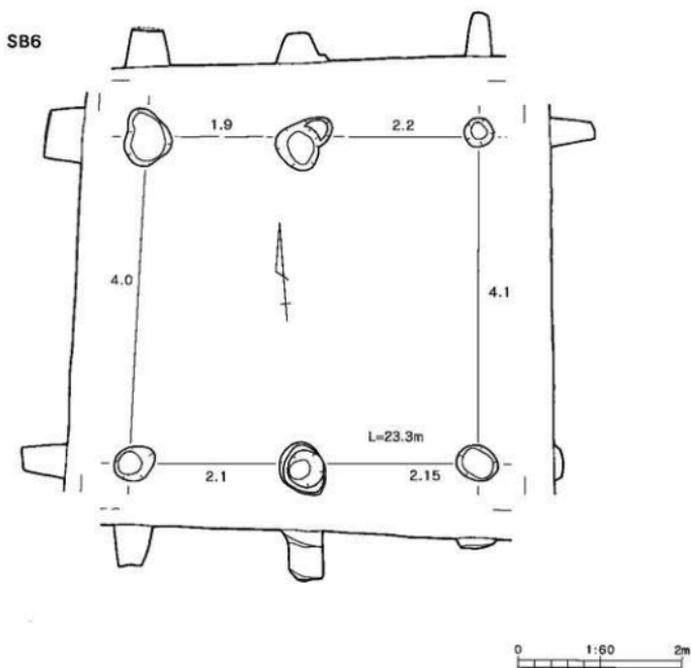
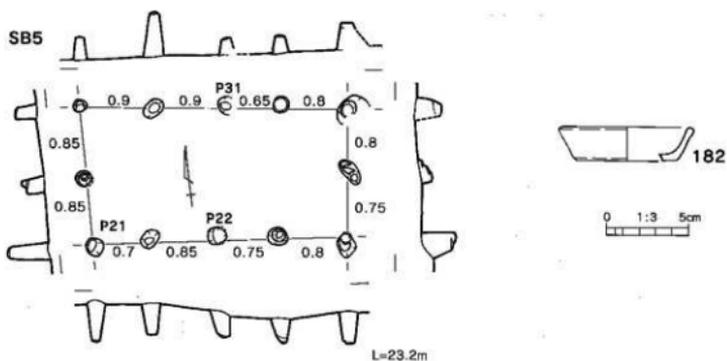


図35 SB5・6実測図及びP21出土遺物実測図

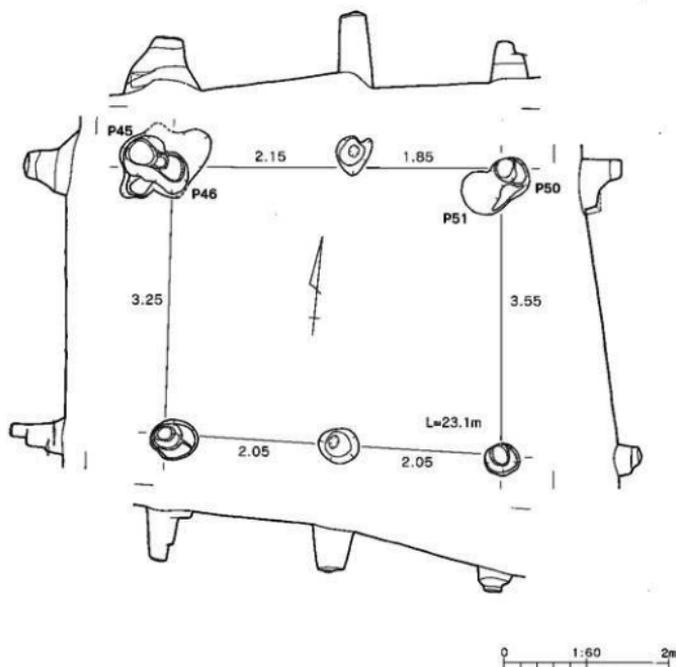


図36 SB7実測図

SB7 (図36)

B区中央部よりやや北側に位置し、SB5、SB6、SB8と重複する。構造は桁行2間、梁行1間の東西棟である。規模は桁行4.0~4.1mで、北側柱間は東から1.85m、2.15m、南側柱間は東から2.05m、2.05m、梁行は3.55~3.25mを測る。主軸はN-94°-Wを示す。柱穴は径40~55cmの円形や不定形を呈し、深さは35~100cmを測る。遺物は出土していない。主軸の方向からSB1~4のいずれかと同時期性が考えられる。P46とP50はSB8のP45とP51と切り合いが見られる。

SB8 (図37)

B区中央部よりやや北側に位置し、SB5、SB6、SB7、SB9と重複する。構造は桁行4間、梁行2間の東西棟であるが、桁行南側列は推定される2基の柱穴が検出できなかった。規模は桁行9.05m、北側柱間は東から2.35m、2.65m、2.0m、2.05m、南側柱間はいずれも2.0mである。梁行は4.55mで東側柱間は2.55m、西側柱間は北から2.25m、2.3mを測る。主軸はN-89°-Wを示す。柱穴は径50~60cmの円形や不定形を呈し、深さは35~100cmを測る。柱穴の深さにばらつきが見られるが、建物の西から東に向かって検出面が傾斜しており、同レベルで検出した場合本来なら東側の柱穴も

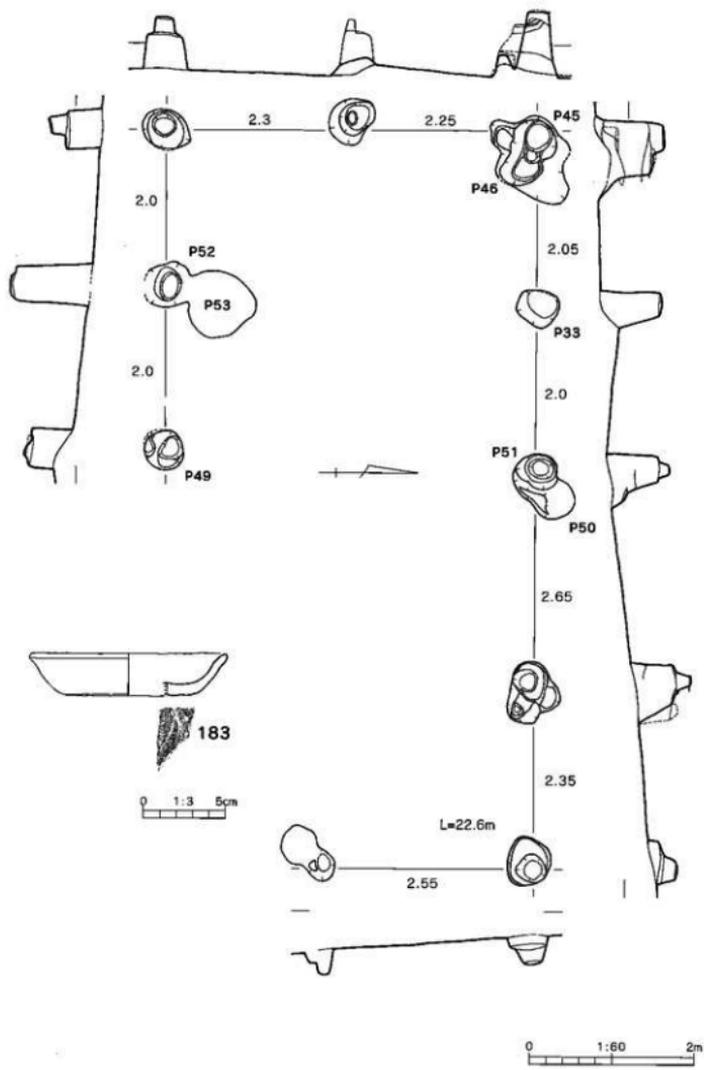


図37 SB 8 実測図及び P33 出土遺物実測図

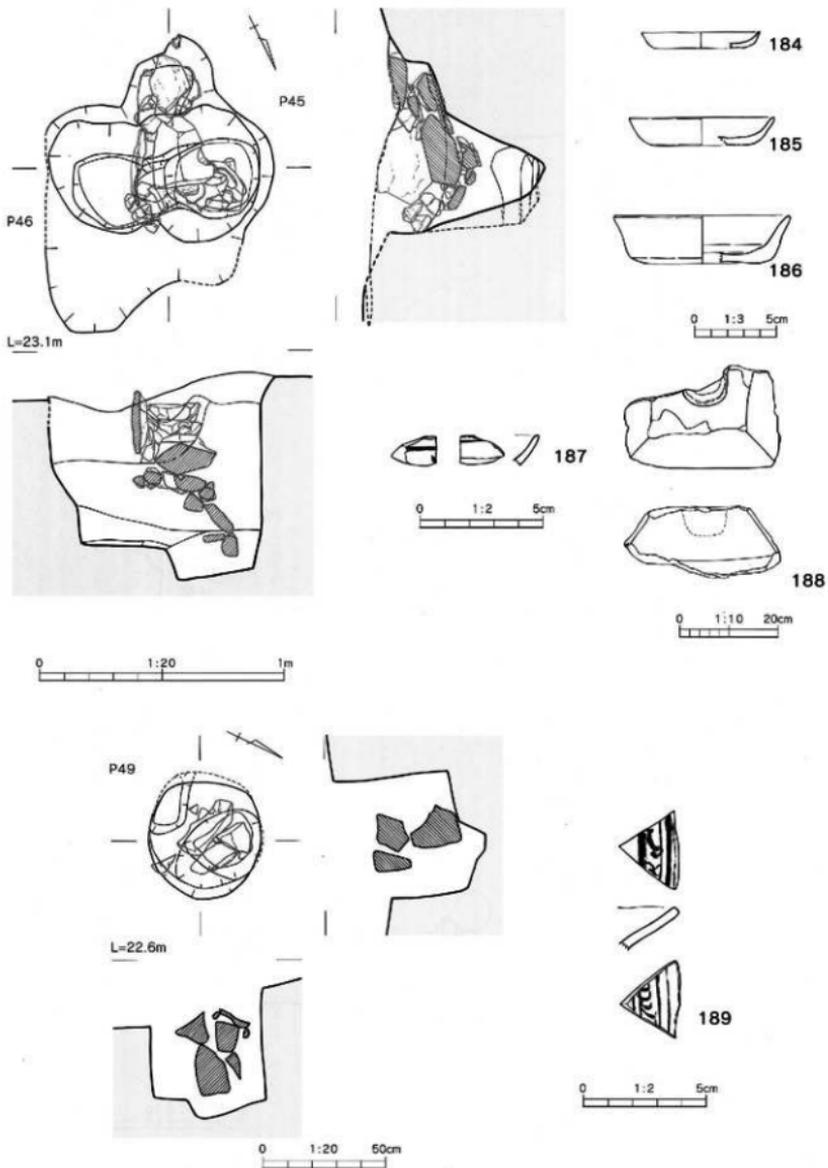


図38 P45・46・49実測図及び出土遺物実測図

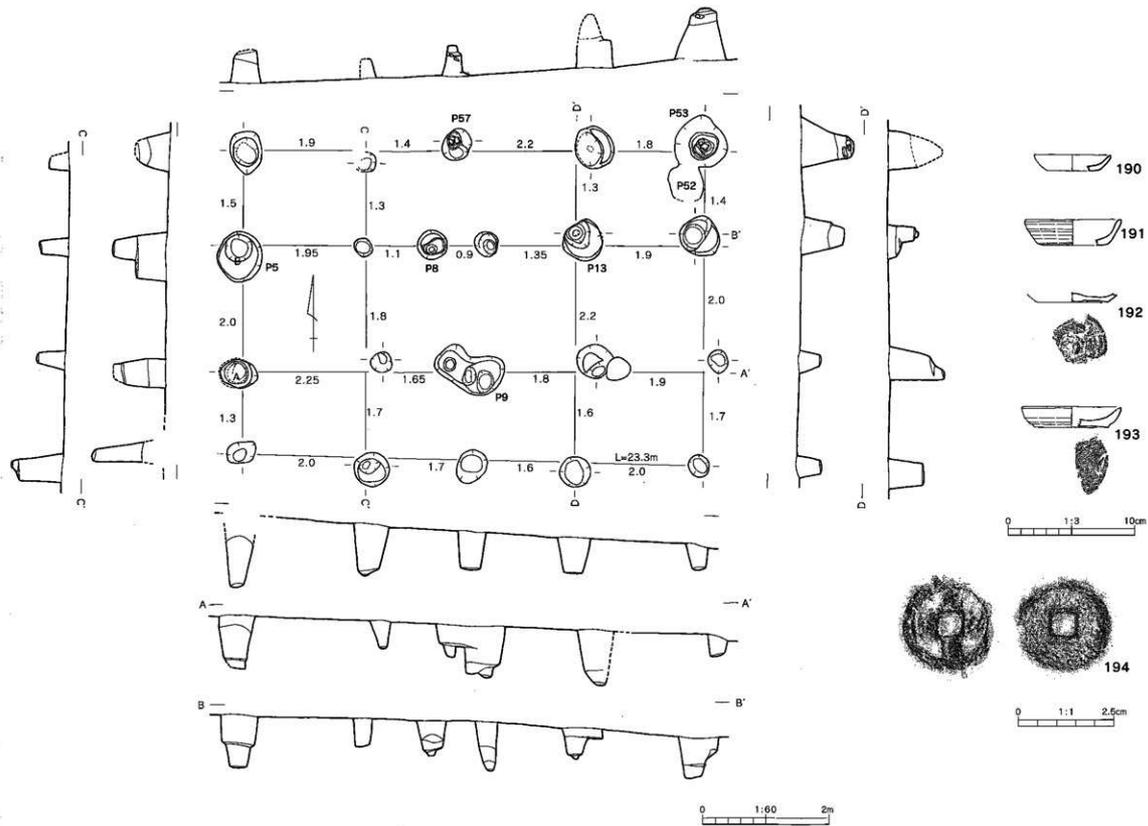


图39 SB9実測図及びP5・8・9・13出土遺物実測図

100cm程の深さがあった可能性がある。柱穴径が大きく、深さもしっかりした建物で、P45やP49には石塔などの大形礫が根固め石に利用されている。P52は根固め石と思われる径が30cm程の大きな砂岩礫がはまっており、SB9のP53との切り合いが見られる。P33・P45・P49から土師皿、陶磁器などが出土している。

出土遺物は図37・38に図示している。P33からは183のほか数点の土師皿・坏が出土した。183は糸切り底を呈する土師皿で、口縁部は外反する。

P45は根固め石の状況からP46の後に掘り込まれたものと思われる。根固め石は五輪塔の火輪(188)など大きめの礫が使用され、P46との間に仕切りをつくるように検出された。P46を埋める土がゆるいため柱が倒れないよう礫で固定させたものと思われる。礫は赤化しており、熱を受けた様子が窺える。遺物は土師皿や染付が出土している。184はへら切り底を呈する皿である。口縁部内外面にススが附着する。185はへら切り底の皿で、口縁部は外側に直線的に延びる。186はへら切り底の皿で、口縁部は外反する。187は肥前染付の皿で19世紀後半か。

189はP49から出土している。景德鎮窯の染付皿口縁部片である。口縁部は稜花と思われるが、小片のため定かではない。口唇部内面の稜上は釉の剥落が見られる。明末16~17世紀初頃。

SB9 (図39)

B区中央部に位置し、SB8と重複する。構造は桁行4間、梁行3間の総柱建物の東西棟としているが、柱間や柱穴の規格がかなり不規則である。規模は桁行7.2~7.6mで柱間は1.4~2.25m、梁行4.8~5.1mで柱間は1.3~2.2mを測る。主軸はN-91°-Wを示す。柱穴は径25~85cmの円形や不定形を呈し、深さは35~90cmを測る。P53やP57には礫が見られ、P53の底には粘土を貼ったような薄い粘土層が見られた。

遺物はP5・8・9・13から土師皿、銭貨などが出土している。190~192はP8から出土した土師皿である。いずれもへら切り底を呈する。図示しているもの以外に糸切りの底部片が出土している。193はP13から出土した土師皿で糸切り底を呈する。内外面及び胎土が黒色で、内面にはスス状のものが附着していることから、熱を受けた可能性が考えられる。194はP5から出土した渡来銭(北宋)である。銘銭は「元祐通寶」で、初鑄年次は1086年である。この他P5には土師皿小片(糸切り底)が数点出土している。

ピット群(P)

建物として並ばなかった小穴をピット群として記述する。

径が15cmから80cm大のものまで様々で、埋土も土質、土色、含有する粒の種類や大きさによって6種類に分類できる。根固め石を有するしっかりしたものや遺物を出土するものも比較的多く見られる。遺構の時期については、造成土に掘り込まれていることから遺物の攪拌が考えられ、出土遺物による時期の特定は難しいものと思われる。根固め石を持つP47・P48とピットから出土した主な遺物を図示する。また、ピット出土の遺物について一覧表を記載する。

P47 (図40)

B区東側中央部に位置する。谷を埋める造成土上で検出を行った。長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.95mを測る。10~30cm大の砂岩の根固め石が中央に集中する。根固め石の中には砂岩製の砥石(195)も含

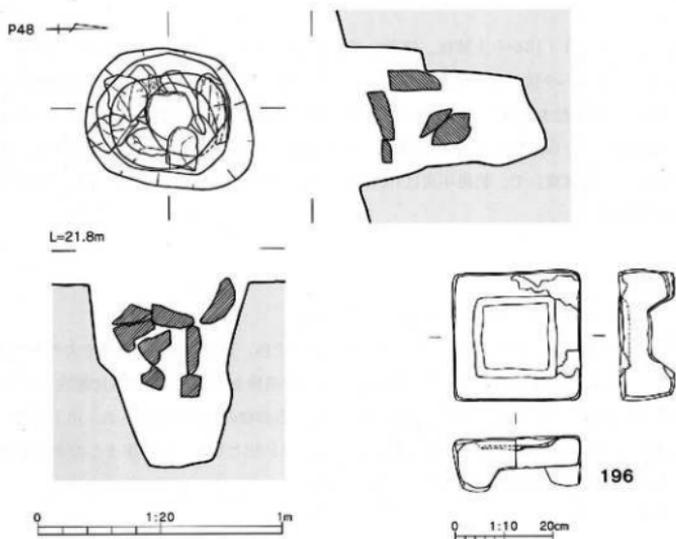
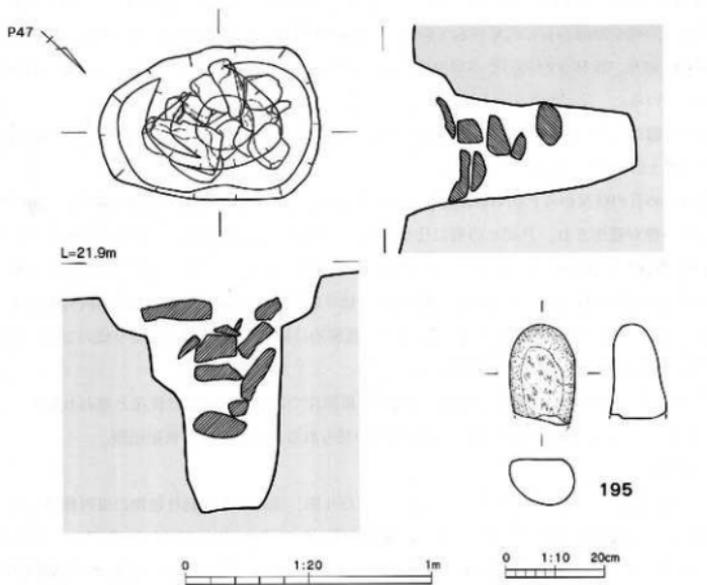


図40 P47・48実測図及び出土遺物実測図

まれる。

195は砂岩製の砥石である。中央部がやや凹み、上面中央部に著しい擦痕が見られる。

P48 (図40)

B区東側中央部、P47の東側に位置する。造成土上で検出した。長軸0.7m、短軸0.58m、深さ0.75mを測る。10~20cm大の砂岩製の根固め石が中央部に集中する。根固め石の中には墓石の転用が見られる。

196は墓石の一部と思われる石製品である。平面形は方形で4足付きである。中央部に抉り状の窪みを持つ。石材は砂岩である。

ビット出土の遺物 (図41)

197はP35から出土した土師皿である。糸切り底を呈し、口縁部内外面に若干黒変している。198はP30から出土した中国染付の端反り皿である。外面は蔓草文か。景徳鎮窯産で16~17世紀初頭。199~207は土鍾である。199はP11、200はP17、201はP29、202はP32、203・204はP36、205~207はP40から出土している。201は「大」の線刻が描かれている可能性を持つ。208はP11出土の泥岩製の砥石である。下部が薄くなり、よく使い込まれた様子が窺える。209はP38出土の磨石である。石材は尾鈴酸性岩である。

表1 ビット出土遺物一覧

| ビットNo. | 出土遺物 | 備考 |
|--------|--------------------------------|------|
| 1 | 土師器小片 | |
| 2 | 肥前染付 (19C後半) | SB 4 |
| 5 | 赤土~赤黒の土器片、土鍾 (糸切り・ヘラ切り)、陶器片、鏡片 | SB 9 |
| 7 | 土師皿 (ヘラ切り) | |
| 8 | 土師皿 (糸切り・ヘラ切り) | SB 9 |
| 9 | 土師環 | SB 9 |
| 10 | 土師皿 | |
| 11 | 土師環? 粘土塊、砥石、土鍾 | |
| 12 | 肥前染付皿 (19C前半) | |
| 13 | 土師皿 (糸切り・ヘラ切り) | SB 9 |
| 14 | 土師器小片 | |
| 15 | 土師器小片 | |
| 17 | 土鍾 | |
| 18 | 中国青磁碗 (16C) | |
| 21 | 土師皿 (ヘラ切り) | SB 5 |
| 22 | 土師皿? | SB 5 |
| 24 | 土師皿? (ヘラ切り) | |

| ビットNo. | 出土遺物 | 備考 |
|--------|------------------------------|------|
| 27 | 土師皿? | |
| 29 | 土鍾 | |
| 30 | 染付皿 (景徳鎮窯) | |
| 31 | 土師環? 皿? | SB 5 |
| 32 | 土師器小片、土鍾 | |
| 33 | 土師皿 (糸切り)・坏 | SB 8 |
| 34 | 中国青磁碗 (15C) | |
| 35 | 土師皿 (糸切り)、陶器 (内野山重17C~18C前半) | SB 3 |
| 36 | 土鍾 | |
| 38 | 磨石 | |
| 40 | 土鍾 | |
| 41 | 土師皿 | SB 3 |
| 45 | 土師皿 (ヘラ切り)、染付皿 | SB 8 |
| 47 | 砥石 | |
| 48 | 石製品 | |
| 49 | 染付皿 (景徳鎮窯) | SB 8 |
| 54 | 白磁皿 | SB 4 |

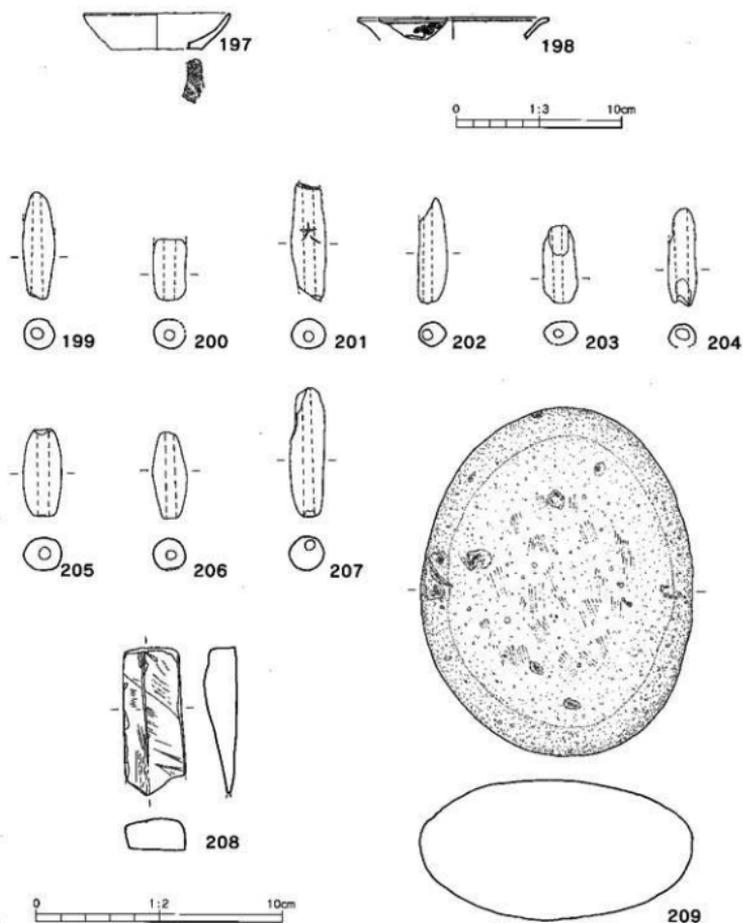


図41 ビット出土遺物実測図

土坑 (SC)

SC 3 (図42)

B区中央よりやや北東部、SB 8の東側に位置する。B区東側にある谷を埋め立てた造成土上に掘り込まれたものである。長軸1.1m、短軸0.9mの卵形を呈し、深さ0.74mを測る。西側中段にテラスを有し、東側はビット状に落ち込む。遺構内には10~20cm大の砂岩礫や軽石が詰まっており、その中には

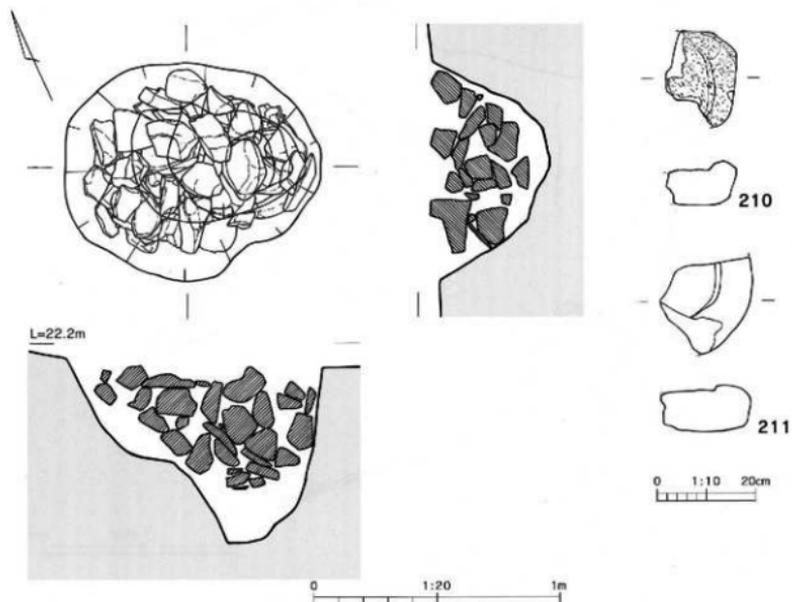


図42 SC 3 実測図及び出土遺物実測図

墓石の粗石として加工されたと思われるもの(210・211)も含まれていた。この遺構は下部形態から見ると柱穴とも考えられるが、建物として柱列が確認出来なかったことから土坑として報告する。遺構の性格は不明である。

210は加工軽石である。半分以上が欠損しているが、上面の中央部を柄穴状に一段低く窪ませている。211は凝灰岩で、210と同じように上面中央部を窪ませたものである。

溝状遺構 (SE)

B区に3条検出している。

SE 1 (図43)

調査区の北側に位置し、宮崎屑群上で検出を行った。西から東に直線的に走行する。長さ約18m、幅1.0~2.6m、深さ0.2~0.4mを測り、断面形は皿状を呈する。

出土遺物は、図44の213と214である。213は仏飯器の高台の裾部で外面はコバルトブルーを呈する。瀬戸・美濃産の19~20世紀。SE 3出土の212と同一個体と思われる。214は白磁小盃底部片で19~20世紀の瀬戸・美濃産である。

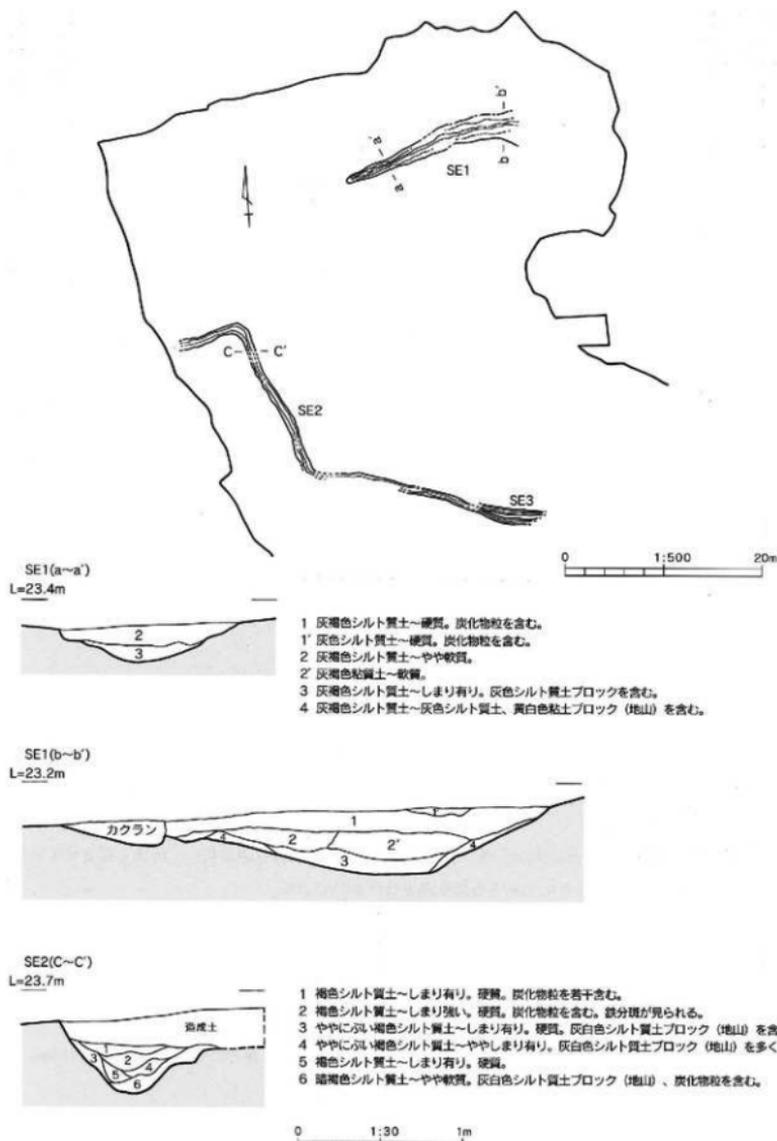


図43 SE 1～3 遺構分布図及び土層断面実測図

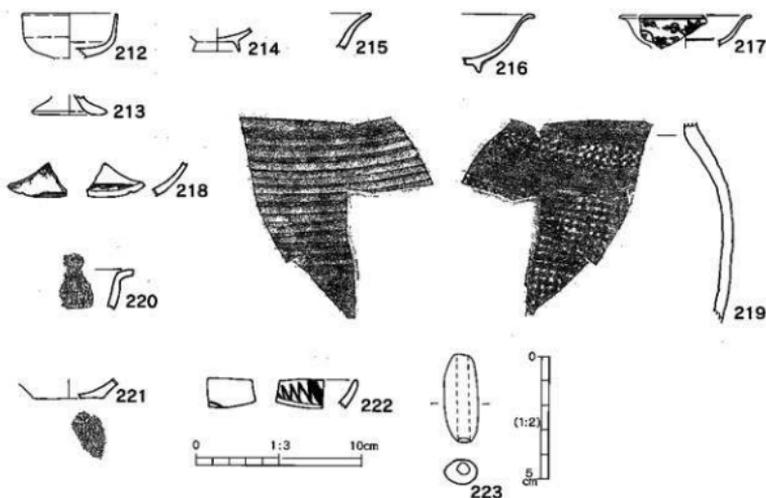


図44 SE 1～3出土遺物実測図

SE 2 (図43)

調査区の南西側にある土塁状の高まりに沿って、西から東にL字状に走行する。長さ約43m、幅0.4～1.1m、深さ0.3mを測り、断面形は碗状を呈する。

出土遺物は、図44の215～220である。215は中国産の端反り青磁碗か。216は中国白磁皿で15～16世紀。端反り口縁を呈し、高台端部は露胎で内面に砂か附着している。217は中国染付皿である。端反り口縁を呈し、外面は草花文か。景徳鎮産で16世紀後半～17世紀初頭。218は関西系の染付碗か。内外面に薄く染付が施されている。19世紀代。219は肥前系の陶器甕か。内外面とも露胎で、外面は回転ナデによる凹線、内面は格子目当て具痕が見られる。17世紀後半。220は近世の小型播鉢と思われる。内外面とも暗赤灰色釉が施され、内面は縦方向の櫛目である。

SE 3 (図43)

調査区の南側に位置し、SE 2 に切られている。西から東に直線的に走行し、長さ約7m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。

出土遺物は図44に示した221～223である。221は糸切り底を呈する土師皿の底部片である。222は肥前染付皿の口縁部である。223は土鏝である。

礫群 (図45)

B区南東側に位置する。平場②と平場④の間の緩斜面中位で検出した。礫群は南北2群に分かれている。北側礫群(礫群1)は法面に貼り付くように検出され、南北5m、東西2mの範囲に集中する。主

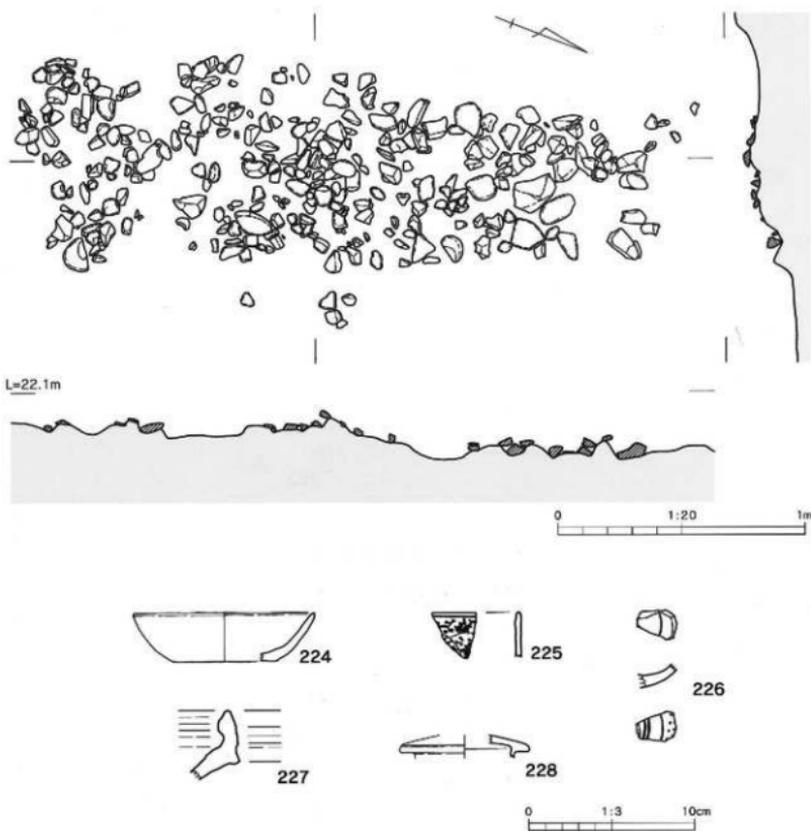


図45 礫群2実測図及び出土遺物実測図

軸はN-49°-Wを示す。礫群の上下には造成土が確認されている。南側礫群（礫群2）は北側礫群の覆土上で検出した。検出面はほぼ平坦で、南北2.6m、東西1.0mの範囲に帯状に広がる。主軸はN-21°-Eを示す。礫群1・2は共に5~20cmの砂岩円礫から成り、礫群2の礫間には近世の陶磁器片などが含まれている。

遺物は図45に示している。224は土師器の坏である。225と226は16世紀~17世紀初頭の中国染付である。225は猪口の口縁部で、口唇部は露胎、外面は唐草文である。226は碗の底部で外面に点描が見られる。227は16世紀代の備前甕口縁部片である。直口する口縁部外面のみに軸が附着している。228は上瓶

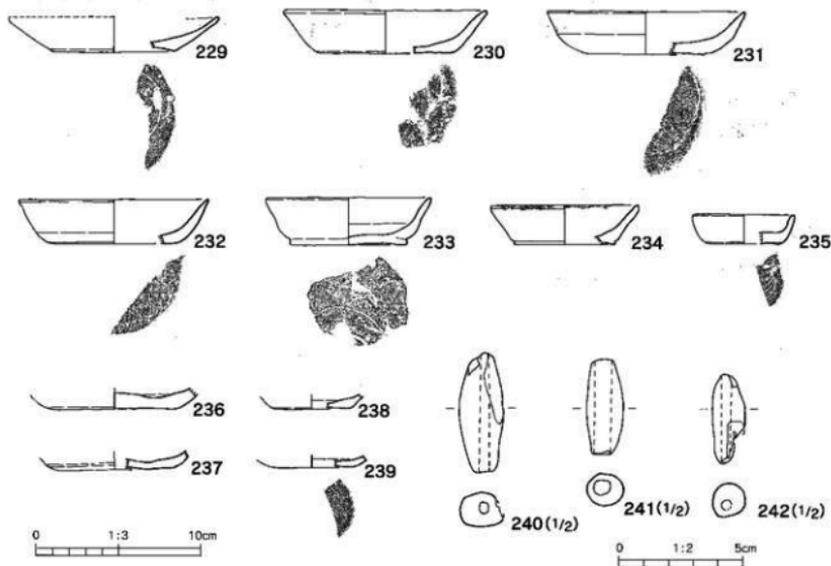


図46 出土遺物実測図(1)

の蓋か。天井部外面に銅緑釉が施されている。嬉野の内野山窯産で19世紀頃。また、図47に示している264の一部も出土している。16世紀～17世紀初頭の景徳鎮窯染付皿の底部である。

遺構外出土の遺物(図46～図49)

229～235は土師皿である。229は糸切り底で、内湾気味の体部が外側に開いて直口する。230は糸切り底を呈し、口縁部はやや外反する。231と232は体部から口縁部がやや外傾して直口する。いずれも糸切り底である。233は円盤状の高台を持ち、糸切り底を呈する。234も底部に円盤高台状のくびれを持ち、糸切り底を呈する。口唇部内外面にスス付着痕が見られる。235は糸切り底を呈する小皿である。236～239は土師皿および坏の底部で、236～238はヘラ切り底、239は糸切り底である。

240～242は土鍾である。

図47には輸入陶磁器を示している。

243は同安窯系白磁皿の体部片と思われる。外面はヘラケズリ調整後襷描き、内面にはヘラ描きが見られる。12世紀頃のものと思われる。

244～252は青磁である。244は外面にヘラによる片切彫連弁文が施された碗である。連弁の先端は丸く、銅はない。15世紀頃か。245と246は外面にヘラ先による細描連弁文が施されている。15～16世紀。247～249は外面にヘラ描きによる雷文が施された碗である。15世紀頃と思われる。250は碗の口縁部片で、内面に縦方向のヘラ描きが見られる。251と252は稜花皿で、内面に線刻が描かれる。

253~259は白磁である。253~257は端反り碗で、15~16世紀頃。258は明末16~17世紀初頭の皿で、外面にヘラ先による片切彫り及び線刻が見られる。259は瓶の口縁部か。口唇部がかなり鋭利な仕上げである。16~17世紀初頭のものと思われる。

260~265は景德鎮窯染付で、16世紀~17世紀初頭の年代が与えられる。260は碗の口縁部で外面に波文が見られる。261は碗の体部で、外面は蔓草文と思われる。262は皿の口縁部片で内面に草花の連続文帯が見られる。口唇部外面の縁上は釉が剥落している。263は皿の口縁部片である。口唇部内面縁上の釉が剥落している。264は皿の底部で、見込みに玉取獅子が描かれている。豊付は無釉で、内側に砂が付着している。高台接合部の縁上は釉の剥落が見られる。265は皿の口縁付近から体部で、内面に四方禪文、外面体部に片へら切りによる連弁文が施されている。266は中国南部の粗製染付皿で口唇部内面が無釉である。17世紀頃のものと思われる。

図48には国産の陶磁器等を示している。

267は肥前染付碗の体部で、外面に東風が描かれている。17世紀後半~18世紀と思われる。268は肥前染付碗の口縁部から体部で、端反りの口縁を呈し、口縁部に若干波状の歪みが見られる。外面に唐草文、内面に梅文が描かれる。18世紀代。269は肥前系染付碗の体部~底部である。外面は唐草文と思われる。18世紀代。270は肥前系染付碗の体部~底部である。見込みは蛇ノ目線割きによる重ね焼きが見られる。見込みは二重圓線と中心にコンニャク印判五弁花文が施されている。18世紀末~19世紀。271は肥前染付の端反り碗で外面によるけ縞文、内面に格子文、見込みは一重圓線と草文が描かれる。1820~1860年代。272は肥前染付の端反り碗の口縁部である。外面に虫籠文、内面に格子文が施される。1820~1860年代。273は肥前染付碗の口縁部片で、外面に唐草文が描かれる。19世紀初頭。274は肥前染付皿の口縁部片である。内面口唇部下は溝状に釉が剥がれ、縦網目文が施される。19世紀前半。275は肥前青磁染付の蓋で、朝顔形蓋付碗に伴うものである。外面は青磁、内面は四方禪文と見込みに二重圓線と五弁花文のコンニャク印判が描かれる。18世紀後半~19世紀初頭。276は肥前染付の袋物(瓶)である。外面に花卉文が施される。18世紀代。277は肥前系染付の仏版器の高台部である。高台内は施釉されているが、端部は露胎で砂が付着している。19世紀代。278は15~16世紀の備前窯の口縁部である。玉縁状を呈し、内外面ともにぶい赤褐色釉が施されている。279は陶器碗で18世紀頃のものか。内外面に灰白釉が施され、体部に回転ナデによる3条の沈線が見られる。280は関西系の陶器碗か。内外面にぶい黄褐釉が施されている。18世紀代。281は陶器碗の口縁部である。内外面に白化粧土を施している。18世紀代で福岡産か。282は肥前系京焼風陶器碗の底部である。18世紀前半。283は在地産の播鉢である。外面にオリブ黒釉の軸垂れが見られ、内面は縦方向に粗い櫛目が施される。18世紀。284は在地か明石産の近世播鉢の底部付近である。外面は無釉でヨコナデ、内面は縦方向の櫛目が施される。285は片口で、内外面にオリブ黒釉が施されている。18世紀代で薩摩産か。286は在地産の陶器袋物底部である。外面に釉を施しているが、うまく発色せず、透明感を持たない。18世紀末~19世紀。287は火入れで、口縁部は内側に折り曲げて断面三角形に作り上げている。17世紀後半~18世紀前半で肥前産か。288は数珠玉である。緑色のガラス玉で、紡錘状を呈する。

図49に石塔、小刀、錢貨を掲載している。

289は五輪塔の火輪である。約4分の1の残存であるが、復元すると一辺が約30cm程のものになると思われる。290は五輪塔の水輪である。表面はノミ状工具による加工痕が見られる。納骨孔を持たない

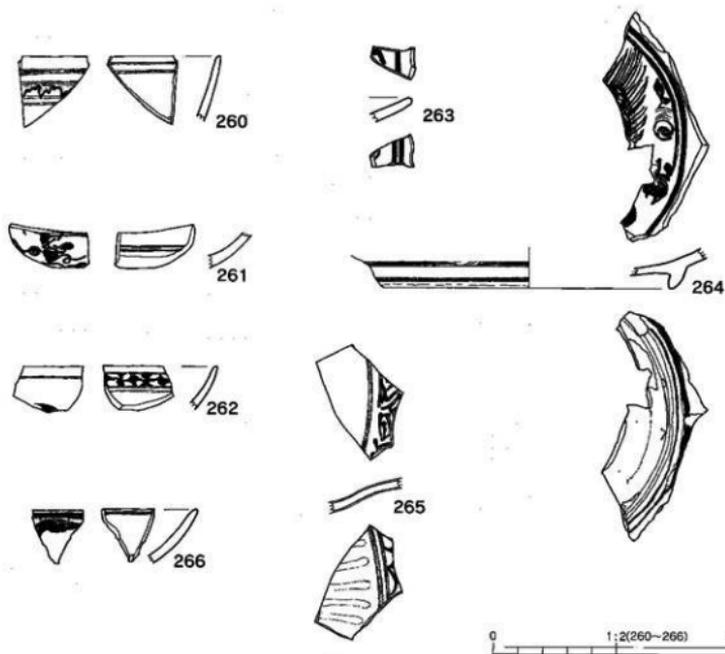
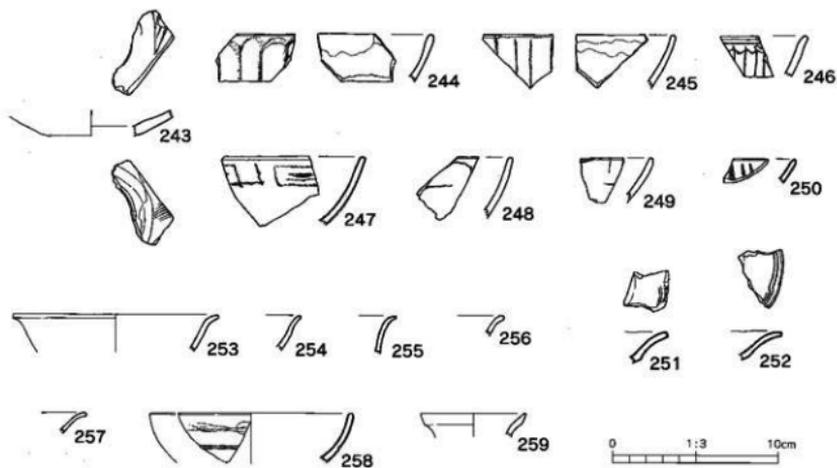


图47 出土遺物実測圖(2)

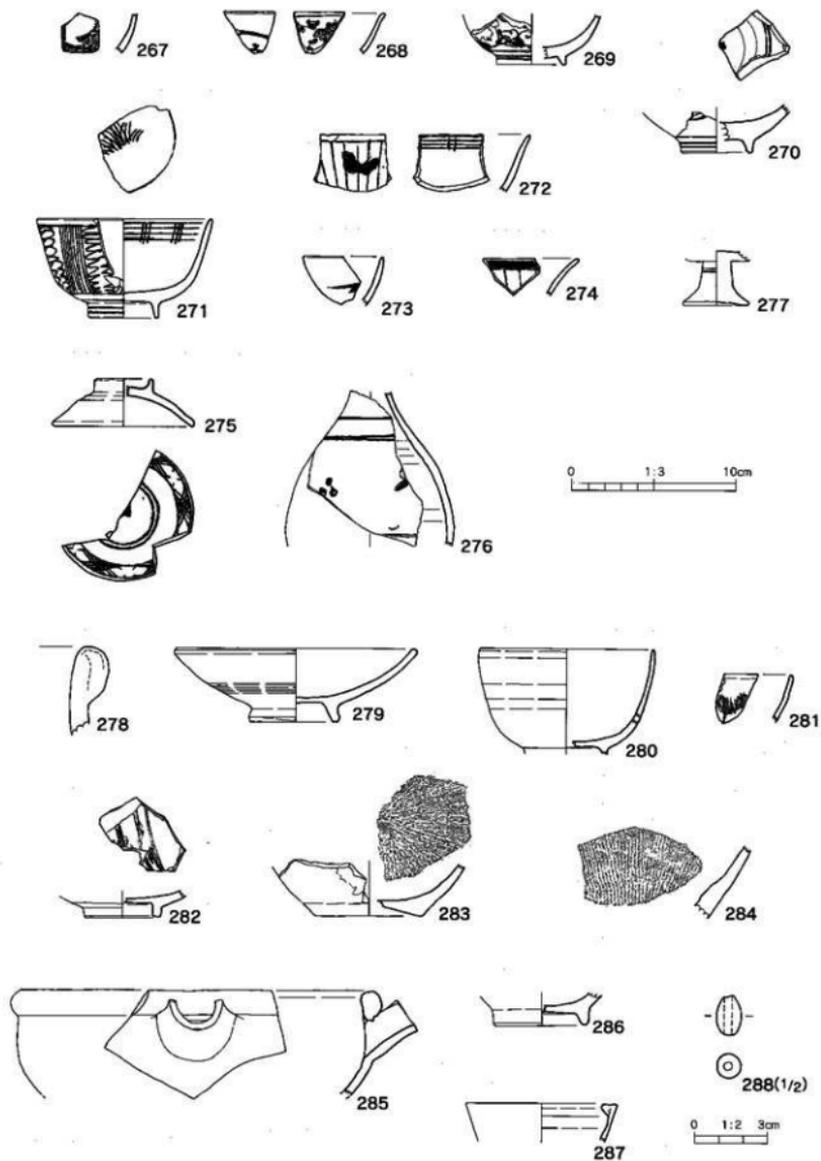


图48 出土遺物実測図(3)

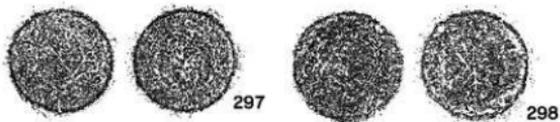
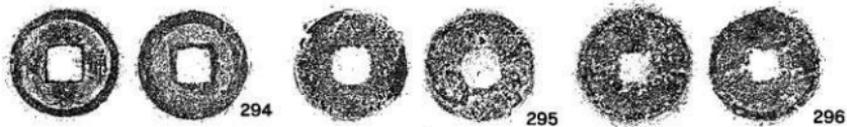
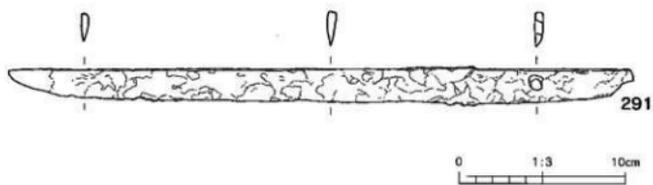
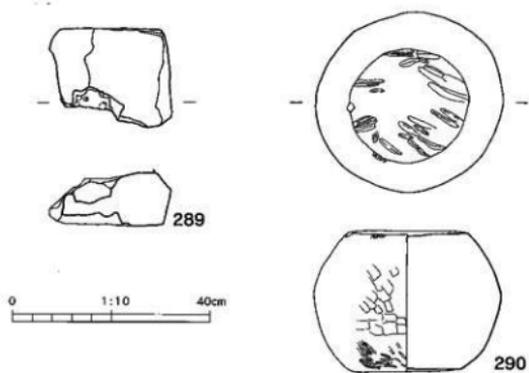


図49 出土遺物実測図(4)及び銭貨拓影

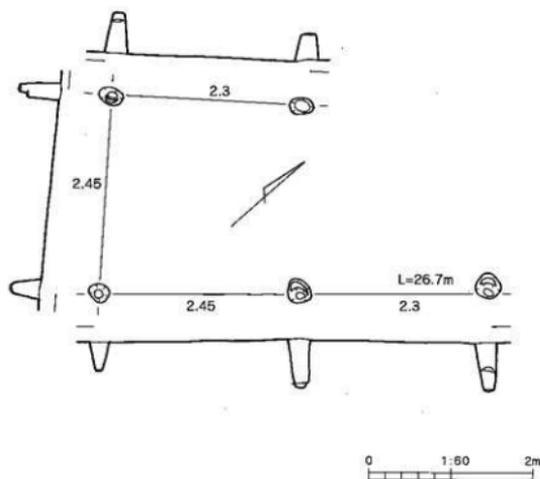


図50 SB10実測図

ため供養塔と考えられる。

291は小刀である。刀身長は28.3cm、幅2.0cmで両刃を呈する。柄は長さ9.7cm、幅2.1cmで中央部に円形の見釘穴が見られる。根部は直角を呈する。時期については定かではないが、單刀の可能性はある。

292～298は銭貨である。292～294は「寛永通寶」である。295と296は無文銭である。295は方形の銭孔がやや丸く風化している。297は明治6年から21年の間に鑄造された「半銭」である。本来なら裏面に竜が見られるが、風化が著しく確認できない。298は大正10年鑄造の「一銭」である。

(4) 時期不明の遺構と遺物

時期を確定できなかった遺構はA区のSB10とSC2、C区のSC4～7である。

掘立柱建物跡 (SB)

SB10 (図50)

A区中央南寄りに位置する。構造は桁行2間、梁行1間の南北棟としているが、北側梁行列の並びが1基検出できなかった。規模は桁行4.75mで柱間は2.3～2.45m、梁行2.45mを測る。主軸はN-41°-Eを示す。柱穴は径25～30cmの円形や長軸が30m程の楕円形を呈し、深さは35～60cmを測る。A区基本層序第Ⅲ層(ややぶい褐色土)面で検出を行い、埋土はSC2と同じく褐色土である。

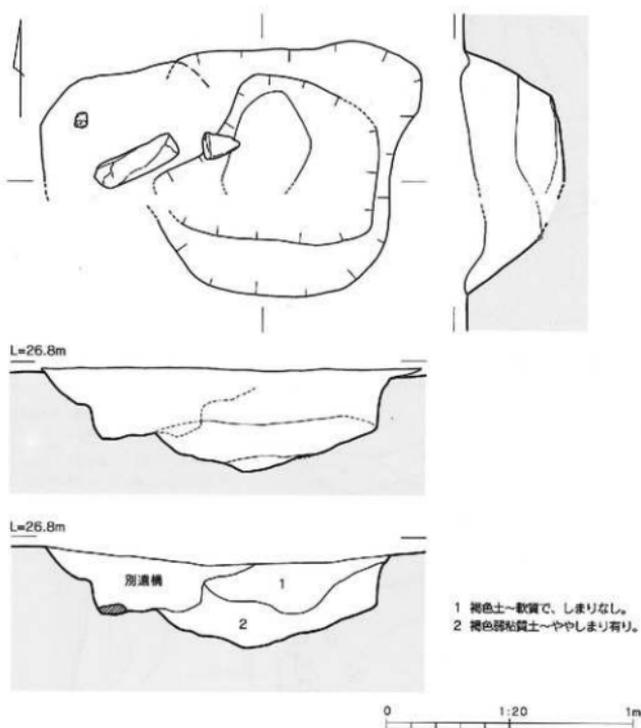


図51 SC2実測図及び土層断面実測図

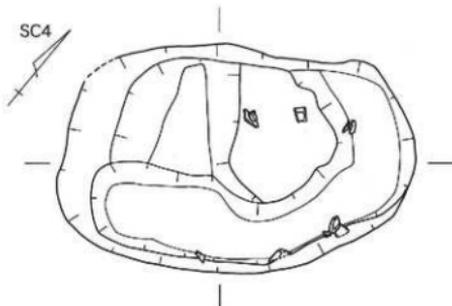
土坑 (SC)

SC2 (図51)

A区中央北西側に位置する。A区基本層序第Ⅲ層 (ややにぶい褐色土) 面で検出し、埋土は軟質の褐色土である。平面プランは径が1.0m程の不定円形で、西側は一部別遺構に切られていた。別遺構には長さ35cm、幅10cm程の砂岩礫の他2点の礫が出土している。SC2の深さは約0.4mで、遺物は出土していない。

SC4 (図52)

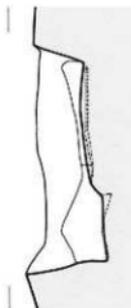
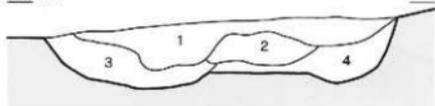
SC4～7はC区西側の平坦面に集中して位置し、C区基本層序第Ⅲb層面で検出した。長軸1.44m、短軸0.94mの楕円形を呈し、深さ約0.35mを測る。底面はフラットではなく、幾つかの段差を有する。埋土中からは床面から浮いた状態で角礫や縄文土器小片がわずかに出土している。



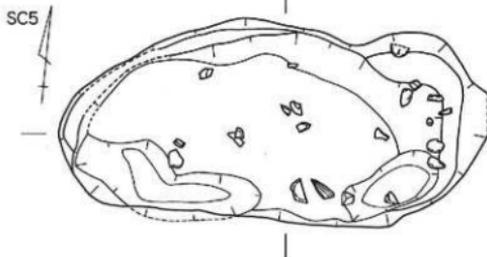
L=28.2m



L=28.2m



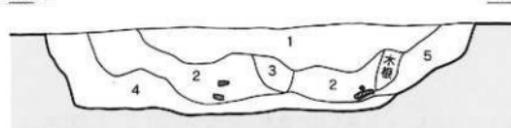
- 1 暗褐色粘質土～やや硬質。小林軽石粒を若干含む。
- 2 ややにぶい暗褐色粘質土～しまり有り。小林軽石粒若干含む。割片含む。
- 3 黒オリーブ色土～しまり有り。褐色土が混入する。
- 4 暗褐色土～しまり有り。小林軽石粒、土割片を含む。



L=28.6m



L=28.6m



- 1 暗褐色粘質土～やや硬質。小林軽石粒を若干含む。
- 2 ややにぶい暗褐色粘質土～しまり有り。小林軽石粒若干含む。割片含む。
- 3 ややにぶい暗褐色粘質土～ややしまり有り。小林軽石粒若干含む。割片含む。
- 4 暗褐色粘質土一段質。褐色土を含む。炭化物を含む。
- 5 暗褐色粘質土～やや硬質。褐色土を含む。

0 1:20 1m

図52 SC4・5実測図及び土層断面実測図

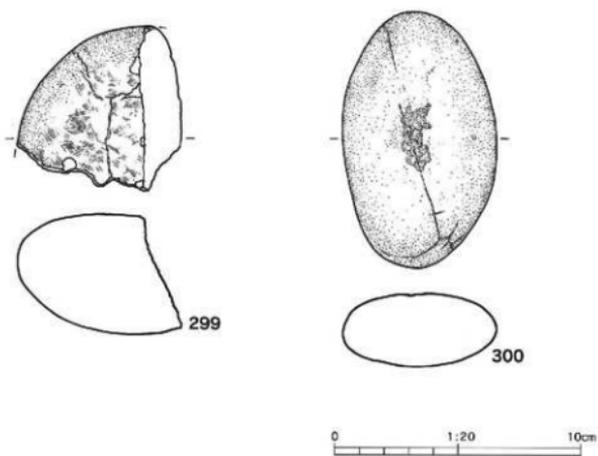
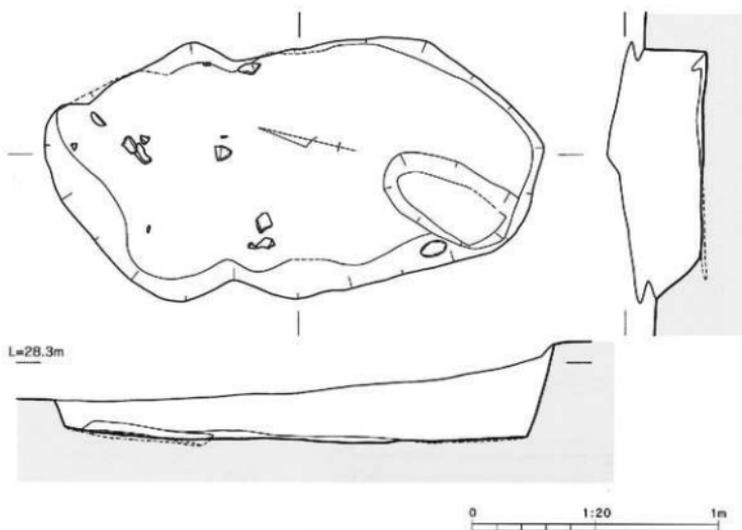


図53 SC 6実測図及び出土遺物実測図

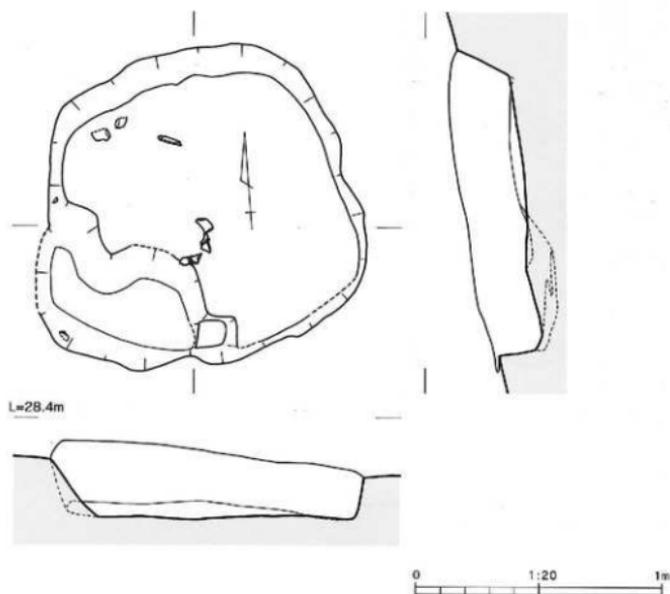


図54 SC 7 実測図

SC 5 (図52)

長軸1.75m、短軸0.8mの楕円形を呈し、深さ約0.4mを測る。埋土中からは角礫や円礫が床面からやや浮いた状態で出土している。

SC 6 (図53)

長軸2.0m、短軸1.0mの楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。遺構上面と一部埋土中から円礫や角礫が出土している。

遺物は礫石器を2点図示している。299は磨石である。石材は砂岩で、両面とも擦痕が見られる。300は砂岩製の凹石で、扁平な石の両面中央部に敲打痕が見られる。

SC 7 (図54)

径が1.28mの円形プランを呈し、深さ0.32mを測る。遺構上面及び埋土層上部に礫が見られ、チャートの剥片等が出土している。

表2 柿泊遺跡 縄文土器観察表(1)

| 遺物番号 | 出土地点・層 | 器部 (復元径cm) | 文 様 | 調 整 | 色 調 | | 胎土の特 徴 | 備 考 |
|------|--------------|-----------------------|------------------------------|------------------------------------|------------------|-----------------|--|-------|
| | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 1 | C区 4G II層 | 深鉢 口縁 | 口唇部外面に刻み | 外面は横方向の条痕、ナテ 内面はナテ | にぶい 橙 | にぶい 橙 | 2mm以下の灰白・褐・光沢の粒 | |
| 2 | C区 III層上 | 深鉢 口縁 | 口唇部外面に押し刻み | 外面は横方向の貝殻条痕、風化気味 内面はナテ、風化気味 | にぶい 黄褐 | 橙 | 1.5mm以下の無色透明・半透明光沢の粒 2mm以下の黒・黒色光沢の粒 4mm以下の灰白の粒 | |
| 3 | C区 III層上 | 深鉢 口縁～ 胴部 | 口唇部外面に押し刻み | 外面は斜方向の貝殻条痕 内面はナテ、風化気味 | にぶい 黄褐 | 橙 | 1.5mm以下の無色透明光沢・半透明光沢・白色不透明光沢の粒 2mm以下の黒の粒 4mm以下の灰白の粒 | |
| 4 | C区 5G II層 | 深鉢 口縁 | 口縁端部に2段の押し刻み | 外面は横方向の貝殻条痕 内面はナテ、風化著しい | にぶい 黄褐 | にぶい 黄橙 | 2mm以下の黒・灰白・褐・光沢の粒 | |
| 5 | C区 4G II層 | 深鉢 口縁～ 胴部 | | 外面は横方向の貝殻条痕、風化著しい 口唇部と内面はナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の白・黒の粒 1.5mm以下の赤褐・黒色光沢の粒 | 外面にスス |
| 6 | C区 III層上 | 深鉢 胴部～ 底部(13.7) | | 外面は縦・斜方向の貝殻条痕、風化気味 内面は縦方向のケズリ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の無色透明・黒・黒色光沢の粒 1.5mm以下の乳白・無色透明光沢の粒 | |
| 7 | D区 斜面 | 深鉢 胴部 | 外面に縦方向の連続貝殻突縁 | 外面は風化気味 内面は縦方向のケズリ | 褐 | 暗赤褐 | 1mm以下の黒・黄・透明光沢の粒 | |
| 8 | A区 II層下 | 深鉢 口縁 | 外面は横方向の2条の貼付突起に貝殻磨練列点文を施す | 口唇部はヨコナテ 外面はナテ 内面は横・斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄橙 灰黄褐 | にぶい 黄橙 黄灰 | 2mm以下の黄橙の粒 | |
| 9 | A区 II層上 | 深鉢 口縁 | 外面は横方向に数条の沈線後斜方向の2条の沈線と刺突列点文 | 口唇部は風化 外面はナテ 内面は斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄灰 灰黄褐 | にぶい 橙 灰黄褐 | 2mm以下の灰・褐・にぶい黄橙の粒 | |
| 10 | A区 II層上 | 深鉢 口辺部 | 外面は斜方向に9条の沈線 | 外面はナテ 内面は丁寧なナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 橙 | 微細な乳白・黒・黒色光沢の粒 1mm以下の無色透明光沢の粒 | |
| 11 | A区 III層 | 深鉢 口辺部 | 外面は横方向の4条平行沈線文と列点文 | 内外面ともナテ 内面は風化気味 | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の黒・灰白・透明光沢の粒 | |
| 12 | A区 II層 | 深鉢 胴部 | 外面は横方向の平行沈線文と列点文、摺糸文 | 外面は横方向のナテ 内面はナテ、風化気味 | にぶい 赤褐 | にぶい 黄橙 | 2mm以下の黒・にぶい黄橙の粒 3mm以下の灰白・透明光沢の粒 | |
| 13 | A区 II層 | 深鉢 胴部 | 外面は横方向の平行沈線文と列点文、摺糸文 | 外面はナテ 内面は丁寧なナテ | 明赤褐 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の黒・黒色光沢の粒 2mm以下の乳白・無色透明光沢の粒 3mm以下の白色不透明光沢の粒 | |
| 14 | A区 III層上 | 深鉢 胴部 | 外面は摺糸文 | 内外面ともナテ | にぶい 黄褐 灰黄褐 | にぶい 黄褐 | 1mm以下のにぶい黄橙の粒 3mm以下の灰白・黒の粒 | |
| 15 | A区 III層 | 深鉢 胴部 | 外面は摺糸文 | 内面はナテ、風化気味 | にぶい 褐 | にぶい 黄褐 | 1mm以下の透明光沢の粒 2mm以下の黒・灰の粒 | |
| 16 | C区 4G II層 | 深鉢 胴部 | 外面は摺糸文 | 内面はナテ | 橙 | 明赤褐 | 1.5mm以下の黒・灰白・光沢の粒 | |
| 17 | A区 II層上 | 深鉢 胴部 | 外面は沈線文間に摺糸文 | 外面は丁寧なナテ 内面は斜方向のナテ | にぶい 橙 | にぶい 黄橙 | 1.5mm以下の黒の粒 2mm以下の無色透明光沢の粒 2.5mm以下の白色不透明光沢の粒 3.5mm以下の乳白の粒 | |
| 18 | A区 II層 | 深鉢 胴部 | 外面は沈線文間に摺糸文 | 外面は横方向の丁寧なナテ 内面は横方向のナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 褐 | 1mm以下の半透明の粒 2mm以下の黒の粒 3.5mm以下の乳白の粒 | |
| 19 | C区 5G II層 | 深鉢 口縁 | 外面に逆「S」字状の凹線文 | 口唇部・外面はナテ 内面は丁寧なナテ | 橙 | 橙 | 微細な無色透明光沢の粒 1mm以下の乳白・黒・黒色・白色不透明光沢の粒 1.5mm以下の赤褐の粒 4mm以下の黄褐の粒 | |

表2 柿迫遺跡 縄文土器観察表(2)

| 遺物番号 | 出土地点・層 | 器部 (腹元径cm) | 文様 | 調整 | 色調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|------|---------------|-----------------|--------------|---|-----------------|----------------------|---|-------------------|
| | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 20 | C区 4G II層 | 深鉢 胴部 | 外面は沈線による幾何学文 | 外面はナテ 内面はナテ、横方向の 貝殻条痕 | にぶい 黄褐 | にぶい 黄褐 | 1mm以下の乳白・赤褐・無色 透明光沢の粒 1.5mm以下の白色半透明の粒 | 外面にス ス |
| 21 | C区 5KG II層 | 深鉢 口縁 | | 口唇部はココナテ 外面は斜方向の条痕 内面は工具による横方向のナテ | にぶい 褐 | 橙 | 微細な乳白・無色透明光沢の粒 1mm以下の黒の粒 4.5mm以下の赤褐の粒 | |
| 22 | C区 SZ1上 | 深鉢 口縁 | | 口唇部はナテ 外面は横・斜方向の粗いナテ 内面は横・斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の黒・無色透明光沢の粒 1.5mm以下の乳白の粒 2mm以下の角柱状の黒色光沢粒 2.5mm以下の赤褐の粒 | 口唇部・ 外面に黒 変 |
| 23 | C区 III層上 | 深鉢 胴部 | | 外面は横方向の貝殻条痕の後 ナテ、斜方向のナテ 内面は横・斜方向の貝殻条痕 | 灰黄 にぶい 黄橙 | 灰灰 | 2.5mm以下の褐・灰白の粒 | |
| 24 | B区 2BG | 深鉢 口縁 | | 外面は横方向のナテと 条痕 口唇部と内面はナテ | 浅黄 | 浅黄 | 1mm以下の乳白・半透明・透 明の粒 3mmの灰黄の粒 | 外面にス ス |
| 25 | C区 5KG II層 | 深鉢 口縁 | | 外面はナテ、横・斜方 向の貝殻条痕の後ナテ 内面は横方向のナテ | 橙 灰褐 | にぶい 褐 | 1mm以下の灰白・にぶい黄橙 の粒 3mm以下の黒の粒 | 外面にス ス |
| 26 | B区 | 深鉢 口縁 | | 口唇部はナテ 外面は横・斜方向の貝殻条痕 内面はナテ、斜方向の貝殻条痕 の後ナテ | 灰黄 | 灰灰 | 微細な乳白の粒 1mm以下の黒の粒 1mmの灰黄・にぶい黄橙の粒 | |
| 27 | C区 5IG II層 | 深鉢 口縁 | | 外面は横方向のナテ、 斜方向のナテ 口唇部と内面はナテ | にぶい 黄橙 灰黄 | にぶい 橙 | 2mm以下の褐・灰白・灰黄の 粒 | |
| 28 | C区 III層上 | 鉢 口縁 | | 口唇部と外面はナテ 外面は黒化著しい 内面は横方向の条痕の後ナテ | にぶい 黄 暗灰黄 | にぶい 黄 にぶい 黄 | 1.5mm以下の灰白・浅黄の粒 | |
| 29 | C区 5IG II層 | 鉢 口縁 | | 口唇部はナテ 内外面は横方向の粗い ナテ | にぶい 黄 | にぶい 黄橙 | 1.5mm以下の褐・灰白・半透明 光沢の粒 | 外面にス ス |
| 30 | B区 3BG | 鉢 口縁 | | 口唇部はナテ 外面は斜方向のナテ 内面は横方向のナテ、条痕 横・斜方向の貝殻条痕の後ナテ | 橙 | 橙 | 微細な黒・乳白の粒 1mm以下の無色透明光沢粒 1.5mm以下の無色半透明の粒 | |
| 31 | B区 2BG | 鉢 口縁 | | 口唇部と外面は横方向のナテ 内面は横方向のナテ 黒化著しい | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 微細な黒の粒 1mm以下の浅黄・白色不透 明・無色透明光沢の粒 | |
| 32 | C区 SZ1上 | 深鉢 胴部 | | 外面は横方向のナテ 内面は横方向の貝殻条痕 | 灰黄 黄灰 | 暗灰黄 | 1mm以下の灰黄・灰白・無色 光沢の粒 | 外面にス ス |
| 33 | C区 4KG II層 | 浅鉢 口縁～ 胴部 | 口縁部内面に凹線 | 口唇部と外面は横方向のミガキ 内面は横方向のミガキ、一部黒 化 | にぶい 黄橙 黄灰 | にぶい 黄橙 黄灰 | 1mm以下の無色透明光沢粒 | |
| 34 | C区 6KG II層 | 浅鉢 口縁～ 胴部 | 口縁部内外面に凹線 | 口唇部は横方向のミガキ 外面は横方向のミガキ、黒化著 しい 内面は横方向のナテか、黒化著 しい | にぶい 橙 | にぶい 橙 | 微細な無色透明光沢粒 1mm以下の黒色光沢粒 1.5mm以下の黒の粒 2mm以下の白色半透明の粒 3mm以下の赤褐の粒 | |
| 35 | C区 III層上 | 浅鉢 口縁 | | 口唇部と内外面とも横 方向のミガキ | 灰黄 黄灰 | 灰黄 黄灰 | 微細な灰白の粒 | |
| 36 | C区 6IG II層 | 浅鉢 胴部 | | 内外面とも横方向のミ ガキ | にぶい 黄橙 | 浅黄 | 微細な黒褐・灰白の粒 1mm以下の無色透明光沢粒 | 同一器体 |
| 37 | C区 6IG II層 | 浅鉢 胴部 | | 内外面とも横方向のミ ガキ 外面は黒化気味 | にぶい 黄橙 | にぶい 黄 | 微細な黒褐の粒 1mm以下の灰白・無色透明 光沢の粒 | 外面に出 発 |
| 38 | C区 4G II層 | 浅鉢 胴部 | | 内外面とも横方向のミ ガキ | 暗灰黄 褐灰 | 黄灰 灰黄 | 微細な黒・灰黄・灰白の粒 | |

表2 柿迫遺跡 縄文土器観察表(3)

| 遺物 番号 | 出土 地点 ・層 | 器部 (復元径cm) | 文 様 | 調 整 | 色 調 | | 胎土の特徴 | 備 考 |
|----------|---------------------------|-----------------|-------------------------|--|----------------|-----------|---|--------|
| | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 39 | C区 4JG I・II層 | 浅鉢 胴部～ 底部 | | 外内面は横方向のミガキ | 浅黄 | にぶい 黄 | 微細な黒色光沢・半透明光沢の粒 | |
| 40 | C区 3IG II層 | 深鉢 口縁 | 口唇部にヒレ状突起 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部はナテ 外内面は横方向のナテ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 1mm以下の無色半透明・乳白の粒 2mm以下の黒色・黒褐の粒 | 同一個体 |
| 41 | C区 4KG II層 | 深鉢 胴部 | | 外内面は横方向のナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 0.5mmの無色透明光沢の粒 1mm以下の黒・茶褐の粒 1.5mm以下の赤褐・白色半透明の粒 1.5mmの黒色光沢の粒 微細な乳白の粒 | |
| 42 | C区 3IG II層 | 深鉢 口縁～ 胴部 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部はナテ 外内面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | 浅黄 | 灰黄 | 1mm以下の無色透明光沢粒 1.5mm以下の黒・黒褐の粒 2mm以下の白色不透明・浅黄の粒 | |
| 43 | C区 SZ1上 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 外面は横方向の粗いナテ 内面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | 浅黄 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の無色透明光沢粒 1.5mm以下の黒・黒褐の粒 2mm以下の白色不透明粒 微細な至密粒 | |
| 44 | C区 5FG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部と内面はナテ 外面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | にぶい 黄橙 | 淡黄 | 1mm以下の黒・茶褐・無色透明光沢・黒色光沢の粒 1.5mm以下の乳白粒 | 外面にスス |
| 45 | C区 III層上 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 外面は横方向のナテ、斜方向の粗いナテ 内面は横方向の粗いナテ | 黄灰 | 黄灰 | 1mm以下の黒・茶褐・黒色光沢・無色透明光沢の粒 1.5mm以下の乳白粒 | 外面にスス |
| 46 | C区 5KG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部と外面は横方向のナテ 内面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の黒・無色透明光沢の粒 1.5mmの白色不透明粒 2mm以下の赤褐・黒色光沢の粒 | |
| 47 | C区 4KG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部は横方向のナテ 外内面は横・斜方向の貝殻条痕の後ナテ | にぶい 黄橙 | 黄灰 | 1mm以下の白色半透明・浅黄褐色の粒 2mm以下のにぶい橙粒 | |
| 48 | C区 5KG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部はナテ 外面は横方向の粗いナテ 内面は横方向のナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の透明光沢粒 2mm以下の灰白・褐の粒 3mmの灰黄・黒の粒 | |
| 49 | C区 5JG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部はナテ 外面は横方向のナテ 内面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 2mm以下の黒・褐・灰白の粒 | |
| 50 | C区 5IG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に貼付突起 | 口唇部はナテ 外面は粗いナテ 内面は横・斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1.5mm以下の黒・褐・灰白の粒 | |
| 51 | C区 5IG II層 | 深鉢 胴部 | | 外面は斜方向の貝殻条痕 内面は横・斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | | 同一個体? |
| 52 | C区 4KG II層 | 深鉢 口縁 | 口縁部外面に突起状突起 | 口唇部はナテ 外内面は横方向の貝殻条痕の後ナテ | 浅黄橙 | 灰黄 | 微細な浅黄粒 1mm以下の乳白・白色半透明の粒 1.5mm以下の明黄橙粒 | |
| 53 | C区 SZ1上 | 深鉢 口縁 | 外面に孔列文(貫通) | 口唇部と外内面ともナテ | 浅黄 | 浅黄 | 1mm以下の透明・半透明・灰黄の粒 | |
| 54 | C区 3IG II層 III層上 | 深鉢 口縁 | 外面に孔列文(貫通) | 口唇部と外内面ともナテ | 褐灰 | 灰黄 | 2mm以下の褐・灰の粒 | |
| 55 | C区 SZ上 | 鉢 口縁 | 外面に孔列文(貫通) | 口唇部と外内面ともナテ | 浅黄 | 灰黄 | 1mm以下の乳白・透明・浅黄橙の粒 微細な灰黄粒 | |
| 56 | C区 III層上 | 深鉢 口縁 | 外面に孔列文(未貫通) | 口唇部はナテ 外内面は条痕 | 暗灰 | にぶい 橙 | 1mm以下の乳白・無色透明光沢の粒 1.5mm以下の黒・黒色光沢の粒 2mm以下の白色半透明・不透明の粒 3mm以下の赤褐色粒 | 外面にスス |
| 57 | C区 4JG II層 | 深鉢 口縁 | 外面に孔列文(未貫通) | 口唇部と内面は条痕 外面は条痕の後ナテ | にぶい 橙 灰褐 | 橙 | 1mm以下の透明光沢粒 2mm以下の灰黄・黒・褐の粒 3.5mm以下の灰黄粒 | 外面にスス |

表2 柿迫遺跡 縄文土器観察表(4)

| 遺物番号 | 出土地点・層 | 器部 (腹元径cm) | 文 | 様 | 調 | 色調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|------|---------------|----------------|---|---|-----------------------------------|-----------|-----------|--|-----------|
| | | | | | | 外面 | 内面 | | |
| 58 | B区 3BG | 深鉢 底部(7.4) | | | 外面はナテ、指頭痕 内面はナテ | にぶい 黄 | 灰黄 | 1mm以下の乳白・褐・半透明の粒 2mmの灰黄粒 | |
| 59 | C区 4KG II層 | 深鉢 底部 | | | 外面は横方向の貝殻条痕 のナテ 内面は斜方向の貝殻条痕 | にぶい 黄橙 | 灰黄 | 1.5mm以下の透明光沢粒 2mm以下のにぶい黄橙・黒・ 褐の粒 | |
| 60 | C区 6G II層 | 深鉢 底部(8.5) | | | 外面は横方向のナテ 内面はナテ | にぶい 黄橙 | 灰 | 1mm以下の無色透明光沢粒 2mm以下の黄橙粒 3mm以下の白色不透明・黒・茶褐の粒 | |
| 61 | C区 4G III層 | 深鉢 底部 | | | 外面はナテ、指頭痕 内面はナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の無色透明光沢粒 2mm以下の白色不透明の粒 5mm以下の黒粒 | |
| 62 | C区 4G II層 | 深鉢 底部(8.8) | | | 外内面はナテ | にぶい 黄橙 | 灰 | 1mm以下の無色・半透明の光沢粒 1.5mm以下の乳白・黒色光沢の粒 2mm以下の白色不透明粒 5mm以下の赤褐粒 | 内面に黒 変 |
| 63 | C区 III層上 | 深鉢 底部(10.2) | | | 外内面はナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 微細な黒粒 1mm以下の白粒 2mm以下の明褐粒 | |
| 64 | C区 4G II層 | 深鉢 底部(8.6) | | | 外内面はナテ | にぶい 黄橙 | にぶい 黄橙 | 1mm以下の乳白粒 1mmの灰黄・半透明光沢・黒 色光沢の粒 | |
| 65 | C区 III層上 | 深鉢 底部(8.7) | | | 外面はナテ 内面は丁寧なナテ | にぶい 黄橙 | 灰 | 1mm以下の乳白・黒・無色透明光沢の粒 2mm以下の黄橙・茶褐の粒 3.5mm以下の茶褐粒 | 外面にス ス |
| 66 | C区 SZ I上 | 深鉢 底部(9.05) | | | 外面はナテ 内面は工具による横方 向のナテ、粘土塊あり | にぶい 黄橙 | 淡黄 | 1mm以下の半透明粒 2mm以下の黒・褐の粒 | |
| 67 | C区 5G III層 | 深鉢 底部(9.75) | | | 外面はナテ、指頭痕 内面はナテ | にぶい 黄橙 | 灰黄 | 5mm以下の灰白・褐・灰黄の 粒 | |

表3 柿迫遺跡 遺物観察表(1)

| 遺物 番号 | 種別 | 器 部 位 | 出 土 地 点 | 法 量 (cm) | | | 手 法・調 整・文 様 ほか | | 色 調 | | 胎 土 の 特 徴 | 備考 |
|----------|-----|-------------|---------------------|----------|--------|-----|-----------------------|-------------------|-----------------|------------|--|---------------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 面 | 内 面 | 外 面 | 内 面 | | |
| 143 | 土師器 | 甕口縁 | C区 SKG Ⅱ層 Ⅲ層上 | (20.4) | | | 横・斜ナテ、スス付置 | 丁字女横・斜ナテ 黒塗 | 僅 | にぶい 黄褐色 | 1mm以下の乳白粒 3mm以下の赤褐色 4mm以下の黒褐色 | |
| 144 | 土師器 | 甕胴部 | C区 SKG Ⅱ層 | | | | 斜ナテ | 横・斜ナテ | にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 1mm以下の乳白粒 3mm以下の赤褐色 4mm以下の黒褐色 | 同一 個体 |
| 145 | 土師器 | 甕底部分近 | C区 SKG Ⅱ層 | | | | 斜ナテ | 斜ナテ | にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 1mm以下の乳白粒 4mm以下の赤褐・黒色の粒 | |
| 146 | 土師器 | 甕口縁 | A区 Ⅱ層 | | | | ヨコナテ | ナテ | にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 1.5mm以下の黒色・無色透明の光沢粒 2mm以下の黒・赤褐色の粒 | |
| 147 | 土師器 | 甕口縁 | C区 SKG Ⅱ層 | | | | ナテ、風化著しい | ナテ 風化著しい | 浅黄褐色 | 浅黄褐色 | 1mm以下の黒色透明光沢粒 1.5mm以下の黒粒 | |
| 148 | 土師器 | 甕底部 | B区 P-4 | 5.4 | | | ナテ 粘土の返り | ナテ | にぶい 黄褐色 | 灰 | 0.5mm以下の無色透明光沢粒 2mm以下の赤褐色 2mm以下の黒色透明光沢粒 4mm以下の赤褐色 5mm以下の黒粒 | |
| 149 | 土師器 | 甕胴部~底部 | B区 3CG造成 | | | | ナテ | 工具ナテ 黒密 指痕直 | 明黄褐色 | 浅黄 | 2mm以下の無色透明光沢粒 4mm以下の赤褐色 5mm以下の黒粒 | |
| 150 | 土師器 | 甕胴部 | B区 3BG造成 | | | | ナテ | ナテ | 僅 | 僅 | 2mm以下の黒色・無色透明の光沢粒 2.5mm以下の赤褐・赤褐色の粒 | |
| 151 | 土師器 | 甕底部 | B区 SE3 | | | | ナテ | ナテ | にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 2mm以下の白色透明粒 4mm以下の赤褐・黒褐色の粒 | |
| 152 | 土師器 | 甕外外部 | B区 3CG造成 | (15.1) | | | ナテ、風化著しい | ナテ、風化著しい | 黄褐色 | 僅 | 2mm以下の白粒 | |
| 153 | 土師器 | 甕外外部 | B区 造成 | | | | ナテ、粘土の雜ざ目 | ナテ ヨコナテ | にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 1mm以下の黒・金色の光沢粒 3mm以下の黒・灰白・黄灰・褐の粒 | |
| 154 | 土師器 | 甕付合外部 | A区 2層 | | | | 縦工具ナテ後ナテ | 横工具ナテ ナテ | にぶい 黄褐色 | 灰黄褐色 | 2mm以下の黒色光沢粒 2mm以下の黒・褐の粒 | |
| 155 | 土師器 | 甕付合外部~底部 | A区 遺状遺構 | (7.4) | | | ヨコナテ ナテ | ヨコナテ | 灰白 | 灰白 | 1mm以下の灰赤・乳白・黒の粒 | |
| 156 | 青磁 | 甕口縁~底部 | D区 遺状遺構 | (13.2) | (4.35) | 6.1 | 施釉、器付・高台内露胎 刷短途弁文 | 施釉 | 灰 | 灰 | 精良 灰オリーブ | 15~ 16C |
| 157 | 青磁 | 甕口縁 | D区 遺状遺構 | | | | 施釉 刷短途弁文 | 施釉 | 灰オリーブ | オリーブ | 精良 灰黄 | 15~ 16C |
| 158 | 陶器 | 甕口縁 | D区 遺状遺構 | (29.8) | | | 施釉 | 施釉 | 灰赤 | 灰赤 | 精良 褐灰 | 17C |
| 159 | 陶器 | 甕胴部~底部 | D区 遺状遺構 | (40.3) | | | ハナケ状工具による縦 方向の粗いナテ | 粗いナテ | 暗赤 赤 | にぶい 黄褐色 | 5mm以下の黒粒 7mmの灰粒 | 輪筋 15~ 16C |
| 160 | 陶器 | 甕胴部 | C区 Ⅲ層 Ⅱ層 | | | | 施釉 | 施釉 回転ナテ | 暗赤 赤 | にぶい 黄褐色 | 精良 にぶい褐 | |
| 161 | 陶器 | 甕底部 | D区 遺状遺構 | (12.2) | | | ナテ | 施釉、砂目付 回転ナテ | 暗赤 赤 | にぶい 黄褐色 | 精良 にぶい褐 | 同一 個体 |
| 162 | 陶器 | 甕付合外部 | B区 | | | | 施釉、風化著しい ナテ | 施釉 回転ナテ | 明赤褐色 | にぶい 黄褐色 | 精良 灰白粒 | 中田文は 東洋 7ア |
| 163 | 陶器 | 甕胴部 | D区 遺状遺構 | | | | 回転ナテ | 僅目 | にぶい 赤褐色 | にぶい 赤褐色 | 1mm以下の乳白・黒の粒 1.5mm以下の灰白粒 | 存地 文は 刷短 途 |
| 164 | 染付 | 甕胴部~底部 | D区 遺状遺構 | 5.6 | | | 施釉 長付露胎 | 施釉 | 明オリーブ | 灰白 | 精良 灰白 | 刷短途 8~10C |
| 165 | 染付 | 甕口縁 | D区 遺状遺構 | | | | 輪花口縁 唐文 | 竹文 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 明緑灰 | 刷短途 8~10C |
| 166 | 青磁 | 甕口縁 | D区 斜面 | | | | 施釉 常文 | 施釉 常文 | 明オリーブ | 灰白 | 精良 灰白 | 15~ 16C |
| 167 | 青磁 | 甕胴部~底部 | D区 斜面 | 6.0 | | | 施釉 長付露胎 へら切取り | 施釉 回転ナテ | オリーブ | 灰白 | 精良 灰白 | 15~ 16C |
| 168 | 土師器 | 甕胴部~底部 | D区 斜面 | (7.85) | | | 横方向のナテ、花印 | 横方向のナテ | 僅 にぶい 黄褐色 | にぶい 黄褐色 | 1mmの黒粒 | |
| 169 | 陶器 | 甕口縁 | D区 平埴① | (9.4) | | | 施釉 | 施釉 | 黒 | 暗赤褐色 | 精良 褐灰 | |
| 170 | 青磁 | 甕胴部~底部 | D区 平埴① | | | | 施釉 | 露胎 | 明オリーブ | 明オリーブ | 精良 灰白 | 刷短途 10C~ 15C |
| 171 | 染付 | 甕口縁~底部 | D区 | | | | 施釉 | 施釉 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白 | 刷短途 10C~ 15C |
| 172 | 染付 | 小甕口縁~底部 | D区 | | | | 全面に黄須 | 施釉 | コバルトブルー | 灰白 | 精良 灰白 | 刷短途 18C~ 19C |

表3 柿泊遺跡 遺物観察表(2)

| 遺物 番号 | 種類 | 器種 部位 | 出土 地点 | 法 器 (cm) | | | 手法・調整・文様ほか | | 色 調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|----------|-----|--------------------|--------------------|----------|--------|-----|------------------------------|----------------------------|------------|------------|---------------------------|------------------------------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 面 | 内 面 | 外面 | 内面 | | |
| 173 | 陶器 | 灰 口縁~胴部 | B区 土壇上 | (33.6) | | | 格子目タタキ 陶胎 | 無垂れ び滑致文伏及び格子目 の当て具痕 | 灰褐 磨粉 | 灰褐 | 精良 黄灰色 | |
| 174 | 陶器 | 灰 口縁~底唇 | B区 土壇上 | (24.2) | | | 格子目タタキ 陶胎 | 無垂れ 格子目当て具痕 | 暗褐 | 灰褐 | 精良 灰白・赤褐色・黄灰色 | |
| 175 | 青磁 | 瓶 胴部 | B区 土壇上 | | | | 陶胎 | 同転ナア、陶胎 | 明オリ 一ツ灰 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前系 18C末 ~19C |
| 179 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P41 | (8.85) | (6.0) | 1.9 | ナア ココナテ後ナア 赤切り、一薄板状工具痕 | ナア、風化気味 | 浅黄緑 | 浅黄緑 | きめ細か 2mm以下の陶粒 | |
| 180 | 白磁 | 皿 口縁~底唇 | B区 P7 | (12.8) | (6.5) | 3.4 | 陶胎 立付露胎 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 備後 15~ 16C |
| 181 | 染付 | 皿 口縁~底唇 | B区 P2 | (9.35) | | | 陶胎 | 陶胎 見込能ノ目輪割ぎ | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 19C後 |
| 182 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P21 | (7.9) | (5.8) | 2.1 | ナア ヘラ切り後ナア | ココナテ | 橙 | 橙 | きめ細か 1mm以下の赤褐粒 | |
| 183 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P33 | (11.8) | (7.8) | 2.6 | ココナテ ココナテ後ナア 赤切り | ココナテ | にぶい 橙 | にぶい 橙 | 1mm以下の赤褐粒 2mm以下の灰白粒 | |
| 184 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P45 | (7.05) | (5.4) | 1.0 | スエテ 横ナア ナア | 風化物付着 1mm以下の赤褐 ナア | にぶい 橙 | にぶい 橙 | 微細な赤色透明光沢粒 1.5mm以下の赤褐粒 | |
| 185 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P45 | (8.7) | (6.4) | 1.7 | ココナテ ヘラ切り後ナア | ココナテ | 橙 | 橙 | 微細な黒粒 1mm以下の赤褐粒 | |
| 186 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P45 | (10.5) | (6.85) | 2.9 | ナア、風化気味 ヘラ切り後ナア | ココナテ、風化気味 | 橙 | 橙 | 微細な赤色透明光沢粒 2mm以下の赤褐粒 | |
| 187 | 染付 | 皿 口縁 | B区 P45 | | | | 陶胎 | 陶胎 | 明オリ 一ツ灰 | 明オリ 一ツ灰 | 精良 淡黄色 | 肥前 19C後 |
| 189 | 染付 | 皿 口縁 | B区 P49 | | | | 陶胎 後花口縁 | 陶胎 陶胎の剥落 | 明緑灰 明緑灰 | 明緑灰 明緑灰 | 精良 灰白色 | 肥前 16~ 17C後 |
| 190 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P8 | (6.0) | (4.1) | 1.3 | ナア | ナア | 橙 | 橙 | きめ細か 微細な陶粒 | |
| 191 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P8 | (7.4) | (5.4) | 2.0 | ココナテ ヘラ切り後ナア | ココナテ | 橙 | 橙 | きめ細か 1mm以下の黒・褐の粒 | |
| 192 | 土師器 | 皿 底唇 | B区 P8 | (5.5) | | | ココナテ ヘラ切り | ナア | 橙 | 橙 | きめ細か 1.5mm以下の陶粒 | |
| 193 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P13 | (3.8) | (2.9) | 1.6 | ナア 赤切り | ナア 黒灰 | 暗灰黄 黄灰 | 黄灰 | 1mmの赤褐粒 3mmの白粒 | |
| 197 | 土師器 | 皿 口縁~底唇 | B区 P35 | (8.7) | (5.4) | 2.2 | ナア ココナテ後ナア 赤切り | ナア | 橙 | 橙 | 2mm以下の赤褐粒 | |
| 198 | 染付 | 皿 口縁~底唇 | B区 P30 | (11.6) | | | 陶胎 蔓草文? | 陶胎 | 明青灰 明青灰 | 明青灰 明青灰 | 精良 灰白色 | 肥前 19C ~17C後 |
| 212 | 染付 | 仏飯器 環帯 | B区 SE3 | (5.6) | | | 陶胎 | 陶胎 | 深いブ ルー | 灰白 | 精良 | 備 後 19 C 末 ~ 20C |
| 213 | 染付 | 仏飯器 高台器部 | B区 SE1 | (4.5) | | | 陶胎 | 陶胎 | 深いブ ルー | 深いブ ルー | 精良 | 備 後 19 C 末 ~ 20C |
| 214 | 白磁 | 小茶 碗部 | B区 SE1 | 2.9 | | | 陶胎 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 備 後 19 C 末 ~ 20C |
| 215 | 青磁 | 碗 口縁~底唇 | B区 SE2上 | | | | 陶胎 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | |
| 216 | 白磁 | 皿 口縁~底唇 | B区 SE2上 | | | 3.6 | 陶胎 裏付露胎、砂付着 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 15~ 18C |
| 217 | 染付 | 皿 口縁~底唇付着 器部 | B区 SE2上 | (8.1) | | | 陶胎 草花文 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 19C 末 ~ 17C後 |
| 218 | 染付 | 瓶 口縁~底唇付着 器部 | B区 SE2上 | | | | 陶胎 露胎 | 陶胎 | 浅黄 | 浅黄 | 精良 灰白色 | 肥前系 19C代 |
| 219 | 陶器 | 甕 口縁~胴部 | B区 SE2上 400番 | | | | 陶胎 同転ナアによる凹線 | 陶胎 格子目当て具痕 | 黄灰 | 灰褐 | 3mm以下の黄灰・褐の粒 にぶい赤褐色 | 肥前系 17C後 |
| 220 | 陶器 | 撰鉢 口縁~底唇 | B区 SE2上 | | | | 陶胎 | 陶胎 磨目 | 暗赤灰 暗赤灰 | 暗赤灰 暗赤灰 | 1mm以下の白粒 にぶい橙色 | |
| 221 | 土師器 | 皿 底唇 | B区 SE3 | (4.3) | | | ナア 赤切り後ナア | ナア | にぶい 橙 | にぶい 橙 | きめ細か 1mm以下の陶粒 | |
| 222 | 染付 | 皿 口縁 | B区 SE3 | | | | 陶胎 | 陶胎 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 |

表3 柿迫遺跡 遺物観察表(4)

| 遺物番号 | 種別 | 部位 | 出土地点 | 法量 (cm) | | | 手法・調整・文様ほか | | 色 調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|------|----------|-------------|----------------|---------|-------------|-----|---------------------|----------------------------------|-----------------|------------|-------------------------|---------------------|
| | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 外 面 | 内 面 | 外面 | 内面 | | |
| 257 | 白磁 | 皿口縁~胴部 | B区 | | | | 施釉 | 施釉 | 灰白 | 灰白 | 精良 白色 | 15~16C |
| 258 | 白磁 | 中皿口縁~胴部 | B区 3BG造成 | (12.0) | | | 施釉 へら先片切彫、線刻 | 施釉 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 16~17C前 |
| 259 | 白磁 | 皿口縁 | B区 4DG造成 | (6.4) | | | 施釉 | 施釉 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 16~17C前 |
| 260 | 染付 | 皿口縁 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 波文 | 施釉 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 淡黄色 | 豊前系 16~17C前 |
| 261 | 染付 | 碗体部 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 蔓草文 | 施釉 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 豊前系 16~17C前 |
| 262 | 染付 | 皿口縁 | B区 3DG | | | | 施釉 輪の剥落 | 施釉 草花の透絵文母 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 豊前系 16~17C前 |
| 263 | 染付 | 皿口縁 | B区 | | | | 施釉 散花口縁 | 施釉 輪の剥落 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 豊前系 16~17C前 |
| 264 | 染付 | 皿底部 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 豊付露胎、砂付着 | 施釉 見込み玉取獅子文 | 明緑灰 | 明緑灰 | 微細な濁・黄濁・灰濁の粒 灰白色 | 豊前系 16~17C前 |
| 265 | 染付 | 皿体部 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 片へら切透弁文 | 施釉 四方辨文 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 豊前系 16~17C前 |
| 266 | 染付 | 皿口縁 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 | 口唇部露胎 施釉 | 浅黄 | 浅黄 | 精良 浅黄褐色 | 中国 海部 17C |
| 267 | 染付 | 碗体部 | B区 | | | | 施釉 雲嵐文 | 施釉 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 17C後 ~18C |
| 268 | 染付 | 碗口縁~胴部 | B区 | | | | 施釉 唐草文 | 施釉 梅文 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 18C代 |
| 269 | 染付 | 碗口縁~胴部 | B区 | | | | 施釉 唐草文 豊付露胎 | 施釉 | 明青灰 | 明青灰 | 精良 灰白色 | 肥前系 18C代 |
| 270 | 染付 | 碗口縁~胴部 | B区 4BG造成 | (4.3) | | | 施釉 豊付露胎 | 施釉 見込み/目隠し、砂付着 コンニャク印形五弁花文 | 灰白 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 肥前系 18C末 ~19C |
| 271 | 染付 | 碗口縁~胴部 | A区 表土 上層 | (10.5) | (4.1) | 6.0 | 施釉 よろけ縞文 豊付露胎 | 施釉 格子文 見込に草文 | 明オリ ープ灰 | 明オリ ープ灰 | 精良 灰白色 | 肥前 19C 中層 |
| 272 | 染付 | 碗口縁~胴部 | A区 表土 | | | | 施釉 虫巻文 | 施釉 格子文 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前 19C 中層 |
| 273 | 染付 | 碗口縁 | C区 厚層上 | | | | 施釉 唐草文 | 施釉 | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 肥前 19C前 |
| 274 | 染付 | 皿口縁 | B区 | | | | 施釉 | 施釉 麻刷目文 | 灰白 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 肥前 19C前 |
| 275 | 青磁 染付 | 蓋つまみ ~口縁 | 延 社 区 部 群 | (8.4) | わが (3.4) | 2.9 | 施釉 つまみ鳩部露胎 | 施釉 西方尊文 見込にコンニャク印形五弁花文 | 明オリ ープ灰 | 明オリ ープ灰 | 精良 灰白色 | 肥前 19C末 ~19C |
| 276 | 染付 | 碗口縁~胴部 | B区 4DG造成 | | | | 施釉 花卉文 | 露胎 輪の透れ | 明緑灰 | 明緑灰 | 精良 灰白色 | 肥前 18C代 |
| 277 | 染付 | 仏飯茶 高台部 | A区 表土 | (4.0) | | | 施釉 高台露胎露胎、砂付着 | | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 肥前系 19C代 |
| 278 | 陶器 | 碗口縁 | B区 | | | | 施釉 | 施釉 | にぶい 赤濁 | にぶい 赤濁 | 4mm以下の濁・灰白・黄褐色の粒 灰白色 | 肥前 15~16C |
| 279 | 陶器 | 碗口縁~胴部 | B区 | (14.5) | (5.3) | 4.5 | 施釉 豊付露胎 体部に3本の沈線 | 施釉 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰白色 | 18C 頃 |
| 280 | 陶器 | 碗口縁~胴部 | B区 4DG造成 | (10.4) | | | 施釉 | 施釉 | にぶい 黄濁 | にぶい 黄濁 | 精良 にぶい黄褐色 | 肥前系 18C |
| 281 | 陶器 | 碗口縁~胴部 | B区 | | | | 施釉 白化粧上 | 施釉 白化粧土 | 灰白 | 灰白 | 精良 灰黄色 | 肥前系 18C末 |
| 282 | 陶器 | 碗底部 | H区 | (4.4) | | | 施釉 豊付・高台内露胎 | 施釉 貫入 | 浅黄 | 浅黄 | 精良 浅黄色 | 肥前系 京色系 15C頃 |
| 283 | 陶器 | 燗鉢 体部~胴部 | B区 | (6.6) | | | 輪透れ | 組い御目 | オリ ープ無 | 灰濁 | 1mm以下の黄濁・灰濁・灰白の粒 灰褐色 | 在地区 18C |
| 284 | 陶器 | 燗鉢 底層付近 | C区 | | | | ヨコナテ | 御目 | にぶい 赤濁 | にぶい 赤濁 | 精良 にぶい赤褐色 | 在地区 明石 |
| 285 | 陶器 | 片口 口縁 | B区 | (21.4) | | | 施釉 | 施釉 | オリ ープ におき | オリ ープ | 精良 明緑灰色 | 肥前系 18C |
| 286 | 陶器 | 皿底部 | B区 4BG造成 | (5.5) | | | 施釉 | 露胎 | 灰白 | 明赤濁 | 精良 にぶい赤褐色 | 在地区 18C末 ~19C |

表3 柿迫遺跡 遺物観察表(5)

| 遺物 番号 | 類別 | 附 属 部 位 | 出 土 地 点 | 法 量 (cm) | | | 手法・調整・文様ほか | | 色 調 | | 胎土の特徴 | 備考 |
|----------|----|------------------|------------------|----------|----|----|------------|-----|-----|-------|-------|----|
| | | | | 口径 | 底径 | 胎高 | 外 面 | 内 面 | 外面 | 内面 | | |
| 287 | 陶器 | 火入れ 口縁 | B区 (9.2) | | | 締物 | 縞物 露胎 | 灰白 | 灰黄 | 特良 灰黄 | | |

表4 柿迫遺跡 土錘計測表

| 遺 物 番 号 | 出 土 地 点 | 法 量 (cm) | | | | 備 考 |
|------------|----------|-------------|----------|----------|--------|---------|
| | | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | |
| 199 | B区 P-11 | 残存長 4.4 | 1.3 | 1.25 | 4.2 | |
| 200 | B区 P-17 | 残存長 2.5 | 1.35 | 1.25 | 3.8 | |
| 201 | B区 P-29 | 残存長 4.75 | 1.4 | 1.2 | 6.7 | 「大」の刻字? |
| 202 | B区 P-32 | 残存長 4.3 | 1.18 | 1.01 | 3.9 | |
| 203 | B区 P-36 | 残存長 3.15 | 1.4 | 1.0 | 3.6 | |
| 204 | B区 P-36 | 残存長 4.0 | 1.1 | 1.0 | 3.0 | |
| 205 | B区 P-40 | 3.6 | 1.6 | 1.9 | 7.2 | |
| 206 | B区 P-40 | 残存長 3.55 | 1.4 | 1.3 | 5.0 | |
| 207 | B区 P-40 | 残存長 5.3 | 1.5 | 1.4 | 8.5 | |
| 223 | B区 S R 3 | 3.6 | 1.45 | 1.05 | 4.3 | |
| 240 | B区 4 B G | 残存長 4.9 | 1.85 | 1.4 | 9.7 | |
| 241 | B区 | 3.9 | 1.55 | 1.3 | 5.7 | |
| 242 | B区 | 残存長 3.7 | 1.4 | 1.4 | 4.0 | |

表5 柿迫遺跡 石器計測表(1)

| 遺物番号 | 器種 | 出土地点 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 石材 | 備考 |
|------|--------|----------------|----------|----------|----------|--------|------|----|
| 68 | 打製石鏃 | C区 3JG II層 | 1.6 | 1.15 | 0.3 | 0.4 | 黒曜石 | |
| 69 | 石鏃未製品 | A区 II層下 | 2.25 | 1.8 | 0.6 | 1.7 | 黒曜石 | |
| 70 | 石鏃 | C区 4IG III層 | 2.4 | 2.65 | 0.8 | 2.9 | 石英 | |
| 71 | スクレイパー | C区 III層上 | 6.45 | 5.85 | 3.3 | 108.5 | 頁岩 | |
| 72 | スクレイパー | C区 5JG II層 | 5.85 | 6.5 | 1.75 | 64.5 | 頁岩 | |
| 73 | スクレイパー | C区 5JG II層 | 7.7 | 7.6 | 1.55 | 102.0 | 頁岩 | |
| 74 | スクレイパー | C区 III層上 | 7.92 | 7.7 | 1.7 | 79.6 | 頁岩 | |
| 75 | スクレイパー | C区 6IG III層 | 5.3 | 7.8 | 1.1 | 52.4 | 頁岩 | |
| 76 | スクレイパー | C区 5JG | 6.5 | 5.6 | 2.0 | 55.5 | 頁岩 | |
| 77 | スクレイパー | C区 III層上 | 4.9 | 4.9 | 1.5 | 32.5 | 頁岩 | |
| 78 | スクレイパー | C区 5KG II層 | 5.45 | 4.15 | 0.9 | 17.8 | 頁岩 | |
| 79 | スクレイパー | C区 6JG II層 | 5.0 | 6.05 | 1.05 | 28.9 | 砂岩 | |
| 80 | スクレイパー | A区 II層 | 5.0 | 5.85 | 0.95 | 37.6 | 頁岩 | |
| 81 | スクレイパー | C区 III層上 | 5.4 | 2.65 | 0.7 | 10.7 | 頁岩 | |
| 82 | 二次加工剥片 | C区 4JG III層 | 4.55 | 1.7 | 1.35 | 6.5 | チャート | |
| 83 | 微細剥離剥片 | C区 III層上 | 2.45 | 2.3 | 0.5 | 2.1 | チャート | |
| 84 | 石核 | C区 6IG III層 | 9.9 | 5.1 | 3.05 | 206.5 | 頁岩 | |
| 85 | 石核 | A区 II層下 | 3.3 | 4.0 | 1.1 | 21.0 | 黒曜石 | |
| 86 | 石核 | C区 4IG III層 | 2.45 | 1.6 | 1.25 | 3.2 | 黒曜石 | |
| 87 | 石核 | C区 4IG III層 | 2.8 | 1.55 | 1.05 | 4.0 | 黒曜石 | |
| 88 | 剥片 | C区 4JG III層 | 2.65 | 1.1 | 0.35 | 0.7 | 黒曜石 | |
| 89 | 剥片 | C区 5JG III層 | 1.75 | 1.1 | 0.5 | 0.7 | 黒曜石 | |
| 90 | 剥片 | B区 3BG | 2.9 | 1.9 | 0.46 | 2.1 | 頁岩 | |

表5 柿迫遺跡 石器計測表(2)

| 遺物番号 | 器種 | 出土地点 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 石 材 | 備 考 |
|------|-------|----------------|----------|----------|----------|--------|-----------|-----|
| 91 | 剥片 | A区 II層下 | 3.33 | 2.5 | 1.4 | 6.4 | 頁岩 | |
| 92 | 剥片 | C区 4IG III層 | 6.65 | 4.5 | 2.4 | 59.7 | 頁岩 | |
| 93 | 剥片 | C区 SZ.1上 | 3.8 | 4.1 | 1.8 | 22.7 | 頁岩 | |
| 94 | 剥片 | C区 5JG III層 | 4.8 | 4.0 | 1.3 | 25.2 | 頁岩 | |
| 95 | 剥片 | A区 II層 | 4.3 | 3.5 | 1.4 | 17.8 | 頁岩 | |
| 96 | 剥片 | C区 | 4.65 | 6.5 | 1.55 | 33.4 | 頁岩 | |
| 97 | 磨製石斧 | C区 6IG III層 | 16.5 | 5.3 | 3.15 | 400.0 | 砂岩 | |
| 98 | 磨製石斧 | C区 4KG I層 | 7.7 | 4.95 | 2.1 | 119.9 | 砂岩 | |
| 99 | 磨製石斧 | C区 5JG II層 | (5.22) | 5.55 | 15.72 | 64.4 | 頁岩 (珪質岩?) | |
| 100 | 打製石斧 | C区 4IG III層 | 11.45 | 4.65 | 2.2 | 155.0 | 砂岩 | |
| 101 | 打製石斧 | C区 4JG III層 | 9.2 | 4.0 | 1.65 | 82.6 | 砂岩 | |
| 102 | 打製石斧 | C区 III層上 | 13.05 | 6.0 | 1.95 | 189.1 | 砂岩 | |
| 103 | 打製石斧 | C区 5JG II層 | 11.8 | 5.6 | 2.3 | 156.0 | 砂岩 | |
| 104 | 打製石斧 | C区 4KG II層 | 9.1 | 5.7 | 1.3 | 91.7 | ホルンフェルス | |
| 105 | 打製石斧 | C区 5JG II層 | 9.45 | 4.05 | 1.85 | 81.9 | 緑色珪質岩 | |
| 106 | 打製石斧 | C区 4KG I層 | 9.15 | 4.2 | 1.4 | 77.1 | ホルンフェルス | |
| 107 | 打製石斧 | C区 5KG II層 | 8.25 | 3.9 | 1.4 | 68.5 | ホルンフェルス | |
| 108 | 打製石斧 | C区 5JG II層 | 10.05 | 3.95 | 1.35 | 79.8 | ホルンフェルス | |
| 109 | 石斧非製品 | C区 5KG III層 | 4.5 | 5.3 | 1.7 | 44.5 | 頁岩 | |
| 110 | 石鏃 | AK II層上 | 11.8 | 11.1 | 4.75 | 696.7 | 凝灰岩 | |
| 111 | 石鏃 | C区 5KG II層 | (8.65) | 6.75 | 3.1 | 243.2 | 砂岩 | |
| 112 | 石鏃 | C区 5KG II層 | 8.95 | 5.9 | 1.8 | 143.8 | 砂岩 | |
| 113 | 石鏃 | C区 5JG II層 | 9.45 | 7.35 | 1.75 | 206.3 | 砂岩 | |

表5 柿迫遺跡 石器計側表(3)

| 遺物番号 | 器種 | 出土地点 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 石 材 | 備 考 |
|------|----|----------------|----------|----------|----------|--------|-------|-----|
| 114 | 石鏃 | C区 5KG II層 | 8.15 | 7.5 | 2.2 | 197.0 | 砂岩 | |
| 115 | 石鏃 | C区 4JG II層 | 7.9 | 6.8 | 1.6 | 115.6 | 砂岩 | |
| 116 | 石鏃 | C区 4JG III層 | 6.0 | 5.3 | 1.15 | 54.0 | 砂岩 | |
| 117 | 石鏃 | C区 5KG II層 | 6.3 | 4.1 | 1.05 | 37.6 | 砂岩 | |
| 118 | 石鏃 | C区 6IG III層 | 5.6 | 4.65 | 1.3 | 46.1 | 砂岩 | |
| 119 | 石鏃 | C区 6IG III層 | 4.95 | 4.8 | 1.5 | 50.0 | 砂岩 | |
| 120 | 石鏃 | C区 4JG II層 | 5.1 | 3.85 | 1.3 | 28.8 | 砂岩 | |
| 121 | 石鏃 | C区 6IG III層 | (2.85) | (3.9) | (0.9) | 10.7 | 砂岩 | 切目 |
| 122 | 石鏃 | C区 6KG II層 | 26.3 | 11.5 | 8.25 | 2600 | 凝灰岩 | |
| 123 | 磨石 | C区 5JG II層 | (10.7) | 9.45 | 59.62 | 812.4 | 砂岩 | |
| 124 | 磨石 | B区 3BG | 10.85 | 9.45 | 6.45 | 922.7 | 砂岩 | |
| 125 | 磨石 | C区 4KG II層 | 7.35 | 5.1 | 38.86 | 184.8 | 凝灰岩 | |
| 126 | 磨石 | C区 III層上 | 7.2 | 6.8 | 45.48 | 294.8 | 砂岩 | |
| 127 | 磨石 | C区 5JG III層 | 7.7 | (7.4) | 47.14 | 294.8 | 砂岩 | |
| 128 | 磨石 | A区 II層上 | (7.4) | 9.0 | 4.85 | 527.1 | 尾鈣酸性岩 | |
| 129 | 磨石 | B区 3BG | (9.05) | 8.5 | 50.55 | 519.7 | 尾鈣酸性岩 | |
| 130 | 磨石 | A区 II層 | 11.01 | (8.8) | 58.06 | 896.1 | 尾鈣酸性岩 | |
| 131 | 敲石 | C区 6IG III層 | (6.0) | 7.8 | 37.87 | 268.6 | 尾鈣酸性岩 | |
| 132 | 敲石 | C区 5KG II層 | (12.1) | 5.55 | 3.9 | 362.7 | 砂岩 | |
| 133 | 凹石 | C区 5KG II層 | (5.55) | 6.7 | 2.3 | 141.6 | 砂岩 | |
| 134 | 凹石 | C区 6IG III層 | (8.0) | 5.55 | 2.3 | 135.8 | 砂岩 | |
| 135 | 砥石 | 一拵 | 5.75 | 6.0 | 0.7 | 32.7 | 頁岩 | |
| 136 | 砥石 | C区 5JG III層 | 8.4 | 7.05 | 3.9 | 288.4 | 砂岩 | |

表5 柿迫遺跡 石器計測表(4)

| 遺物 番号 | 器 種 | 出 土 地 点 | 最大長 (cm) | 最大幅 (cm) | 最大厚 (cm) | 重量 (g) | 石 材 | 備 考 |
|----------|------|----------------|----------|----------|----------|--------|-------|------|
| | | | | | | | | |
| 137 | 石皿 | C区 3JG II層 | 29.0 | 19.4 | 10.1 | 6800 | 砂岩 | |
| 138 | 台石 | C区 4JG II層 | 16.85 | 16.75 | 4.8 | 2000 | 砂岩 | |
| 139 | 石皿 | C区 5KG II層 | (20.65) | (13.0) | 3.95 | 1400 | 砂岩 | |
| 140 | 石皿 | C区 5IG III層 | 14.0 | 10.3 | 5.2 | 1075.5 | 砂岩 | |
| 141 | 台石 | C区 4IG III層 | 19.8 | 17.9 | 6.8 | 3400 | 砂岩 | |
| 142 | 台石 | C区 5JG II層 | (13.9) | 11.6 | 6.9 | 2000 | 砂岩 | |
| 178 | 礫石製品 | B区 七塚上 | 10.0 | 7.1 | 3.5 | 575 | 礫石 | |
| 195 | 礫石 | B区 P47 | (9.7) | 6.6 | 5.6 | 3765 | 砂岩 | 根固め石 |
| 208 | 礫石 | B区 P11 | 6.05 | 2.45 | 1.35 | 28.5 | 泥石 | |
| 209 | 磨石 | B区 P38 | 14.3 | 11.0 | 5.65 | 1058.8 | 尾鈴酸性岩 | 根固め石 |
| 299 | 磨石 | C区 SC6 | (6.75) | (6.7) | 4.9 | 228.6 | 砂岩 | |
| 300 | 凹石 | C区 SC6 | 10.5 | 6.3 | 3.0 | 266.4 | 砂岩 | |

表6 柿迫遺跡 石塔類計測表

| 遺物 番号 | 層・種 部 位 | 出 土 地 点 | 長軸 (辺) (cm) | 短軸 (辺) (cm) | 高さ (cm) | 柄 穴 | | | 石 材 | 備 考 |
|----------|------------|---------------|----------------|----------------|------------|----------------|----------------|------------|-----|--------|
| | | | | | | 長軸 (辺) (cm) | 短軸 (辺) (cm) | 高さ (cm) | | |
| 176 | 五輪塔 火輪 | B区 土塚上 | 32.9 | — | 15.1 | 11.0 | — | 6.3 | 凝灰岩 | |
| 177 | 五輪塔 火輪 | B区 土塚上 | 36.0 | — | (13.0) | — | — | (3.6) | 凝灰岩 | |
| 188 | 五輪塔 火輪 | B区 P-45 | (31.0) | — | (14.7) | (8.8) | — | (5.6) | 凝灰岩 | 赤化している |
| 196 | 墓石 台座 | B区 P-48 | 26.4 | 25.8 | 11.3 | 17.2 | 16.5 | 1.8 | 凝灰岩 | 赤化している |
| 210 | 墓石 台座 | B区 SC3 | (14.2) | — | 9.0 | — | — | 1.7 | 礫石 | |
| 211 | 墓石 台座 | B区 SC3 | — | — | 9.6 | — | — | 1.0 | 凝灰岩 | |
| 289 | 五輪塔 火輪 | C区 3CG II層 | — | — | (11.0) | — | — | (5.4) | 凝灰岩 | |
| 290 | 五輪塔 水輪 | B区 造成 | 37.7 | 37.0 | 28.8 | — | — | — | 凝灰岩 | |

表7 柿泊遺跡 錢貨一覽表

| 遺物 番号 | 錢 銘 | 出土地点 | 分 類 | 初踏年次 | 錢 徑 (cm) | 孔 徑 (cm) | 備 考 |
|----------|--------|----------------|----------|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 194 | 元祐通寶 | B区 P 5 | 渡來錢 (北宋) | 1086年 | 2.5 | 0.57 | |
| 292 | 寬永通寶 | A区 | | | 2.5 | 0.62 | |
| 293 | 寬永通寶 | B区 | | | 2.32 | 0.66 | |
| 294 | 寬永通寶 | C区 4KG II層上 | | | 2.26 | 0.7 | |
| 295 | 無文錢 | B区 | | | 2.25 | 0.78 | |
| 296 | 無文錢 | B区 | | | 2.32 | 0.56 | |
| 297 | 半錢銅貨 | B区 4DG II層 | | 1873年(M6) | 2.2 | — | |
| 298 | 桐1錢吉剛貨 | B区 | | 1916年(T5) | 2.32 | — | 1921年(T10)製 |

第5節 まとめ

柿迫遺跡では、これまで報告してきたように大規模な造成が確認され、城郭との関連性が想定される幾つかの遺構・遺物が検出されたが、遺跡の全容解明までには至らなかった。ここでは、検出された遺構・遺物について若干の補足と問題点について述べたいと思う。

縄文土器について

縄文土器は早期と後晩期のものが出土している。1～18は早期の土器である。1～6は貝殻文円筒土器で、1は口縁端部に刻目、器面調整が外面横位の条痕とナア、内面ナアの特徴をもつ岩本式土器と考えられる。口縁端部に刻目を有する他の2～4と比べ刻目がシャープな山形を呈し器面調整も丁寧である。2～6は前平式土器である。口縁端部の刻目は幅広の凹圧刻目で、1条または2条巡るものが見られる。器面調整は外面は貝殻条痕、貝殻条痕とナア、内面はナア、ケズリである。5は平口縁を呈する。7は外面に縦位の貝殻突刺線文、内面ケズリの特徴をもつ知覧式土器である。角筒土器の可能性はある。8～18は口縁部が「く」字状に外傾し(10・11)、沈線文と刺突列点文、沈線文による区画間を網目状縞系文で充填するなどの施文特徴をもつ壺ノ神式土器の一群と思われる。小片であるため細分は困難であるが、列点文については突帯上に貝殻腹縁による刺突をするもの(8)、沈線間に貝殻腹縁による刺突をするもの(9)、棒状工具で刺突するもの(11～13)が見られる。

後晩期の土器は、C区基本層序の第II層から出土している。内外器面に貝殻条痕を施した後ナア調整を行う無文の深鉢や鉢、ミガキを施した精製の浅鉢、孔列文土器、口縁部に肥厚帯をもつ突帯文土器など黒川式土器(晩期中葉)に比定されるものがある。突帯文土器は口縁部外面に幅広の粘土帯を貼り付けたもので、断面形が台形(40・47)や鈍角三角形(42～46・48～50)を呈するものである。口縁部の肥厚などの特徴から一部は松浜式土器に比定されると考える。また、53～57の孔列文土器も口縁部に幅広の粘土帯を貼り付け肥厚させたものに連続刺突を行うもので、刺突は貫通するものとしいないものがある。これまでの調査例から孔列文土器の時期は黒川式土器の新段階から無刻目突帯文や刻目突帯文の時期まで残るとされており、当遺跡でも同じ成果が得られることとなった。

地形が傾斜地で木根による攪乱が多かったため、土層の堆積が安定しておらず明確な層別取り上げには困難を要した。よって、遺物の詳細な出土層位差を明らかにできなかった。

石器について

出土した石器の多くはC区の第II層および第III層上位から出土している。製品としてはスクレイパー、石斧、石鏃の出土が多い。スクレイパーは頁岩を利用石材とし、片面に自然面を残すものが目立つ。石斧は、断面が楕円形で頭部の細い棒状を呈する乳棒状磨製石斧(97)、平面形が楕円形を呈する打製石斧(102～104)、平面形が短冊状を呈する片刃打製石斧(106～108)がある。前者の磨製石斧は斧として、後者の打製石斧は土掘具としての機能が考えられる。遺跡が河川近くに立地するため石鏃の出土も多く、特に122は長さ約26cm、重さ2.6kgの大型のもので長軸の片端部に突起を作り出しユニークな形を形成している。

造成について

B区中央谷部に確認された大規模な造成である。造成は東西方向に開けたトレンチのみの確認であったため、土層断面で確認できる遺構状のものについての面的な広がりは捉えていない。よって土層断面から得られる情報に限られるが、造成についてまとめてみたい。B区西側の地山土を掘削して造成を行っている。地山を除く造成及び自然堆積層は大きく10層に分けられる。火山灰分析では⑩層には15世紀後半以降に降灰したとされる板島起源の文明白ボラが混在し、その下位には混在していない。②と④層は人為的に積み上げられた土塁状の高まりである。③・⑤・⑦層には水成堆積層が確認できるため、ある時期に溝状のものまたは窪みが存在していたと考えられる。⑩層中のアミグ層は礫群1に相当する層である。礫群1は法面造成の一過程で、法面補強を目的としたものと思われる。遺構構築面は⑩層中とその下の造成土中にも存在する。これらのことから造成の時期は近世以前で、⑩層より下の造成については中世の可能性も考えられる。盛り土②・④層や水成堆積層⑦の面のある時期の遺構としてみるか、造成の一過程とするかは明らかでなく、造成が数回にわたって行われたか、短期間に一気に終わったかは不明である。

掘建柱建物跡について

掘建柱建物跡は10棟検出し、その内9棟がB区に位置する。建物は地形に沿って谷を囲むように並ぶ。柱穴の遺物はSB3・5・7・9は中世の土師器や銭貨、SB4・8は中近世の陶磁器を出土している。切り合いと主軸方向などから見てSB2・3・5・9またはSB2・3・7、SB1・4・6または、SB1・4・8が同時期に存在した可能性が推定される。建物の重複と柱穴の切り合いが見られるが、建物主軸方向にあまり差がないことから、大きな時期差をもたずに建て替えが行われたことが窺える。

陶磁器について

輸入陶磁器は、白磁・青磁は15～16世紀、染付は明末16～17世紀初頭のものが主流となって出土している。12世紀頃に比定される同安窯系の白磁皿(243)が1点あるが、他に同類のものは確認されていない。国産陶磁器は、15～16世紀の備前焼、17世紀後半から19世紀の肥前染付や在地の陶器類が出土している。

本遺跡は、縄文時代の早期と後晩期、弥生から古墳時代、中近世から近現代と断続的に営まれた歴史を垣間見ることができる。城郭遺構としては、正確な時期決定のできる遺構が確認できなかったことから断言はできないが、立地条件や地形、大規模な造成後に建物を構築していることなどを総合的に判断すると、「中・近世城郭に関連する遺跡の可能性をもつ」として評価したい。

(参考文献)

- 九州縄文土器編年の諸問題—早期後半土器編年の現状と課題—九州縄文研究会鹿児島支部資料 九州縄文研究会 1998
- 「南九州縄文通信」No.14 南九州縄文研究会 2000.12
- 「王子原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第45集 宮崎県埋蔵文化財センター 2001
- 「右葛ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第21集 宮崎県埋蔵文化財センター 2000



柿迫遺跡周辺地形（西より）



柿迫遺跡周辺地形（東より）



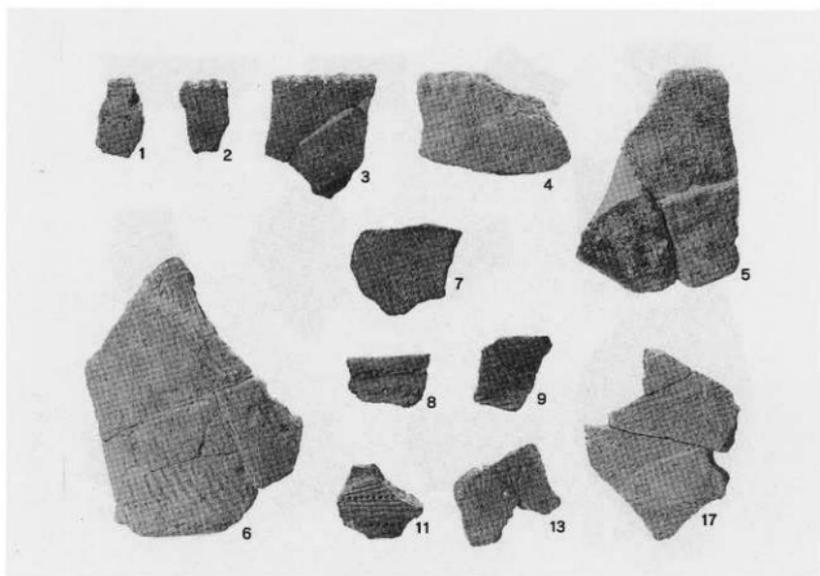
C区全景（東より）



D区全景（南西より）



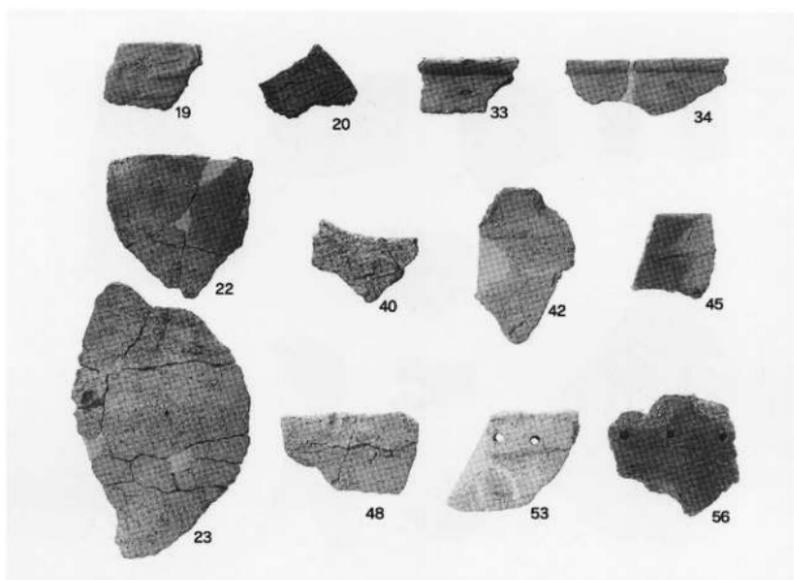
S I 1



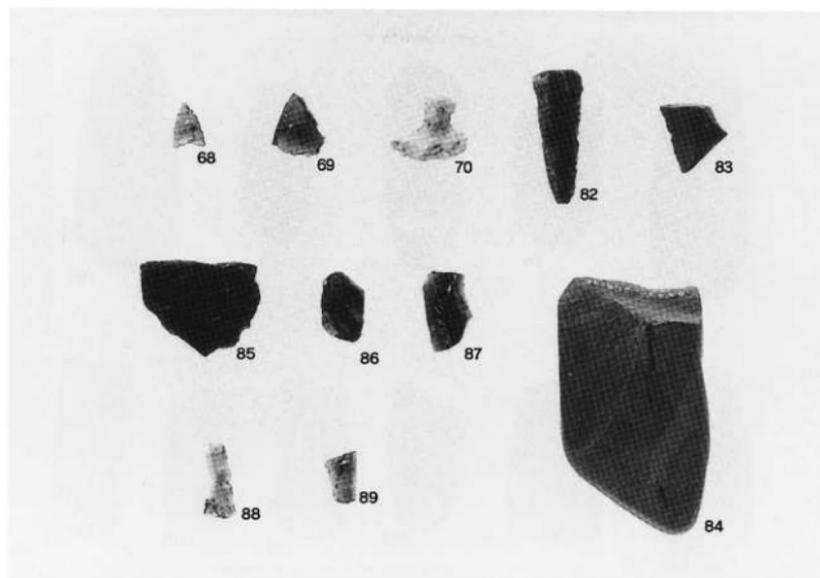
縄文土器 (1)



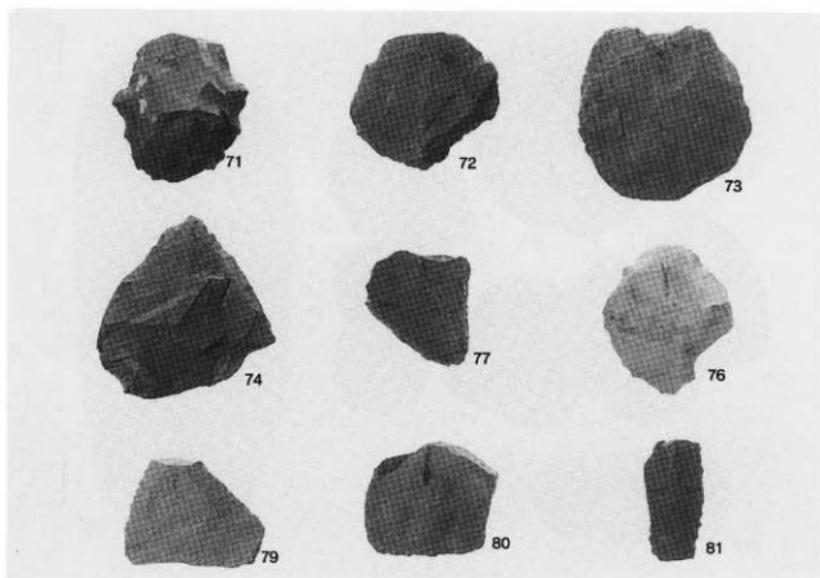
S Z 1



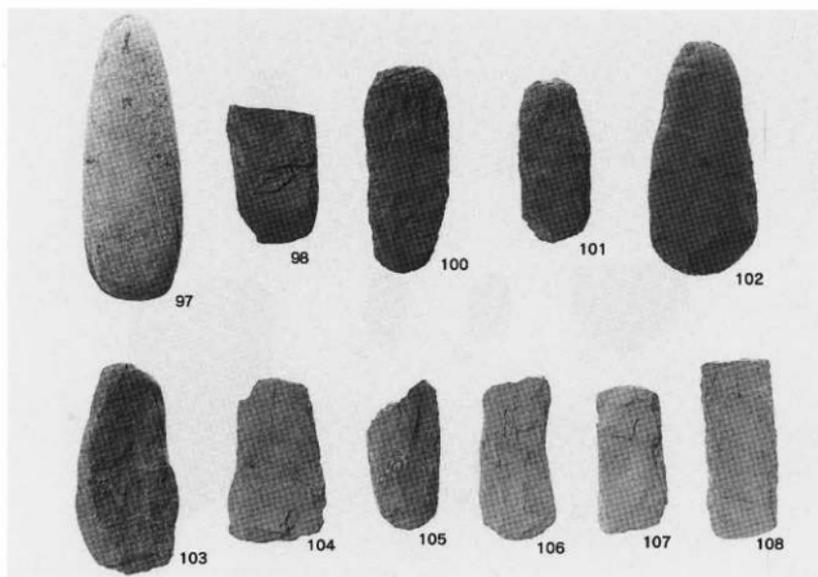
縄文土器 (2)



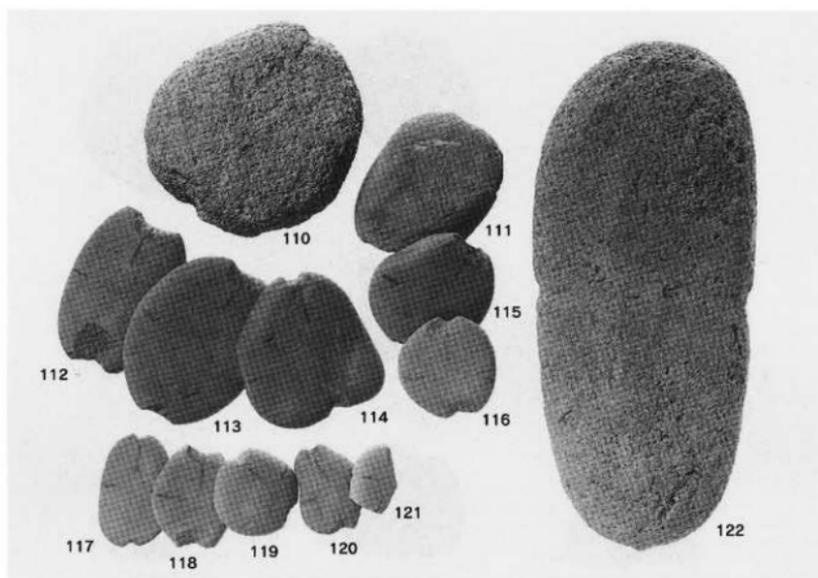
石 器 (1)



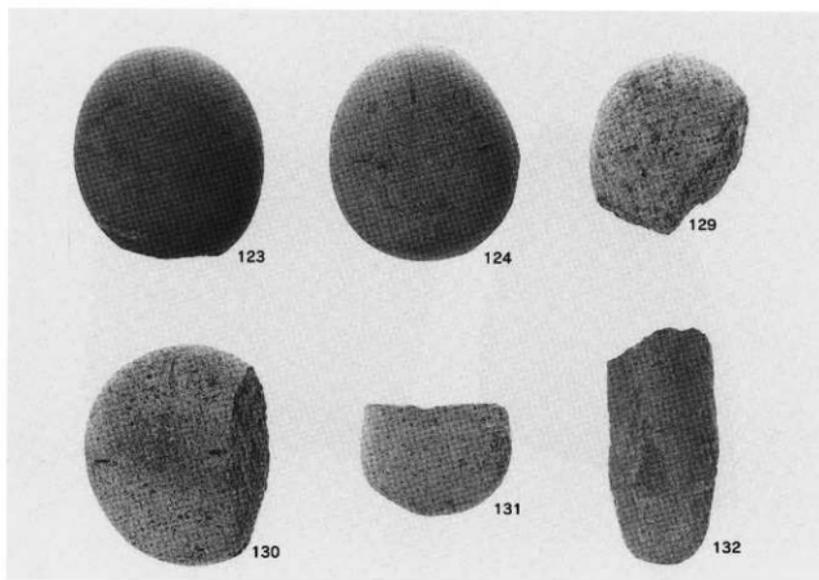
石 器 (2)



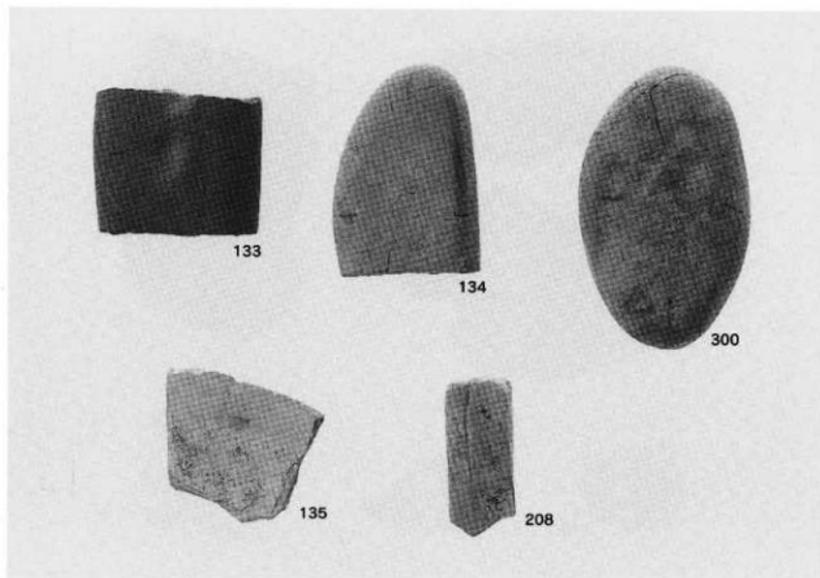
石器 (3)



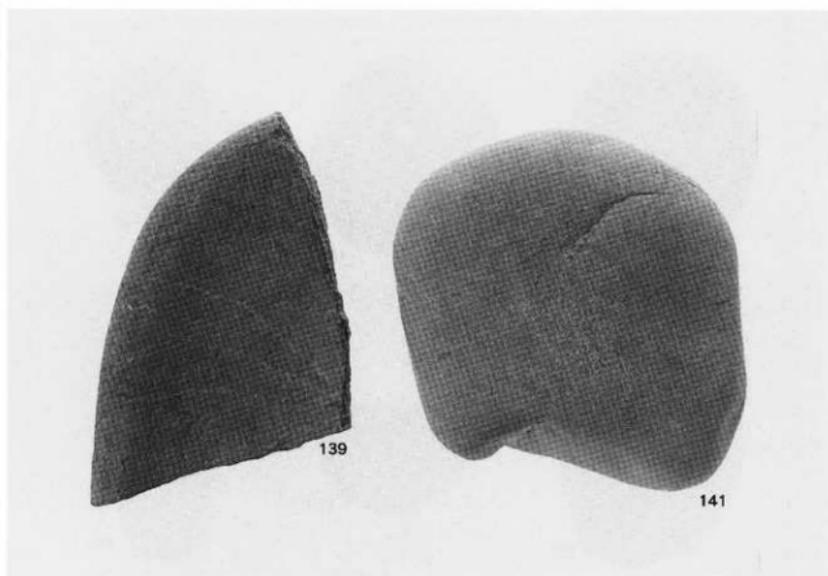
石器 (4)



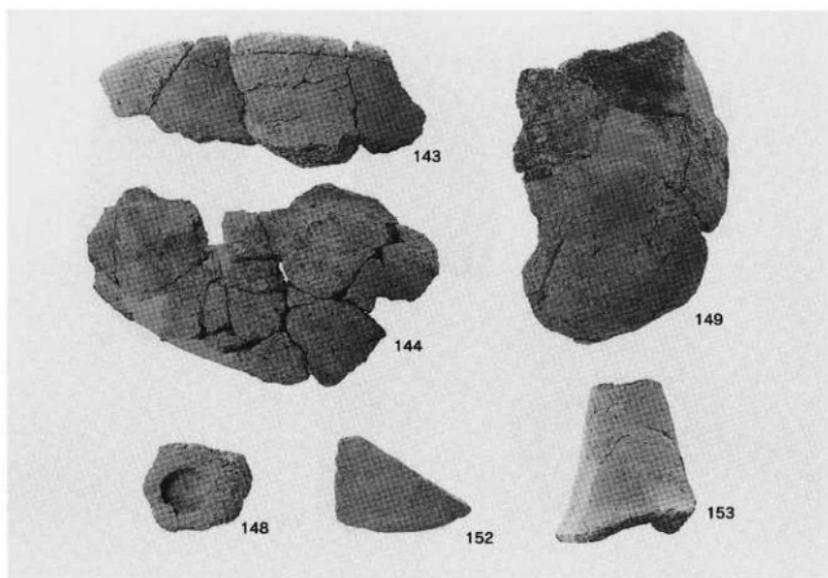
石器 (5)



石器 (6)



石器 (7)



弥生～古墳時代の土器



B区全景 (東より)



B区造成土層断面 (北東より)



B区造成土层断面（土壘状构造）



B区造成土层断面（水成堆積層）